に遊びしころ蒹葭堂を訪ひしにちばし待せ給われ其中の慰めにとて一帖を出せりいかなるものと開き見るに江戸の筆工の家號をちるしたる名紙といふものを一枚の遺漏なく集めありしとぞ是等の事を以て其好戔の勝れたる想像べし蒹葭堂の己をちらざる者をバ多端迂痴なりとして笑ひ己が相識をもて丁寧欵密として貴べりとかや一妻一妾あり且女子一人あり懇和してよく事へ雍熙の軌を失わずといへり蒹葭堂の先祖ハ後藤又兵衛基次といへり基次そのかみ河内國道明寺の役に戰死して其裔延助芳昌の子吉右衞門重周といふもの浪華に來り木村重直が家を繼げり蒹葭堂ハ重周が子なり元文元年十一月廿八日に生れ享和二年正月二十五日享年六十七歳にして沒す云々

攝津名所圖會大成　卷之二　畢

攝津名所圖會大成　卷之三

浪華東部續

僧契沖遺蹟　契沖之廟　同碑　古梅　古松　楓　什物
戰死墳
宰相山神社　稻荷祠　三光宮
玉造郷
名産唐弓絃
千利休宅古趾
辨天祠　觀音堂　白龍池　高臺
梅藥師
越中井
鎮守社
安威殿坂
小野勘解由古趾
顯如上人榧樹
古田織部正邸趾
仁德天皇古祠
石山御坊舊趾
難波森
本社　龜井水
森宮
朝日庵
猫間川
花圃
眞田別堡趾
山下清水
豐津神社　本　摩利支天祠
外濠古趾
烏山
殿　攝　社　山王社　天滿宮　住吉社
曾呂利邸趾
山吹之井
越中侯邸趾
鴻臚館古蹟
攝　社　末　社
上宮堂
焼が柳
加藤嘉明邸趾
國府古趾
蓮如松
玉造清水

名産黒門　瓜　二軒茶屋　玉造川　二

胞衣墳　妙法寺　十二所權現社　契沖母間氏墓　玉造江

廢寺古趾　笠縫島古趾　名産深江菅笠　法明寺　下河邊長流墓

左專道不動　阿遲速雄神社　通川　空山和尚古趾　雁墳

小女郎祠　大日堂　袋忠庵　並濱　劍堤

赤原社　大藏局邸趾

鏡如庵大師堂　俗ニとんどろの大師ト云

本尊如意輪觀世音　脇士　左藥師佛　右地藏尊

此地は涙華大師めぐりの道條にして四時ともに詣人間斷なし別て月毎の廿一日御茶湯日などいへるにハ貴賤群參して最賑わし

〔編者曰ク原本此ノ所半丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

同別堡古趾　俗ニ大師山といふ

當鏡如庵は寶暦十二年の頃法道自敎といへる法師廻國修業の滿願によつて營む所と也

庵室にかゝくる所の額にいわく

當庵の地ハいにしへ元和の仲夏兵革鬪諍の地たりしも今は佛乘の場となり菩提結
緣の雨に潤ふ事いと有難くぞおもふ

曇りなき法の鏡にかけ見へてこゝろの塵をはらふすゝしさ

玉造住和氣記隅謹詠

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

僧契沖遺蹟

東高津鉗指町ニあり寶光山圓珠庵といふ
契沖阿闍梨居住の菴室也

本尊不動明王　長凡三尺座像
生駒寶山北丘作

同御戸帳ハ
水戸黄門公御寄附ニして御紋付也

水戸黄門公御靈位　同佛殿ニ安す牌面ニ云
水戸侯故權中納言從三位源義公　靈位

裏ニ云　元祿十三庚辰十二月六日　寶壽　七十三歳

契沖阿闍梨廟　菴室の北ニあり傍ニ當庵歷代の墓あり

同碑　同庭中ニあり碑文ハ五井純禎の撰なり先版に碑銘として著すものハ安藤爲章の撰せし行實錄にして碑銘にハあらずよつて改め碑文こゝに記す

僧契沖沒實元祿十四年矣沒卽塔于圓珠庵庵在大坂東郊距今四十三年塋域荒蕪款字漫剝庵主源光憂之將修焉乃謀諸江友俊俊素嗜爲和歌學沖焉議便能合遂欲別造碑而記其顚末以列之家上乃俾余文之余以弗識沖且儒釋殊塗也辭焉俊曰沖雖則緇流善和歌及治萬葉集而有功于訓詁者也水戸義公之命詞臣爲萬葉集纂註也介而請沖固辭不就於是乎撰代匠記以獻之總釋副焉則公嘉其善解古言善釋古歌乃餽白金千兩絹三十匹以展謝之沖卽散贍貧乏修塔廟一錢尺帛不以隨身公又閱古今餘材抄至柿大夫赤石和

歌解ニ大服其卓見ニ乃復興書强起之辭曰林壑之性不嫺拜趨ニ終ニ不就所著漫唫集二十卷下河邊長流子序之厚顔抄改觀抄勝地吐懷篇各三卷勢語臆斷四卷源注拾遺名所補翼各八卷類字名所集七卷和字正濫五卷河社二卷代匠記二十卷總釋二卷古今餘材抄十卷沖爲人也寛厚長者謙恭愛人强識博覽旁通經史嘗爲人說萬葉集引證確實雄辯如注聽者悚然以爲古行秘書之流亞幼時長流子誦其篇什莫逆乎心乃請爲方外之交相與唱酬以爲得一鍾期焉其優浮屠之法卽具載水戸詞臣安藤爲明所撰行狀及僧義剛所錄逸事狀此沖之梗概爾余聞之嘆曰斯異乎世僧之撰其豈可以浮屠之故卻之耶乃取行狀讀之沖姓下川氏諱空心祖考諱元宜仕肥後守加藤清正考諱元全仕尼崎城主青山幸利娶間氏生沖五歲能誦定家所輯和歌百首七歲嬰疾幾死乃懇父母爲僧時年十有三矣性恬澹愛靜不欲主巨刹晚住持攝之妙法寺蓋爲邇母氏居也母氏終天年乃退居圓珠庵沒年六十二臘五十云

寛保三年癸亥孟冬　大坂　五井純禎撰

愛樹古梅　同庭中ニあり今枯木となれり

我庵の草木や何と人問ハゝまづ梅をこそいふべかりけれ　契沖

夕照楓　亭の傍ニあり

夕つく日曇ながらの入方に庭のもみぢハ時雨てぞてる　同

古松　同庭中ニあり

夕日さす片山もとや時雨らん松のなかばにかゝるむら雲　同

近世畸人傳云　僧契沖諱空心俗姓ハ下川氏其先ハ近江國蒲生郡馬淵村に住す祖父左衞門元宣加藤肥後侯に仕ふ父善兵衞元全尼崎青山侯に仕ふ師寛永十七年庚辰尼ケ崎に生る歲甫五歲母問氏口づから百人一首を授るニ不日によく記得す父も實語教を授るに又同じ父母おどろき怪しみぬ七歲疫を患へ巫醫ちるしあたわず師密に天滿天神の號百遍を書三七日一夜靈神を夢む自菅神の靈と稱して曰汝が至誠を感じて病を除き命を延ぶ他日僧となりて自ら勗めよと覺て後病愈ぬさて夢中のことを說て出家せんことを父母に乞とも聽ずありしかゞ自ら腥葷を斷て常に佛號を稱ふ父母その志を奪ふことを得ず遂に是を許して其近き今里の妙法寺圭定密師の弟子とす時に年十一歲圭定はじめ般若心經を授く讀こと四五遍にして空に唱へ且書す十三歲髮を薙て高野山に登り東室院快賢に學ふ賢又法器として是を導き法を傳ふやう〳〵時の爲に稱せらる寛文二年檀越の請により津國生玉曼陀羅院に住り既にして其城市に隣り喧しきを厭ひ壁上に哥を題して遁去一笠一鉢意にまかせて大和の諸

圓珠庵契沖墓碑

玉勝間云上畧　そも〳〵此庵ハもと和泉國和泉郡池田郷萬町村伏屋某の家地の内幣垣園といふに在てそこに住たりしを難波にハ後にうつして住るなりとぞ云々

霜の上にぬる心地して夏の夜のとこに影して月の涼しさ　契沖

獨のみなかむる秋の夕くれはさみしとやいはん悲しとやいはん　同

夕日さす木々の雫の庭におちて雪こそ雪に跡を附けれ　同

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

名區に遊ふ長谷に至つてハ食を絶念誦一七日室生にして煉行三七日に及ぶ　義剛遺事にハ幻身をいとひてこゝに形骸をすてんともせしといへり

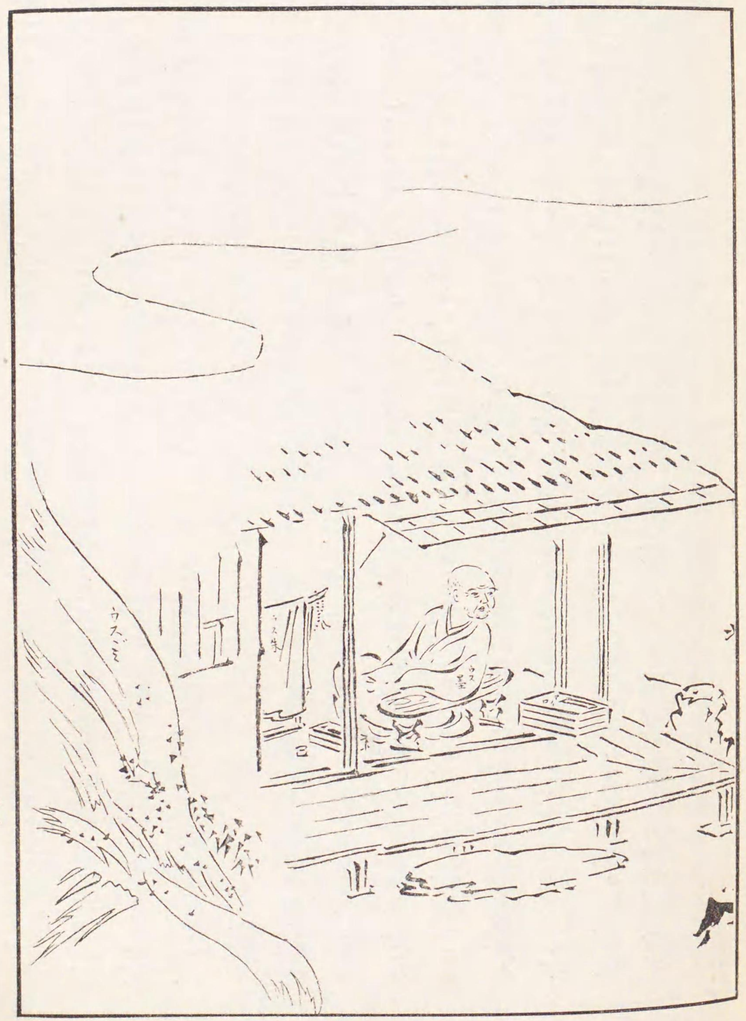
又高野山に登り菩薩戒を圓通寺快圓にうけ持律ます〳〵清苦す泉州久井の里に住て山水の奇を愛し住る事年あり三藏を盡し自他宗の章疏および儒典詩文集におきても渉獵せずといふことなし從ひ學ぶもの多し又池田川の側にゐて偏く皇朝實錄の古記をよみ專ら國歌を好みて廣く其書を探る延寶五年河内鬼住山延命寺覺彦に就て安流灌頂をうけ儀軌二百餘卷を手づから書て生駒寶山寺に納む同八年本師手定寂せるにより遺命して妙法寺に住持せしむ師原來このむ所にあらざれども其母氏老て此里に有をもて止事を得ずして住き別に一室を寺の傍にかまへて孝養す水戸西山義公長流が果さゞりし萬葉の注を阿闍梨に仰せ給ふとて召しかども是も又固く辭して參らず然れども公の古義を好み給ふを悅び遂に萬葉代匠記廿卷總釋二卷を作りて參らす開卷第一首雄略帝大御哥に籠の字訓をあらず古と訓來れるを加太麻と訓じ神代卷の無目堅間を證とす西山公その卓見を悅び且其おほす所に合ことを奇とし給ひ白金千兩絹三十疋を賜ひて是を勞ふ師すなわち寺院の修造に充かつ貧乏の者を贍して一も蓄へず又古今餘材抄を著す明石の浦の朝霧の歌古注眺望とし或ハ行を送るとせるものを非としこハ家山日に遠く前程限なき波の上朝霧朦なる間に漂ふ旅の懷を述ぶ故に紀氏も羇旅部に納ると說義公これを讀給ひ掌を抵て千古の發明とし書を給ひて一たび來り見ん事をふひ給ひしかとも林壑の性公侯に謁すること慣ハずとて遂に就ず母氏歿するに至つて院を退き難波の東高津に居を卜す　高津といへども甚僻地にして餌刺町と號ていまも畠など多き所也予殊更に往てゐれ

契沖阿闍梨自畫

圓珠庵所藏
立壹尺壹寸
横壹尺四寸
五分

水戸義公平日に阿闍梨の起居をとわせ給ふにより自ら畫きて斯る形容にて住りと言上て獻せられしとぞ其時二枚畫きみて一枚ハ安藤爲章へ送られ

しを後に此庵へ寄附せられしと也故に一枚は常州に藏り一枚は當庵に藏すといふ。



り圓珠庵といふ俗容を謝し清修自適す義公時に物を給り起居をとわせ給ふこと絶ず此公甍じ給ひて師も又續て寂す義公にあらずバ師の高きを知らじ師にあらずバ義公の選にあたらじ其終も又相須が如きもの實に千載の奇遇といふべしと義剛ハ書り水府の儒士安藤爲章命によりて數往來し說をうけ事をとふ師元祿十四年正月微恙にかゝり廿四日に至て病革る故其徒にこれを告且疑ふ所を正さしむ涌泉問曰師今阿字本不生域に住せるや否や答曰然りおよそ人平等にして差別あるべし泉曰平等差別異なること無か曰心平等といへども事差別あり差別の中心平等に當る老僧がことこれを記せと（此一條義剛遺事ニハ病中の自記を擧大意同しけれバ略す）廿五日定印跏趺を結びて逝す時年六十二庵後に葬る師爲人寬厚愛人恭謙能下る然も密教の上に邪義を說者あれバ是を闢きて避る所なし其論辨當時有識といへども當がたしとぞ且記憶比類なきことハ圓珠庵にして萬葉を說に古今の事實援引せる所の歌詠む始より思慮に亘らずして綿々口に絶ず連珠の函を出るがごとし或ハ人ありて師の古哥の記得をとふに三千首以上自ら知らずと答ふ所著厚顏抄三卷（古事記日本紀の詠哥童謠を注す）勢語臆斷四卷百人一首改觀抄三卷源注拾遺八卷勝地吐懷篇二卷河社二卷類存名所集七卷名所補翼抄八卷和字正濫五卷代匠記廿卷總釋二卷古今餘材抄十卷以上爲章著す行實に出す所斯のごとし又正濫の難に答書八卷義剛遺事にいふ此外予さる所雜記雜々記新勅撰の評二十一代集古今六帖の校合をはじめ物語の類ひに此師の書入有もの多し又其宗門の疏鈔若干卷其徒に傳るとぞ

右傳安藤年山爲章著所の行實に法系南山補陀洛院僧義剛錄遺事を錯綜折中して國字に譯して記す圓珠庵の墓前に建る五井氏の碑文其法に優なることハ此兩事狀に讓り唯國學に功あるよしばかりを錄せるハ道同じからざる故か世人もまた此長する所を稱へて其法德をとはざるのみならず或ハ僧なることさへ知ざるあり予師のために深く悼むがゆへに繁きを厭わず始末をあぐ安藤氏の書る行實の終に師歌學卓絶といへども是ハ餘事のみ哥學をもて師を論ずるハ師を知ものにあらずといへるこそ公論なるべけれ蒿蹊又按るに此師の哥學顯昭法橋の說を梯として古書を明らめしものと思し凡近世の人唯中川の流の說にあらされバ道の言にあらずとす是にもて過を過にて傳ふるが道なりといふ說さへ打これり此師此關を透過して一事一語徵をいにしへにとる其中或ハ過不及なりしもあらざらめと一たび此道ひらけてこそ是に次ていふ人も出きれバ然れバ千歲の一人といわんも過言にあらじ詠哥ハ家集漫吟近く刻につくよしなれバ唯其境界の哥少し安藤氏の出せるを

あぐ

山家のこゝろを

忘れても都の方になかめせば風吹とぢよ峯のふら雲

山里に折たくましばめづらしく花より外の香に匂ひつゝ

山川の龜の心をこゝろにて尾をひくことをならひてぞすむ

述懷のこゝろを

我こそハ蘆の下をれ一節のありとも誰かありと見るべき
山にてもなほ忘られぬ此身ゆゑ心の猿ハ靜けくもなし
世の中の重荷ハはやく捨ながらかるの市路にうることもなし

二十九になりけるとし

我身いまみそぢもちかの鹽竈に烟ばかりのたつことぞなき

饅たえけるとき

やくと見て思ひの門ハ出しかど煙絶てハ住かたもなし

など長流の哥よりもやわらかにおほゆ又此師の國文高古にして趣味あり尤學べき躰なり

寺記ニ云　元祿十三年冬の始めつかたより西山公御こゝち平ならずと聞へ其頃住吉の神木風も吹ぬにたふれしを師ハ最心に懸あやしまれしがいよ〳〵御病重らせ給ひて終に同じ年の師走初六日にかくれさせ給ひぬと再び聞へけれバ遙かにかなしみ奉りて

さもこそハ西山おろし吹はてめいかで通ひし住吉の松

と斯詠じ送られ今より後我を知れる御方の世を去給ひてハ存へても益なしなどうめきて師も病の床に臥し終にハ翌巳の年睦月末の五日に示寂し畢ぬかくて水戸侯の臣安積氏をはじめ儒士のかたゞ〳〵より追慕の詩歌

卷手向給ふ中に安藤爲章の文に曰何くれにつけても殘多かることのみにて先君に別れ奉り又もや師がみまかりし事をいたみて

ほすひまもなしや袂の露涙こそにことしの歎き重ねて

の詠にせめて此庵の跡たえず永世に傳りねかしとて

圓なる珠のひかりもおしてるや難波の蘆の世々に殘らん

什物

阿闍梨畫像一軸　同遺書一軸　同行實　安藤爲章書　一軸　廿五條袈裟　鐵鉢一　食具一式

此餘書籍の類舉て枚がたし畧之

仁德天皇古祠

圓珠庵の西に隣る林中にあり今眞田山の御旅所ト云此地天正十三年磐船社遷座のとき一端(旦)此所に遷せし古趾なりと聞ゆ

仁德天皇社

同向ひ觀音院の内ニあり此地ハいにしへ聖德太子の造營ありし社のありし古趾にして桓武天皇の御宇京師平野に遷座ありし趾ならんかといふ

眞田別堡古趾

同東南に一堆の丘あり俗に大師山といふ慶元の頃眞田幸村の籠る所といふ一說に此地ハ出丸といふにハあらず捨郭なりともいへり又出丸ハ今の清水谷の地なりとも云

宰相山

仁德天皇社

三光宮

子狐のかくれ貌なる野菊哉　蕪村

願かける又くわんほどく眞田山穴のあくまで神をいのらん　白緣齋

雉子なくや宰相山の朝ほらけ　六々閑人

〔編者曰ク原本此ノ所一丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

此地を宰相山と號することハ相傳ふ慶元の合戰の時京極若狹宰相高次卿在陣し給ひ眞田の壘の巽より寄給ふ

といふ古趾なりとぞ俗に眞田山とよべるハ誤なり　眞田の壘の古跡前に出

山下清水

右同所東の傍ニあり清泉にして甘味なり神趾小橋車に忍墳井の清水といふと凌雲記に見えたりといへり然れどもいまだ予凌雲記といへる書を見ず

烏山

眞田山の北一丁許人家の裏ニあり小高き丘にして古松生茂リ古墳のごとし今稻荷の叢祠を置り傳云此地をおかせバ必ず祟りありと按るに貴人の墳ならんか

玉造郷

金城の南ニあり上古玉造の人の住し古趾といふ

按ずるに皇國ハ神代より玉を以て重寶とせし事古き紀等に明らかなり

日本紀云　玉作部遠祖豐玉者造玉　云々

同一書云　玉作遠祖伊弉諾尊兒天明玉所作八坂瓊之曲玉　云々

同一書云　玉作上祖玉屋命　云々

同一書云　櫛明玉神爲作玉者　云々

同垂仁記一書云　三十九年五十瓊敷命に十筒の品部を賜ふ中に玉造部ありされバ何れの御代まで玉造部有

名産唐弓弦

狐王廟靜接金城　廟畔路通縱又横　行見家家奇事甚

女兒纖手掣長鯨　源華城

名物じやほかにたくひい浪花がた綿うつ弦の玉造とて　鷄成

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

しにや銀ハ天武天皇の御代に初て出金ハ文武天皇の御代に初て出れハ上古ハ玉造部を國々におき給ひて玉を以て寶とし諸色を交易なせしことゝらる

古事記垂仁天皇の條に　惡作玉人等皆奪其地故諺曰不得地玉作也ト云々

和名類聚抄　駿河國駿河郡下總國匝瑳郡埴生郡陸奥國磐城郡玉造郡土佐國安藝郡等以上玉造といふ地六箇所あり當國の玉作ハ類聚抄には見へずといへども日本紀仁賢卷に難波玉作部鯽魚女といへる婦の事見へたれバ往古此所にも玉を造る人の住たるにより鄉名とせしと知べし

玉ノ字古者作王三畫皆均自秦更隷ヲ始加ヲ點ヲ其點在下ノ畫之傍者寶玉字在中畫ノ傍者ハ玉工人ノ字也　云々　和漢三才圖會

先版攝津名所圖會玉造岡の條下に云　往古四天王寺をこゝに建させ給ふ時伽藍の瓦を此地にて造り初しより此名ありと上宮太子の本願緣起に見へたり又本願寺蓮如上人の傳記にも出せりとあれども瓦を造るをもつて玉造の名あること當らず瓦を造ハ瓦造とも言べきをいかなる由緣にて斯る說ありや瓦を以て玉と號るぞ最をかし

名産唐弓弦

玉造の鄉中に是を製し賣ふ家許多あり其數あげて枚へがたしさるほどに此地の婦女子平生に鯨の筋を割て弦に製するを手業とす是他邦にすくなき職にして浪花の一奇といふべし

按ずるに木綿彈弓ハ其初ハ竹弓に綿糸の撚繩を以て弦となし竹篦を用てこれを彈く呼で手弓といふ然るに明曆

年間華人木弓を長崎人に傳てより始て木をもつてこれを作る長さ五尺ばかり鯨筋を以て弦となし小槌を用て之を擊彈く呼で唐弓といふ今盛に世に行わる弦の製法ハ鯨の筋を水に浸し割て縷となし復撚合て髻のごとく長數丈にす爾後鰾を煮て其中に投し取出して柱を二本立てこれを抗引微乾し熱湯を注ぎ晒し乾す如此すること四五度かくて後瓦を以てこれを軋摩ハ全く弦と成り

千利休宅古趾

玉造禰宜町安堂寺町通北へ入東側ニあり

俗に利休やしきト字す今俗家と成

利休井

同宅地にあり利休平生に汲て茶湯に用ゆる所ト云

茶人系傳云初稱納屋與四郎沙界今市坊人也姓田中氏其先仕于室町家爲同朋名云千阿彌因後改千氏號抛筌齋利休居士嘗爲普通國師剃髮弟子受法諱温茶道於道陳紹鷗二居士而大成於其道蓋令茶道有四一曰能和二曰能敬三曰能清四曰能寂因茶祖珠光ノ故事所立云遂以茶道仕右府信長公後仕太閤秀吉公領三千石受命改定茶法損益補否之精一無可捨其法徧行于海内爲列國諸侯所重世以稱百世之宗師蓋元龜年間因正親町上皇之勅製茶具奉之賜居士號初薙髮謁古溪和尚爲參學徒窮妙參立殆盡力某年擲資財架閣於紫野

山門ノ上而置諸尊像及己肖像ヲ豐臣公怒之爲罪實天正十九年辛卯二月廿八日也年七十四葬紫野聚光院牌面云利休宗易居士云々

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ千家第宅　利休井　ト題シ　口切に堺の庭そなつかしき　芭蕉　爐ひらきに日をゑめしのゝ土榮かな　嵐雪　ト書入レアルモ稿圖ナシ〕

〔編者附記原本此ノ所五行空白〕

豐津稻荷神社

玉造稻荷町ニあり此地の生土神とす夏祭六月晦日　秋祭九月十五日

御火燒十一月八日又二月四月初午の日馳馬の神事あり

本社　倉稻魂神　相殿　稚日女尊　月讀尊　軻遇突智命　下照姫命

攝社　天照太神宮　八幡宮　三神社　住吉　猿田彦　祇園

山王權現社　祭神大己貴尊　役小角作　摩利支天社　祭神武雷命　作同上

右兩社ハ其はじめ御城内山里の丸に鎭座ありしを承應三甲午年土岐山城守殿保科彈正忠殿兩侯より奉納によつてこゝに遷座し奉る所也ト云

菅神御直筆にして高辻中納言

天滿宮　總長卿の御副翰あり

住吉祠　□□□あり石刻の神像にして いにしへ傳法の沖より出現と云

辨財天祠　白龍池の傍ニあり

長樂寺觀音堂　舊ハ寺院別なりしが今ハ本社の北傍ニあり本尊十一面觀世音　脇士毘沙門天 不動明王ともニ聖德太子作又御自作十六歳の尊像を安す

攝陽群談云　本尊觀世音菩薩ハむかし聖德太子守屋の逆徒を滅し給ふとき稻荷神に祈り終に本願のごとく也因て自ら十一面大悲の像ならひニ多聞不動の像を彫刻して三軀相ともに安置す建武年中の兵亂に像厨子を出て和州室生山の岩窟にあり泰平と成て境内の池水に光を放ち白龍東に飛去て再び尊像を移す慶長元和の兵亂に至て亦然り紀州高野山千手院谷妙慶院靈夢に應じこゝに送る此時慶安年中なり

白龍池　觀音堂の傍にあり社司の云　其先ハ星が池と稱せしが白龍出現し て觀音の尊像をもとに仮せしむるよりして斯ハ名づけりと云

高臺　本社のうしろニあり東の方ハ河内大和の山々眼前につらなりて 風景斜ならず其はじめの樓臺ハ豐臣秀頼公の造立なりと云

神輿舍　表門の内北傍ニあり六月卅日祭禮の節神輿 清水谷の御旅所へ渡御あり至つて賑わし

抑當社ハ人皇十一代　垂仁天皇の御宇十八年己酉の勸請にして下照姫命を下殿として祭り奉るよつて姫の社と唱來り倉稻魂命を同座に祭れり此神ハ外宮御神體豐御食津神と御同體也異名によつて豐御食津を中略し豐津の社と稱し奉る夫玉造の號ハ神代の時玉屋命此地に於てはじめて玉を作らせ給ふ所なり玉屋命の御裔ハ舊事記に出たり又三代實錄に奉授下照姫命從五位下勳八等」云々

往古下照姫命倉稻魂命を上の社と號し其後二社を造營して稚日尊女月讀尊を中の社と號し軻遇突智命を下

の社と號し三社を齋祭來りし所に建武の兵亂によつて神體を守り奉り大和國に退き世治りて後今の社地より凡坤方にあたれる栗岡山高神といふ地へ五神を一社に勸請し奉り夫より稻生五幸大明神とあらため社家三十六人を以て祭禮を務めしに又々天正の亂に灰燼となり其後慶長八年癸卯高神の土地にて豐臣秀頼公再興し給ふ奉行ハ片桐市正加藤左馬介なり其後寛永八年辛未に至りて當地へ新たに造營し遷宮し奉る則ち今の本殿なり　舊地ハ尙田圃の字ニ高神といひて其名殘れり今ニ當社の抱地也　尤其古ハ境内廣く神領も許多にして卅六家禰宜居住せり今尙禰宜町の名存れり且稻荷門前町同中之町同新町等の名いづれも社地の遺名なりとぞ　社說

因云寛政元年五月下旬より當社地に砂持といへる事大に繁昌せり是ハ東堀の川より砂を淺あげ眞田山の傍邊に積をき夫より氏子の町人本社へ運送して社地を清淨にする事にぞ有ける然るに漸に賑しく成行につけて頓て上町よりも大勢出向ひ又ハ船場嶋の内其餘市中色里よりも老若男女の差別なく打つれて運ぶ程に終にハ浪花中ハ言もさら五里十里の遠きより羣集ひて砂を運べるぞ奇異なり夫のみならず浪花市中より奉納として金銀米穀夥しく寄附しつゝ或ハ思ひ〳〵の練ものを出せる故に是を見んとて貴賤をわかたず雲霞の如く羣集し恰も鼎の沸るが如し實前代未聞の一奇事にして今尙人口に膾炙せり

地藏堂　高臺の下の邊りニあり本尊地藏菩薩ハ八尾樂山上人開眼也此堂のほとりハ凡て一堆の丘山にして櫻楓數株ありて景色よし此地ハ天保八年猫間川を浚し土砂を以て積ところにして往古よりの丘にハあらず則その故由を標燈の軸に勒して詳にす其文ニ曰

豐津稲荷神社

吹風の玄くるゝ松いみとりにて秋の色なる朱の玉垣　知家

玄ら雪や倉稲魂の造り場　素外

漠々黄雲接翠微　平郊十里帶殘暉　叢祠秋晩游人少

只見老農荷稲歸　蒔田雲處

〔編者曰ク原本此ノ所貳丁挿畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

稲荷夏祭禮

神輿渡御

荒和の神のあらきをやはらけて

あさの夕にみそきをそする　家隆

禪林寺殿七百首

さはへなすあらふる神にみそきして

民玄つかにと祈るけふ哉　御製

〔編者曰ク原本此ノ所貳丁挿畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

天保八年冬十一月浚横水使南北相通以便運漕其土砂積如丘山數十歩又植之櫻樹楓木凡數十百株以引遊人亦以助民業既而功成諸商賈始得遂其業可謂　公恩與水深矣於是釀酒家某等與野里嵩年試之建砦標燈使人不迷於夜行且勒其故以表昇平之餘澤云

天保十年己亥春正月　　鶴亭散人謹誌時年八十六

梅藥師堂

右同所の北ニ隣る堂前に紅梅數株ありよつて名とす元祿寛永の年間高譽上人植るところといふ如月花のさかりにハ雅俗つどひて美觀を賞す

本尊　瑠璃光佛　石の座像長凡二尺一寸　○享保十五年酉冬高譽上人岩崛を造りて本尊を此内へ納め奉ると云

寺記云　當醫王尊ハ往古弘法大師在世の時藥師十二神將の法を修し給ふに誦經の聲に隨ひ庭上の石震ひ動くを見給ひて是ハ正しく靈石なりと知しめし南無醫王善逝普く衆生に二世の利益を與へ給へと無二の丹誠を抽んで神咒數萬遍念誦のうちに彫刻し給ふ靈石醫王の尊像なり將當境に還座の濫觴を尋るに此地いにしへハ玉造山醫王院と號せし密院なりしを時の院主同列生玉の西岸へ移し給ふといへり是故元和の頃誓閑といへる法師其舊跡たる事をふりこゝに草庵を結び居住し心中に瑠璃光佛を求め得て此地に安置せばやと思ひけるが一時求法のため泉州槇尾山に詣で一院に寄宿しける其夜の夢中に聖僧來り我を速かに汝か許へ還行すべし衆病悉除の誓約を滿せんと靈夢を蒙り翌日古堂を見亘せバ靈檀の傍に石體の尊像安座ましませり實に昨夜の夢の告こそ此尊像

梅藥師堂

面白くよむことかたき石藥師くちをとぢたる未開紅かな　梅好

植ぬしは世話をやくしの寺にさく花も匂ひもるりこう梅なり　雅樂

紅梅や染る手間ほど咲をくれ　桴仙

紅梅やもう冴かへる色てなし　冬柱

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

遼第宅

茶人系傳云

杉本甚右衛門或作彦右衛門又作薪左衛門剃髪號坂内宗拾

住沙界受香技於志野宗心尤好茶事昵近豐臣公稱曾呂利者

其異名也或云紹鷗門

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ遼定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

の佛勅なりと思ひ感夢の次第を院主に語り頻りに乞うけ終に尊像を供奉し還り稍て一宇の小堂を營み自ら藥師寺と名づけ此尊を安置し恭敬なし奉るに世俗あるひハ岸の道場と稱し參詣日を追て繁く利生月を重ねて多なり然るに法師の滅後にハ優婆塞休古といへる者跡をつぎて持念せしが元祿丙子年藤澤遊行上人回國修行の砌當尊の靈驗を傳聞し來詣し給ふに絶世の佳景無雙の境地なれバ求得て佛閣を建立し閑居の地となし永く尊像を恭敬し奉らんと思ひ則翌年の春終に得て以て門弟の僧廓山を守護と定め新に三間四面の瑠璃殿を造營ありといへども半削にしていまだ瓦も葺ざるに此上人幾程なく化緣薪盡て攝州兵庫の築嶋にて遷化し給ひ本尊守護の僧力を失ひけれバ生玉明神の別當何某求取て城北の街に佛閣を引移し明神の御旅所を興起して本地佛となし奉らんと計り守僧に密談ありしを近隣の老若つたへ聞てこハ思ひもよらず此尊ハ往昔より數回告夢の佛勅ありて當境に安し來り奉る靈佛なるを今更他所に遷座あらん事是最佛意にそむけりと競ひ罵る程に守僧も心に任せがたく暫らく猶豫したりける折から泉州堺遍照寺の住職に高譽上人といへる大德ありて此尊の靈驗を蒙り給ふ事あるによりて是を再興して門弟の僧を持主とし半削の堂舍を修補し本尊鎮座永世不易の地となし給ふ誠に此尊ハ祈るに衆病悉除身心安樂の現益をあたへ念ずるに速證無上正等菩提の當益を施し給へバ老若男女祈求するに隨ひ所願皆以て成就せずといふ事なし尚委しくハ本緣起に見へたり又此上人生得病身にして自ら短壽ならんことを慮り隱遁の志深かりしが一時何となく氣分鬱々として不食し給ひぬれバ住吉津守寺へ五

十日佛詣ありしに一日彼寺内にて老翁に遇ひ互ひに御堂の端に休らひふばし閑談し給ふに老翁の曰凡佛像も因縁の厚薄に依て利益の淺深ひとしからず今浪花玉造の里なる石藥師堂の如來ハ祈るに現益新なる事我よく是を知れり至りて祈求し給へかしと語しかバ實にもと點頭し敎に任せて當堂へ詣し除病を祈り給ふに感應むなしからず病患不日に快然せり此時心中にあわれ此佛閣を修覆せばやとおもひ給ひて終に是を求め頓て此地に蟄居し破壞せし堂舍を修造し地形を平にし衆木を植へ殊更紅白兩樹の梅をもつて本尊の常花に擬へ給ふに多年を經ざるに此木大に盛長し其名四方に聞へ春毎に難波津の男女つどひ來つて美觀を賞す故に上人梅花詠賛の和語を作て云

蘭の梅がえをのづから　三世のほとけに手向草　難波の里のもろ人も　花咲ころハ集ひ來て
まづ浩然の氣を養ふ　無遮の心施の隔なき　ながむ心もうらゝかに　けには齡を延のみか
花にうかれてはからずや　一稱一禮せし人も　衆病悉除の誓願の　醫王の益に洩なまし
たゞし草木もおのがまゝ　よしとハいへどあしき枝　折て木立のよきを見て　人もそだちと思ひなバ
道の敎のはしなれや　まづ屈曲に梅も又　性にまかせて流し枝　手向の梢ゆるやかに
供養の心せまからず　花のさかりの春の日ハ　色香にめでず彼國の　寶の樹をハ思ひやり
冬の木の葉の落る日も　常ならぬ世によそへ見て　いとふ心の緣とせば　とかぬ御法と思ふべし

奇なる哉近年人多く梅藥師と呼ぬれバ名詮自性の德新にして產婦祈求すれバ梅花の綻るごとく平產安全の人餘多なり殊更高譽上人ハ深緣の靈佛なれバ感應水月のごとく日頃の持病も稍かるくなり剩七旬の齡を持ち洛東眞如堂勸化の師と成てハ十五間四面の本堂を建立成就し爾のみならず女院（東山院皇后　承秋門院）御所の御招請に預り院參のうへ宮中に於て說法し給へバ御聽聞數度にして御結緣ふかく信州御增進日課念佛御信受ありしかバ官女皆皈依淺からず洛中洛外の老若化に隨ふこと草葉の風に靡くがごとくなりしも是偏に當尊の冥慮の深かりし故と思ひ給ひ御所より拜領の錦織金襴の九條の袈裟　同座具　水精琥珀兩珠百八の念珠　又ハ眞如堂大勸進修行の銅鉢　或ハ圓光大師直作月輪御影　弘法大師自筆の御影　幷に舍利寶塔其餘所持の佛具日課名帳數帖（五百人授與）靈寶餘多當堂へ奉納ありて如來永代の什物となし殊に多分の祠堂銀を奇附（寄）し本尊恭敬常行の資糧に備へ則上人入定の地と定め且門弟尼衆勤行の道場となし給ふなり尙くわしくハ高譽上人の緣起運靈の靈驗記等に見へたり事繁けれバ畧之

池内道和のぬし石藥師の梅の花見に行て

狂哥續置土產　梅に火をともす火打の石藥師どこがよつてもこゝがかち〳〵

とあるに我もこゝかしこの梅を見て

梅がえに置ぬる露の玉造瑠理光によつて枝ぞのびぬる　貞柳

安威殿坂

右同所門前の小坂をいふ一説ニ此通ハいにしへの大和街道なりしと云

傳云　豐臣家の近臣安威攝津守の邸宅ありし所なりと云又一説ニハ此坂の北側の屋敷に秀頼公の嬖妾おあい殿と申せしが住給ひしゆへ斯ハ名くるとぞ此阿愛どのハ元和の亂に秀頼公の息女萬姫君阿愛殿の生所也　阿愛どのと兩人新宮左馬之助といふ者はたらきを以て城内より尋ね出し後藤莊三郎預り奉る爾後京都東山松嵜の上人又々預り奉り兩女ともに尼となし參らせけるにより命を保ち給ふと云　或云城中にて自害し給ふとも

曾呂利邸趾

右坂の東の辻北へ入八尾町ニあり

曾呂利狂哥咄云　往古太閤秀吉公の御時御そば去ずの御伽に曾呂里といふ者あり此者の本名ハ新左衞門といふて泉州堺南の庄目口町の内に淨土宗の寺内をかりて居住せし刀の鞘師なり細工に名譽を得て小口より刀をさし入るにそろりと鞘口よくあふ故に異名をそろりと言けるが秀吉公へ召出され常に御伽をなすに輕口の頓智噺の上手ゆへ御機嫌に預り出頭せしなり然るに秀吉公の御祕藏の松枯けれバ尊慮にかけられ御機嫌すぐれさる所へそろり罷出御祕藏の松の枯るとハ限りもなき目出たき御事御小性衆お硯御祝儀に一首仕らんとさら〳〵と書て

照覽に入奉りける

御祕藏のときわの松ハ枯にけりおのが齡を君にゆづりて

秀吉公御感ありて能こそ祝ふたりそろりに金とらせよと有ければそろり承わり有がたき仕合ちかし只今御金を拜領仕るよりハ日ごとに君の御耳をかゞせて下されゝハゞ御金に勝り有がたからんと申上れば太閤おかしく思しめして夫こそ安き事毎日かけよと仰下されければそろり悅び諸大名御登城御目見へを見かけてハ其儘太閤の御耳をかぎけれバ大名衆我身の事を呼き申上るやと心もとなく思召て曾呂里に我も〳〵と詔ひ内證より金銀を送られけれバ俄に有德になれり云々　其餘紙袋を米藏にきせての狂哥木釜のはなしにて流石の秀吉公に手をとらせ奉りしなどの古き咄みな人ゝ忘れる事なれバ言に及バず名譽なる狂哥ばなしの上手也かくて心地わづらひて今端の時太閤より辱けなくも上使を給わり何ごとにても望みハなきかとの御上意あれバ別に望みも御座なくハ冥途に御座ある御一門樣方へもし御書にても遣ハされゝハゝ片便宜にてハ侍へども遂け申上べしと事きれるまでおどけ申けるとなん咄のみに非ず詩哥にも携り艶しかりし男にて今に名譽を殘せり云々

越中侯邸趾

越中町にあり承應年間一丁目ハ御城組屋敷となれり二丁目より人家建つゞけりすべて細川越中侯のやしき趾なりとぞ

越中井

同町ニあり右やしきの臺所の用水なりとぞ

鎭守祠

同かぎや坂の下人家の裏にいなりの小祠ありこれも右やしきの鎭守なりしといふ

古田織部正邸趾

金城の南玉造口榎の大樹南東角ニあり今朝比奈氏柘植氏久保田氏等三家の地所ト云

山吹井

朝比奈氏の宅地ニあり織部正常に愛し茶の水に汲ところなりとぞ

茶人系傳云　古田織部正諱重勝一作重能性嗜茶事能識鑒古器嘗宗易錄茶法百箇條授重勝雖宗易之弟子多織部獨得其宗者也織部復以之授遠州其一篇織部未必所安處也姑立條目爲俾人疑以問其言似不足者然默觀之表裏精粗其歸一耳利休之後同有樂稱宗匠以茶事爲　台德君師範曾見春屋國師爲參學弟子扁所居曰印齋元和元年一作六年庚申六月十一日有罪自殺謚金甫宗屋居士石牌在大德寺中三元院

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ「古田邸宅山吹井」ト題シ「山吹や露いとふ垣ニ夜の雨　樹々ニ咲ても岸のふり　五筑」トノ書入レアルモ構圖ナシ〕

「山吹や何處

加藤嘉明邸趾

二本松町ニあり傳云いにしへ奥州二本松の下民こゝに引移りて住居せしゆへに町名をせり然るに後所がへありて今ハ武家の屋敷町となれり

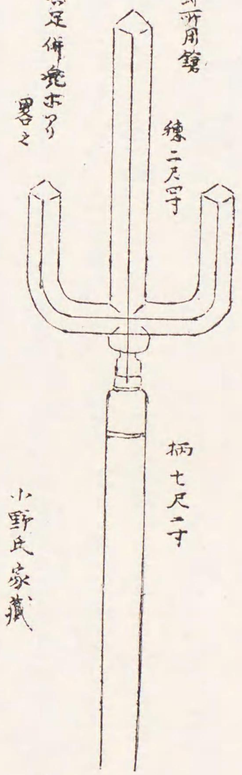
加藤左馬之助嘉明ハ始淡路の志知に居城し後に伊豫の松山に移り慶元の役に軍功ありて寛永四年に奥州會津に移住して四十萬石を領すといふ按するに會津二本松等あわせて四十萬石を領するを以て彼地の下民多こゝに來りて住せしが後に邸宅ハ廢すといへども二本松の者の多くのこりて住けるゆへに町の名となりしなるべし又按るに加藤家の邸を俗に二本松の邸と稱せしもや知ず然れバ二本松の邸趾なるを以て二本松町といひしならん歟然るに玉造引地の時是を長堀高橋の邊へ替地ありしにより今も長堀に二本松町といへる名のこれり爾して其趾ハ武家方の住居となれり今俗に六軒邸と號す

小野勘解由高必遺趾

杉山の南側小野氏ニあり

家記云　高必ハ敏達天皇五世左府橘ノ諸兄公二十七代小野丹波親充嫡小野

丹兵衛尉高次長子也以爲本多中務大輔忠勝之甥依　東照神君台命屬出雲守忠勝之手元和元乙卯年五月七日於四天王寺口忠勝一同討死子時四十三歲葬坂松山一心寺峯礀殘雪居士贈了信院弟高寛朝右衞門領六百石奉仕于將軍家高必嫡男高房稱傳左衞門浪華金城之騎士被召出慶安元戊午年移浪華今猶子孫連綿以弓衞鳴于世



〔編者曰ク原本此ノ所七行空白〕

顯如上人榧樹

同所本間氏の庭中にあり傳云顯如上人越前國より將來して植る所なりといさゝか通例の榧と異なりト云

按するに此傍邊ハ往昔石山本願寺の舊趾にして釋光佐北越より携へ皈りて此に植るなるべし今尚傳へ知て宗門の徒尋來て拜するよし聞ゆ

杉山

金城の巽にあり算用郭と號す御要害の地なるべし一堆の丘にして杉の大樹生繁れり故に杉山といふ春暖のころハ都下の貴賤こゝに來つて遊宴す

鴻臚館古趾

國分町にあり當地ハいにしへ國府なりしゆへ國府町といへるを國分町と言訛る也といふ則鴻臚館の地に國府を移されしこと國史に見へたり

杉山

さゝかにのくもゐへ紙鳶を上る子に丁稚は尻からくり出す絲　貞旨

千尺長絲百箇童　繞城雀躍逐春風　何人換却魯班術

無數紙鳶上半空　荒井鳴門

たゝ詠めてもよい空にいかのほり　阿當

吹け〳〵と花に欲なし凡巾　千代

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

續日本後記云　仁明天皇承和十一年十一月戊子攝津國言依去天長二年正月廿一日承和二年十一月廿五日兩度勅旨定河邊郡爲奈野可遷建國府而今國弊民疲不堪發役望請停遷彼曠野便以鴻臚館爲國府且加修理者勅聽之云々

按するに其始ハ大江の岸の邊に國府ありしを後に此鴻臚館を修理して國府を移されしと覺ゆ然れハ此國府のありし古蹟ハ則鴻臚館の趾なるべし

日本紀云　舒明天皇二年十月壬辰朔癸卯　天皇遷於飛鳥岡傍是謂岡本宮

是歲改脩理難波大郡及三韓館云々

按ずるに是より以前　神功皇后三韓退治の後彼地より貢物を獻るの使來朝の時止宿饗應の館を建させ給ふと見へて是を難波館といへり其　舒明天皇の御時に改めて修理し給ふにより三韓館の名見れたり又鴻臚館の名ハ前にいふ續日本後紀に始て見たり爾有バ前の難波館も後の三韓館も鴻臚館も同所なる哉詳ならす此にハ唯鴻臚館を修理して國府を移されしを以て證とす又先版名所圖會にハ三韓館の古跡眞田山の北壹町許にあり字を唐居殿といふと見へたり今其所を尋るに分明ならず故に此に擧すといへども若其地を得て詳なれバ是ハ往古の館或ハ三韓館といひし趾なるべし鴻臚館と稱へし時ハ今の國分町にありしなるべし尙委くハ前卷に論

ず

國府古趾　右に同じ委しくハ前卷に記す

夫木　都人ありやと問ハゞ津の國のこふのわたりに佗とこたへよ　法性寺關白

同　尋ねつる心もさらで津の國のこふとも人の告るなりけり　公任

石山御坊舊趾　今の金城の地なりといふ傳云　大手御門前のかたはら井あり是いにしへ石山本願寺のありし時より井なりとぞ

此御坊ハ蓮如上人八十二歳明應五年の秋より草創にて上人の隱居所の心得にて建營ありし地なり爾後三十六年を經て山科の御坊炎燒につき眞影を此地に移し本寺となる則顯如上人の時代なり斯て草創より五十年の間本寺たりしが織田家と合戰に及び終に紀州鷺の森に移住す

按ずるに近世まで御城を石山の御城とも稱せしと見へて西鶴が一目玉鉾ニ云　猶君が代ハさゞれ石山の御城とも申侍る云々

難波森　森村森町の名存せり今の森の宮の地其舊趾なりと云　推古帝の御宇新羅國より獻ぜし鵲　二俣を此森に飼しむるによりて鵲の森とも云とぞ

森宮　蓮如松　上宮堂　朝日菴

花圃　猫問川

尼寺やたゞ菜の花のちるこみち　言水

我かちに咲てもやさし草の花　五筑

〔編者曰ク原本此ノ所貳丁插畫ノ鑑定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

日本紀云　推古天皇六年夏四月難波吉士磐金至自新羅而獻鵲二侯乃俾養於難波杜因以巢枝而產之云云

本草綱目云　鵲乃烏屬也大如鴉而長尾尖嘴黑爪綠背白腹尾翮黑白駁雜上下飛鳴以音感而孕以視而抱十二月始巢開戸背太歲向大乙知來歲風多巢必卑下故曰鵲知來猩猩知往又云鵲有隱巢木如梁令鷲鳥不見人若見之主富貴也鵲至秋則毛毨頭禿其性最惡濕靈能報喜故名喜鵲云云　按ニ本朝に常に有ざる鳥なり

森宮

右同所ニあり例月　八日　十六日　祭祀行わる詣人輩をなして最にぎはし

本社　橘豐日尊　上宮太子御父帝　相殿　素盞烏尊　用明天皇也

攝社　五幸神社　本社の後ニあり宇賀魂神を祭る　九條殿御染筆の神號　大國社　大巳貴尊を祭る

眞目社　布留魂神を祭る　阿野公繩卿御染筆の額あり

淸妙靈社　神主ノ祖近藤重重の靈を祭る　宇佐社　八幡大神　春日社　天滿宮　一乘院宮眞敬法親王御筆

七數社　袁田彦命　宇須女命　神祇社　八十萬神

淡嶋社　市神社　忌部社　蛭子社　事代主社　戸隱社　一九ノ社
鎭宅社　鹿島香取社　間人皇后社　伊勢兩皇太神宮遙拜所等あり

社記云　當宮用明天皇と申奉るハ聖德皇太子の御父帝にして太子此地に始て四天王寺を興立し給ふ時御父の神靈を伽藍の鎭守として祭らせ給ふ所なり爾後今の荒陵山に移し給ふといへども當宮ハ其儘にて此地に殘させ給ふ故に往昔ハ大殿巍々として神領も許多なりしが永祿元龜年間兵火にかゝり且神領も空しく廢し終にハ形ばかりを存するのみされば今尙宮の東に天皇田　太子田　御供田など字せる地あり是則ち古の神領の地也又社頭の傍邊に金堂　講堂　駒が池　塔の趾　大池の淵などいへる字の地あり是みな四天王寺の舊蹟の證なりと云

例祭　正月八日御弓神事幷福引　五月八日御田植幷大祓　六月卅日夏越の大祓　九月十六日新嘗神事
十月亥日御亥猪神事　十一月八日御火燒神事

右神亥の內夏越の大はらひにハ神輿渡御ありて殊さらに賑わし又五月八日の御田植の神亥ハ甚古雅にして奇觀なり其大概を左ニ記す

當日神前において御湯を供じ神樂を奏し五幸社に早苗を供ふ五幸社ハ宇賀魂神なればなるべし爾後御田植の式あり先そのはじめ神前より行列をたゞし出る凡其次第第一番ニ麻上下着用の男壹人淨水をちらして道を淸む次に壹人切幣をちらす夫より猿田彦鳥冑赤袍を着し鉾に榊のえだ木綿を切かけたるこれを杖につき歩む　次ニ白き尉の面をかぶり烏帽子淨衣にて白の幣帛をさゝげゆくこれに續きて黑き尉の面に折えぼうし淨衣たすきかけにて裾高くからげ鞾のはゞき草鞋をはき木にて作りし鍬をかたげ哥をうたひゆく次ニ早乙女大ぜいいづれも小女にて花笠をかづきたすきをかけ出立すこぶる美艷なり夫より笛つゞみ太鼓のはやし方おの〳〵折ゑぼうし素袍はかまの裾高くからぐ神主衣冠仕丁靑侍者もち等これに從ふ斯有て神前より本社の東

森宮御田植
神楽方
社壇造蓋
山下勝
陪膳
一人
座上下
神楽
切幣
一人
右同
三方箱、望み入
懸目笠
奥高面烏帽子
鉾神木綿
幣帛
白き面、面ヲかぶり
幣ヲ捧ぎり
鍬持
黒き鍬、面ヲかぶり
浄衣
笠ハき
鍬ヲかつぎ行

田植ノ
苗輔
馬田の
苗
苗山
早苗
大笠
花笠キル
笛
笛ヲ吹
素袍ハク
太鼓
ハ
神主
衣冠
侍
仕下
宮司
仕下

かたわらを巡り後の方を西へ出五幸社に詣て供へある所の早苗をさげて早乙女おの〳〵是を携ふ夫より本社の西のかたわらを南へ鳥居をいで東の神田の南かたハらを東にいたり神田の四面を三たびまわる其度毎に早乙女のたづさへたる早苗を神田の内に投入るを式とす爾後社司の宅にかへる此時神田の東傍なる平地に檀（壇）をかざり神饌を供じ神樂を奏する事ありて終る　當日ハ遠近より詣人羣をなして至て賑わし

龜井水　本社の東田圃の中ニあり

入湯浴屋　社家ニあり常ニ龜井の水をくみて湯とし諸人を入湯なさしむ萬病を治すとそ故に男女ともニ病苦の者こゝに來つて浴すること間斷なし　傳云　むかしハ温泉なりしとそ枕草紙ニ云　湯ハなゝくりの湯　有馬の湯　玉造の湯とあり尤永く絶たりしを寶暦年中再興におよぶよし聞ゆ　草外笛一名大穴の笛ト云用明帝の御所持と云○夢殿の枕○驛路の鈴三國の土湯釜唐天竺日本等の土を以て作る所ト云

蓮如上人祈松　社頭ニあり高十二間餘　幹の廻三間半餘

往昔本願寺八代蓮如上人文明年間泉州堺御坊に逗留の砌當社に詣て上宮太子の御父帝の神靈なるを以て一宗海内に弘通し信心の門徒繁昌せんことを此松下に座して祈願し給ふ故に上人祈の松と號すとそ實數百歳の老松なり

上宮堂　同所ニあり本尊聖德太子の像御自作と云并ニ蓮如上人自作の像を安す當堂ハ文政九年新たに營む所なり例年二月廿一日廿二日太子忌を修行す又毎月廿四日廿五日蓮如上人の忌日を以て當堂において一向宗の法話あり門徒の老若羣參していと賑わし

又玉造の内に蓮休寺といふ本願寺末派の道場あり蓮如上人堺より京師へ往來の時とゝに休み給ふゆへ此名をよぶ今ハ休の字を久に改めしと云

朝日菴　森の宮の南にあり日蓮宗の菴にして尼僧住す

本堂　清正公　肥後國熊本より勸請する所といふ　左日蓮上人像　右藥師如來　妙見尊星

三十番神社　本堂の左ニあり

稲荷祠　本堂の右ニあり　高津明神と號す

當庵ハ舊來此地に在て妙見尊を安置し鎭守稲荷社あり然るに去る天保戊年猫間川御浚の時浪華十二藥師第一番の藥師堂　世俗寅藥師と稱す　を此に迁し佛殿を建營し今の如くなれり右藥師如來の尊像ハ行基菩薩作にして其初堀江御池通に有しよし堀陽群談に詳なり清正公の神像も則ち同年肥後國より勸請する所なりいづれも靈驗あらたなる故詣人四時に間斷なし

玉勝間云　新井氏の藩（翰）幹譜にいはく朝鮮國慶尙全羅道等の水營の軍官年毎に日をうらなひて諸營戰艦をあつめて海にうかべて海神を祭るわざあり窮にて人像を造り是を射てもづむ此事彼國の人ハ祕すれども能きけバ清正を呪詛するわざにて其人像ハ清正にかたどれる也然るに彼國のよく射ものといへども恐れて中ることあたわざるを何れの年にか有けむ射あてたる者有けれバさうなき高名と言罵りけるに其射たる者忽ちに物に狂ひてぞ踊りはしりける其親族ども清正の靈をまつりて深く罪を謝しけるにぞ彼人もうつし心に成にける夫より後ハい

よ〳〵皆恐れて射者みな中らんことを恐るとぞ又本朝寛文の中ごろ彼例の祭に水營の軍艦ども海にうかびけるに俄に風はげしく起り浪あらく立て艦ども多く破れにける是清正の祟り也とていたく恐れけるよし對馬の國人に密に承りぬと加藤氏の條に見へたり宣長これを讀て詠けるハ

いそしきや此おみにこそたらし姫神の命の御たまたひけめ

かの朝鮮のえだちにもろこしの國まで大御國の光をかゞやかせしハ此主になむ有ける

猫間川

森の宮の東にあり南北に横たわり平野川に合流し鴫野の橋下よりして末ハ大川に出る

一說に此傍邊往昔猫間家の所領たりし故斯ハ號けりと按ずるに猫間中納言清隆卿同光隆卿といへる有光隆卿ハ家隆卿の父にして京師壬生の邊領地たりし故今尙壬生に猫間墳といへる有當地も全く是に准するならん乎光隆卿ハ壽永二年の頃木曾義仲の許に行て大に輿さめ逃皈られし由木曾物語平家物語等に見へたり　或云百濟川に對して高麗川といひしを後世猫間川と訛る

なりと云是非をあらず

當川條ハ往古よりの流れにして其幅最廣く今花圃となりし地所ハ皆川幅なりしを後世流作して終に今の如くなれりとぞ其上後年ふバ〳〵埋れ小船の往返も便絶て唯名のみ存して溝のごとくなりしを天保八年酉の冬より土地永久繁榮の基にとて　公の御仁惠あつく莫太の金銀を入させられ霜月の末より許多の人夫を以て川幅を廣くし底を深く浚しめ給ふにより春に至つて成就し通船心の儘になりて其便宜なること甚しさる程に新に橋を架し堤にハ花ある草木を植て眺望を增ものから春秋ともに貴賤打羣て風景を賞す

花圃

右川の西岸の圃ハ一圓に草花を植て農業とす故に玉造の花圃といふ　すなわち猫間川の流作なり

此花圃ハ瞻望のためにあらず作りて花の市に販ぎ立花生花神佛の供花の料となすもの也さる程に春ハ高麗菊仙臺萩　金錢花　牡丹　芍藥より夏ハ石竹　美人草　百合　夏菊　射干　秋ハ檀特　仙翁花　紫苑　龍膽　鳥頭桔梗　苅萱　女郎花　菊ハ種々數多く冬の水仙　寒菊まで花に絶間のあらざれバ四時ともに此邊ハ一圓に錦繡の褥をしくが如く眺望ことに美景にして浪花の一奇觀といふべし

姥が柳

右川の邊りにあり事實詳ならずといへども時〳〵あやしきことありて人をなやますとぞ故ニ近頃より毎年三月十六日猫間祭とて祈禱をなすより其事やみしといふ

玉造清水

下清水町ニあり清泉にして世に名高し今其地を失ふ原來清水町の名ハ是より出る

天保八年猫間川大浚の時通船便宜のため此清水の地まで新に穿ち開發ありしにより清水ハ川の中になりて空く

其名所を失す

名産黑門瓜

平野口町にあり黑門ハ今土地の字にのこりて門あるにハあらず古城の惣門の趾なり
又上本町八丁目札の辻にも黑門ありしとぞ是天王寺口の惣門なりといふ

平野口町に黑門といへる地あり此所ハ往昔古城の時の外廓の地にして黑く塗たる門ありし故に斯ハ稱り其黑門ハ亂後一心寺へ下されける則今の一心寺の表門これなりとぞ元祿の頃まで此黑門の趾に礎のこり有しといふ扨又此地において夏の頃名産の越瓜を鬻ぐ是によつて名とす其出地ハ此所より東南にあたりて今里　中川　深江　片江　荒川等の邊の埴土に相應してよく生立なり就中荒川の産よしといふ第一瓜の形最長大にして其色頗る青く風味殊に佳なり此瓜粕漬にして諸國に商ふ浪花名産の一とす

〔編者曰ク原本此所壹丁插畫ノ豫定ニテ　名産黑門瓜　ト題シ　玉造りの黑門瓜はおのつから奈良漬ニゆく筋にぞ有ける　柱影　ト書入レアルモ稿圖ナシ〕

狂　哥　黑門といへども色ハあをによし奈良漬にして味をふろうり　貞　柳

二軒茶屋

玉造東の出口にあり南北の兩側に茶店あるゆへ名づく
旅行送別の地にして至つて賑わし

當地ハ浪花より南都に趣(赴)く街道にして玉造の東出口なり道の左右に茶店あるゆへ俗に二軒茶屋と號すされバ花咲そむる頃より伊勢參宮の鹿島立を見送る驛路の馬のはなむけや暫時わかれの酒宴に醉て出るあり入來あり其餘信貴の月參　生駒の浴湯詣　鷲尾の花　髮切の郭公　奈良の晒賣　河内通ひの木綿買など遊興渡世さまゝに雅俗貴賤の差別なく四時往來絶ずして何れも此に足を休る繁昌の茶店なり

〔編者曰ク原本此ノ所插畫ノ豫定ニテ　玉造二軒茶屋　ト題シ　花ニ行身二つぼしやこゝかしこ　不染　世は旅そ伊勢の國にはいせさくら　紫陌　ト書入レアルモ稿圖ナシ〕

玉造川

猫間川の東平野川の下流をいふ
夫木集ニ云　近江播磨に同名あり

攝陽群談云　平野川玉造の東にあり上古玉造川の歌名所なり今郡内平野庄に續くを以て後世改號せり

夫　木　ひとつして萬代照らす月なれバ底も見へけり玉造川　讀人不知

玉造江

むかしの玉造川に屬す今なし
陸奥國に同名あり

新　勅　みなと入玉造江にこく船の音こそたてね君をこほれと　小　町

夫木　月もすむ玉造江ハ霰ふり氷みがける名にこそ有けれ　俊成

同　あしの葉のもけみに露をぬきとめて玉造江に村雨そふる　知家

胞衣墳

二軒茶屋の巽の方川の向ニあり傳云　豐臣秀頼公の胞衣を藏めしところといふ一説に秀頼公ハ文祿二年八月城州淀にて誕生あり慶長四年伏見の城より當大坂に移り給ふされバ淀にて誕生ありて胞衣を大坂におさむること不審なりうたがふらくハ餘人の古墳なるべしと云

妙法寺

同所の東大今里村ニあり密宗の律院なり　契沖阿闍梨住職の古趾なり

本尊　聖觀音　長三尺六寸　脇士　左地藏菩薩　右毘沙門天王　長二尺餘　長二尺四寸

金毘羅祠　本堂の南ニ隣る　辨財天祠　本堂巽ニあり　鐘堂　本堂の前ニあり

契沖阿闍梨塔　本堂の後ニあり高サ七尺五寸許の寶篋印塔にして臺石に空心契沖の四字を鐫す

傳云　延寶八年本師圭定和尚寂せるにより遺命によつて契沖阿闍梨當寺に住職し給ふ然れども原來このむ所にあらず其母老て此里に有を以て止事を得ず故に別室を寺の傍に構へて孝養を盡されしとぞ遂に母沒して後當院を退き東高津圓珠庵に隱居す委くハ圓珠庵の條下ニ出せハこゝに畧す

あらず其母老て此里に有を以て止事を得ず故に別室を寺の傍に構へて孝養を盡されしとぞ遂に母沒して後當院を退き東高津圓珠庵に隱居す委くハ圓珠庵の條下ニ出せハこゝに畧す

十二所權現社

妙法寺の傍ニあり當村の生土神にして妙法寺これを守護す

契沖母間氏墓

同村の三昧ニあり石面に慈性信女と銘す則契沖阿闍梨の建る所也とぞ

下河邊長流墓

右同所ニありと云　長流ハ浪花の江戸堀ニ居住せりと云今其趾詳ならず

葛城氏の筆記に下河邊長流墓今里村の三昧ニあり石面に吟叟居士と勒すと云故に予數回歩みを運ひて探索すといへども更に知ず尤當地に墓あることハ契沖阿闍梨と無二の友たりし故に契沖の深き志よりして此に墓碑を立られし者なるべけれバ尚有べくと覺ゆれど未だ是を尋ね得ず按ずるに此地ハ凡て低くして數洪水の難あることを見及べりされバ是等の禍にあひて墓碑を失ふ者ならん乎爾有ど予が探索の疎にして求め得ざるも知ず後人索得バ幸甚しと云

長流若き時ハ下河邊彦六具平と名乘たり和州宇田の産にして父は小寄氏いかなる故にか母の氏を稱ふ原來妻子なくして中年より津國難波のかたわらに隱居をしめ靜に書をよみ儒學に長し歌學に達す淸操昔の隱逸にも劣らぬ人品なりけらし嘗て萬葉集古今集伊勢物語等ハ暗記したり其學問おのづから傳聞るをもて大坂の富人多く弟子となれり生得世に紹わぬ人品にて心の趣（赴）さる折ふしハ富家の招きにも應ぜず訪來る人にも物をも言ず枕を

高ふして或ハ眠り或ハ書を讀て心に任せて過しける西山公光圀公水戸黄門其才を聞しめし召けれども終にふたがわざりしかバ紙筆を賜りて萬葉の注を請給ふにも心に趣きたる時ハ一二首づゝ注して又邇(懈)りがちに侍りしまゝ果さずして貞享三年丙寅六月三日に身まかり侍りぬ春秋六十三歳著述の書累塵藻水集　續歌林良材　枕詞　燭明抄　萬葉名寄等なり圓珠庵の契沖師と交深かりけれバ遺稿を集めて晩華集と名づけたり其集中の哥に述懐のこゝろを

桂川こゝろに懸し一枝も折れぬ水に身ハふつみつゝ

ゆづかづら仰けはいとゞ高き木の切ことかたき大和言の葉

よみとよむ我ことの葉ハ蘆原のうらみやせまし住吉の神

わかの浦をふらぬ板井の蛙だに聲ハ詞の數にやハあらぬ

和歌の浦にいたらぬ迄も紀の國や心なぐさの大和ことの葉

末の集の哥どもの昔の哥に多く劣りゆくと見ゆるを

難波津の流れに生るあしつゝの末の世見へて薄き言の葉

仆高蹊云　歌の躰ハ契沖師と此人同じ筋なり契沖十七歳の時の哥を才を感じ方外の友となるよし契沖の徒義剛も書りとゞ委くハ畸人傳に見たり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ下河邊長流遺趾ト題シアルモ構圖ナシ〕

廢寺古趾

大今里より片江にいたる間に堂の趾堂の芝瓦畑など字する地あり一説に百濟寺の古蹟なりといふ又里老の云　往昔聖武天皇の御宇東大寺御建立の餘木を以て伽藍を作り給ひ則ち片江の金藏寺と號せしが建暦の頃火災にかゝりて燒亡し其後再建なし故に田圃の字となれり

笠縫島古趾

深江村ニあり當村いにしへより笠を縫て商ふを業とす名産にして世に名高し

今　歌　眞梶とるたもとに雪をはらひつゝさして漕よる笠縫の嶋　春滿

夕づく日浪ににほひて紅のゆはたに見ゆるかさぬいの嶋　千蔭

名にしおハゞ舟よせて見む　鶯の梅に木傳ふ笠縫のゝま　契沖

名産深江菅笠

右ニ同じ當村および隣村に菅田多く有て其菅他所に勝りてよしとゞこれを笠に造りて諸國に送るすへて深江笠と稱して名産とす

萬　葉　押照や難波菅笠好ふるし後ハ誰がきむ笠ならなくに

延喜内匠寮式伊勢齋王野宮裝束條に御輿中子菅蓋一具　菅并骨料材　從攝津國笠菅翳二柄　同笠縫作　單功十人　と有笠縫氏參來作

名産深江笠

此里のほとりハ上古笠縫の嶋といひし地にして今も菅の小笠を製して名物となすハ
いにしへの餘風なりときこゆ

大君のめくみ深江の菅笠ハきてそいたゞくあめかゝた人　船丸

小笠といいへとも雨や日をゝのく恩ハいつかハものてこそあれ　燕子花

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ稿圖ナシ〕

縫氏ハ此所の人にてぞ有けむ當村ハ金城の東にあたりて河内國の堺に近し此地古しへハ嶋なりしよし里人の言傳へたり實に此わたりハ往古ハ北の方ハ難波堀江につゞき東ハ大和川南西ハ百濟川其餘も小川多く流れあひて廣き沼江にて有しと覺ゆ難波の古圖のさまも然見たり又里人の云當村ハ他に越て地形高く四面ハ何れも地低し井など穿べ葦根貝殼など出といへり偖亦此地ハ住吉の東四極山より北にあたりてよき程の見わたしなれば萬葉集に四極山打越みれば笠縫の嶋こぎ隱る棚なし小船とハ詠たり

日本紀神代卷一書云　忌部遠祖手置帆負神を以て定て作笠とす云々　按するに今も當村の里長幸田何某の家より御即位の節ハ内裏へ菅を獻り又讃岐侯へも圓座の料の菅を進らすと聞ゆ是往古の笠縫氏の遺風なるべし

法明寺

右同村ニあり淨土宗京師知恩院に屬す

開基平野大念佛宗中祖法明上人

本尊　阿彌陀佛　惠心僧都作　長三尺許

龕墳　本堂の前西の傍ニあり或ハ雁塚といふ石塔二基　凡五尺餘ト四尺餘也　頗る古石なり

傳云　融通大念佛宗の中興法明上人遷化して遺骸を埋み側に就て宗派の道場を草創せり其葬式の龕を納るを以て櫛塚といふ又一説にハ此所の獵師田野に於て鴈の雄鳥を射取り其夜雌鳥來りて悲嘆の聲を出して地に倒れ死す獵者これを怪んで見るに矢に的る痕もなし正しく雄の死を愁ひ愛情の悲みに死せるならんと初めて發氣

し遂に此寺に入上人に語りて殺生の罪を謝し髪を剃て弟子と成れり其雌雄の雁を埋みて是を雁墳といふとぞ則ち北の方にある所の五尺餘の塔ハ雄にして南の方なる四尺餘の塔ハ雌なりと言傳ふ其實否分明ならず

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ　法明寺龕墳　ト題シアルモ稿圖ナシ〕

左專道不動

左專道村ニあり後藤山友三寺と號す古義眞言宗　舊ハ天王寺村正祐寺末派友三寺といへるを當所に移せしよし寺記ニ詳なり

本尊　大聖不動明王　石像總長凡七寸　尊體凡二寸許　弘法大師作

脇檀　左　弘法大師　右　了宅上人像　當寺開山ト云

毘沙門天皇　同殿ニ安す

辨財天女　同上護摩の灰を以て作所と云右辨財天の尊像の背ニ勒して曰　天長七年七月七日於江島辨財天法祕密護摩一萬座奉修行以其灰此尊像作者也　空海

開山塔　堂前ニあり　眞宅居士碑　二代住職なりト云　石面ニ勒して云　法蓮院觀應眞宅居士

碑裏云　曉のかねと友にも散雪ハ是やみのりの花にし有らし　美政

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ　左專道不動　ト題シアルモ稿圖ナシ〕

阿遲速雄神社

放出村ニあり今八劔社と稱す延喜式ニ出　社前の標石あり竝河五一郎の建る所也

延喜式神名帳云　攝津國東生郡云々　阿遲速雄神社

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ　阿遲速雄神社　ト題シアルモ稿圖ナシ〕

通川

右同村にあり河州より流て左專道を遶り楽水と會して京橋にいたり淀川ニ入　今ハ故大和川と號す放池も當村ニありと攝陽群談にいへり

夫　木

放出の通の川の朝ぼらけ堤向ひに船よぶや誰
かも鳥の放ちの池に木葉ちればうとき心をわれおもハなくに　讀人しらず

此河條ハ往昔大和國中より流れ來る河にして大和川と號し河幅最廣かりしなり中古までハ其河條河内國玉手山の北の方國分村の前に流れて柏原村の東にいたり又古市村の方より谷川の大水落合て八尾久寶寺村の間を北へ流れ高井田鳴野を過て金城の東より京橋の下へ流れ淀河に會する大河なりしに年來河州の數箇村水損に難澁

すること數なるにより元祿十七年　御仁惠によつて河州柏原村より直に西へ堀切淺香山を割て堺の北の入口並松の中を西海に入べく河條を穿て流れを違させ給ふ是に依て水損の諸村安堵の思ひをなすこと廣大の御高恩といふべし故に其河を新大和川と稱し此放出の流を以て故大和川と號す尤川違ありてより水勢ゆるきを以て川幅も狹く縮めて今の如くなれり

因云　夏山雜談に放出とハ本殿より別に造り出したる所なり俗に小書院小座敷など言が如し村の名に放出といふ所あり中古莊園などより割出したる地名なるにや今言ふ新家新在家などゝいふ如き歟云々

空山和尚古趾

同村出田寺ニあり下云當寺廢して今なし

傳云　八劔社の邊にありしとぞ

一說云　東生郡放出村出田寺の空山和尚ハ道德いみじくて人多く帰依せり往生の前二三日か程知己のあたりを悉く歩き廻り歸りて快くいね其曉天に僕を起し早く行水を沸すべし我ハ今日往生するなりとて其間に佛前を莊嚴し香花燈明を供へ徐に行水し給ひ僕に對て今臨終の念佛を始るぞ汝後にありて助言せよ若我聲よはるとも汝高聲に唱ふべし回向の文おわりなバ十念をさづけなん汝慥に受べしと契約し善導の發願文を誦し光明遍照の偈をとなへ高聲に念佛體をせめて願以此功德の文高らかに誦し終り念佛第七遍目に晏然として息絶ぬ火葬の後骨ハ舍利となり灰ハ紫色になりし寛政十一年五月十一日なり世壽七十歳とかや

劔堤

右同村より下の辻。般若寺。馬場等を經て河州茨田郡土居村に至る摂河國界の川也名義詳ならず放出村の生土を八劔の神社といへりもしくハ是等の由緣あるにや

小女郎祠

志喜田新田ニあり近來靈驗あらたなりとて詣人すこぶる多し社壇もつとも端麗に造立ありて美なり

大日堂

鳴野村ニあり本尊大日如來ハ弘法大師作難産を救わせ給ふ靈佛なりとて世に子安の大日と號す摂陽群談に見へたる什物の類ひ今詳ならず

袋忠庵

同村ニあり今廢して舊趾詳ならず摂陽群談に寺記をあげて本尊十一面觀世音の靈驗あらたなるよし見へたり

竝濱

一說に今の中濱村の地なりといふ往古海神の二神を竝べ祭るゆえに名づくとぞ今ハ轉じて白山權現の社といふ

日本記云　仁德天皇二十二年正月　天皇歌曰於辭氏屢那珥破能瑳者能那羅弭破莽那羅倍務苦虛屑曾能古破阿梨鷄梅云云

大藏局邸趾

中濱村ニあり今田圃の字に大藏といふ傳云　大藏局ハ木村重成の母にして後に秀頼公の(傳母なりと)傳ふ後に此地にやしきを給ふといふ

赤原社

鳴野橋の北にあり俗に鳴野の辨天と稱す近年靈驗あらたなりとて詣人間斷なくすこふる繁昌なり別て巳の日ハ緣日なりとて貴賤羣をなせり

城外乘晴賽辨天　　靚粧映水去來頻　　春田厚生
江妃湘靈伴洛神　　不知今日是何日

鶴野探梅　　筱崎小竹

鶴野橋東野水濱　　梅花時節每探春
恰是隔年逢故人　　一枝今日如相待

攝津名所圖會大成　卷之三　畢

攝津名所圖會大成　卷之四

浪華巽方

高津　　雙井　　種樹屋花園　　貞柳終焉地　　名產花鹽
同黑燒店　　眞言坂　　高津神社　　地主社　　末社　　太神宮
神輿舍　　給馬殿　　高臺　　本春日社　　高倉社　　神樂殿　　賓庫
高臺碑　　梅之橋　　狂哥墳　　瑜伽社　　四國遍禮堂
本覺寺　　一井鳳梧墓　　自性院　　觀音堂　　粟島社
古林見宜墳　　頻燒地藏　　魚藍觀音　　願生寺松　　顯孝庵鐘　　梅之井
梅ヶ辻　　西海寺鐘　　寶樹寺紅葉　　妙法松　　禪林寺額
仁德天皇社　　野中地藏　　欽明天皇社　　紀海音墓　　井上國貞碑
相生松　　楳屋敷　　上小竹葉野　　天桂禪師舊栖　　野中觀音
北向八幡宮　　本殿　　攝社　　生魂神社　　筆坂　　獨嘯庵碑
鍛冶社　　舞臺　　本地堂　　大師堂　　靈符社　　天滿宮　　神樂殿　　太子堂　　金毘羅祠

鐘樓　聖天堂　稲荷祠　給馬舍　古作石燈爐
僧坊　表門　鳥居　社司第宅　蓮池

源聖寺坂　隆專寺絲櫻　薄田隼人碑
蟲谷　蜂須賀家塔　淺野侯之塔
道邊柳　鳳林禪寺　元三大師堂
北山不動　風吹不動堂　石藥師堂
豐公神像　佐々家菩提寺　舟玉神祠
大岡春卜碑　極樂橋　大蓮寺
夕霧墳　釋迦堂　聖天堂
遊行寺　本願寺堂　行者堂　芭蕉墳
乾社　本殿　茶所　太神宮　道祖神祠　佛堂　勝鬘坂

辨天堂　天王寺古城跡
銅錢觀音堂　同義士之塔
月江寺　虛空藏堂
朝鮮石界墻　洞岩寺絲櫻
祇空翁文墳　蛇坂
芭蕉堂　西澤一鳳碑
油烟齋墓　淨國寺
隨求堂　中村白翁墓
寺街種樹屋　名產草履
伶倫第宅　名人播磨守第趾

二

高津種樹戸

軒におほひ庭にのへふす松かえも共に千年の陰ゝ見えけり　濟繼

過松井吉助園

砌畔長條綠蔭遮　盃中寸草護奇葩

早野思齋

十字街頭門別發

橐駝養視幾人家

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ樁圖ナシ〕

其二

牡丹花壇

蝶鳥のあかすに遊ふ牡丹哉　慶子

唐めきし花の匂ひの深見草沈香亭のこれやうつり香　桂影

滿地紅塵春色闌　賣錫聲裏夕陽殘　店頭微醉未歸去　橋本惟孝

又就人家觀牡丹

それ〳〵に宮垣造る牡丹畑花の王代さらハ一覽　鐵格子波丸

〔編者曰ク原本此ノ所插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

高津

東高津　西高津　或ハ高津新地　高津町　高津橋などみな

高津の社の東西ニあり　いにしへハ郡戸古宇都なと書り

此地ハ往古高津宮の舊地なるを以て高津と稱するにハ非す古くハ郡戸古宇都とあり按るに今の高津社をこゝに迁すよりして地名に稱ものか前卷ニ委く論す

雙井

道頓堀の東堀留町ニあり二ツ相ならぶを以て號く清泉にして此邊の用水とす

往還の傍に井あるは最古風なり浪華の奇觀とす

按に市井といふハ昔ハ和漢ともに市中村落家毎に井を設けず一鄕一町に井を設け朝毎に閭里の人井のもとに輦集ひて水を汲ゆへ商賈種々の品を持出てこれを交易す依て市井と言ふ　萬葉集に辰の市うるまの清水と詠れしも市井の類ひなるべく覺ゆ　尤此堀留町といへるハ其始東堀川條の堀留にして今の道頓堀もなく廣き野原なりしとぞ然るに人家漸に出來しが昔ハ家毎に井を堀こともなく街に大なる井を穿ち二筒に仕切て用水とせしなるべし浪華繁昌に隨ひて市中となれるより一奇觀となりて終にハ所の字を二箇井と呼ならわせしなり

種樹屋花園

二ツ井の東にあり吉助といふ庭中すこぶる廣く恰も林の如し

浪花中において植木屋の魁たるものなり

凡浪花に於て栽種を鬻ぐ家昔く下寺町及び天滿等に集り其餘北野曾根崎或ハ難波の新地尙諸所に有といへども就中高津の吉助を以て魁とすされバ前栽にハ和漢の名木を多く植たり莊子が八千代の椿王晉が三槐も赤梅檀の

二井

つゝ井筒いづゝを雙つならべこし所の名にしおひにけらしな　鶏成

此地ハ道頓堀の川上ニして東の通を松や町すじと號し北ハ長柄より天神橋南ハ下寺町にいたる大通あるゆへに寺社の參詣遊客商人遠近の旅人打むれて晝夜ともに賑わしき街なり

〔編者曰ク原本此ノ所插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

香木も植持て諸州へ船にて積送るなりと湘夕が書たるも實宜なるかな庭中にハ諸〳〵の草木を多く貯へ四時に花の絶る事なく珍奇の品類を鉢に育て見も馴ざるもの數なり且初夏の牡丹晩秋の菊等ハ花壇を造りて美觀なり雅俗ともに是を見んとて羣集し庭中最賑わし菊の盛に玉雲齋の詠る狂哥に

梅の橋花の兄貴と敬ひて　弟草をバ下に植木屋　國丸

貞柳終焉之地

右植木屋の向ふにあり菩提庵といふ別業にして貞柳翁こゝに終るよし狂歌集に見へたり

高津の別業植木屋吉助が向ふに菩提菴と號し十六畳じきに佗住して茶の湯のみ老の樂みとなして暮し侍りしが或人の來りて物事の不自由ならんといへるに

うら家にも住ば都のこゝろなり二でう三でう五疊六疊　貞柳

今生の花みな散し身ハ老木菩提の種をなんぞ植たや　同

八十一歳の秋なかば病ひしてもはや賴もし氣なく覺へけれバ人々にも暇乞をなし侍りけるに堺に住ける大坂屋宗祐の折から見舞に來りいとねもごろに勞り給ひけるに記念にもと亮行月に筆をとりて

今宵こそ月の桂の花のひる夜とハさらに思われもせず

斯て油烟齋ハ生涯月花ハもとより見るもの聞ものにつけて狂哥よまずといふことなく世につれて後ハやつ〳〵

しく侍りけれど心の樂みハ捨る事なくて

百居ても同じ浮世に同じ花月ハまん丸雪ハ白たえ

南無あみだ南無あみだ佛なむあみだ南無あみだぶを辭世にそする

と詠すて、浪花高津の菩提庵にて享保十九甲寅秋のなかば望の夜身まかられしなり行年八十一歳生玉の下光傳寺の庭にさるしの石あり貞柳言因居士と號す云々尚委くハ墳墓の條下に出す

名産花鹽

高津社の西坂すじにありいにしへより名産として種々の花の形を燒鹽とす其美なること賞すべし

狂哥　名にしおふ高津のうらを打見れハ心春めく浪の花鹽　梅好

同　黑燒店

同坂の下ニありたぐひ少き商家なり兩家ありて軒をつらぬ

當店にハ虎の皮豹の皮熊の皮狐狸までも軒に鈎て諸鳥ハ迦陵頻伽と鳳凰ハなけれども其外ハ悉く雙べて自在なり黑燒ハ大なるものハ大鵬の翼小き物ハ蝸牛の角の國爭ひまでも黑燒にして店前に其堝を飾り目覺しき程雙べ賣ふなりと先版にいへるごとく諸の草木を始め魚鳥獸蟲あらゆる物の功能あるハ黑燒にあらずと言ことなし故に遠近の國々より此に尋ねて求る事平生にして殊更に繁昌なり最店廣く美麗ニて一奇の商賈といふべし

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ　きのかま　鷄成　トノ書入レアルモ構圖ナシ〕

高津西坂黑燒店　ト題シ　高き屋にのぼりて見れバ烟たつ是も名におふ黑や

眞言坂

高津社の鳥居の西ニあり此坂を上れバ生玉の社僧左右ニ列せりいづれも眞言宗なる故ニ斯ハ名づくなるべし凡寺毎ニ弘法大師の御影堂ありて浪花大師めくりの札所なるゆへ詣人常に間斷なし又坂を上りて左の第一を櫻本坊といひて此寺内に秋葉の祠觀音堂等ありて參詣の老若殊に多し

或云此坂ハ攝陽群談に云る安國寺坂なるべし是如何となれば源聖寺坂　蛇坂に次きて安國寺坂同所ニあり世俗安藝國安國寺第宅の舊地なりと云り所傳詳ならずと攝陽群談に有をもつて此地なりと云且攝津志古蹟條下に高津宮大坂安國寺坂北有小祠ト云則此坂ハ高津宮の南傍ニあたれりト云按ずるニ此高津宮ハ古蹟の小祠を著す所にして今の高津の社をいふにハ非ず攝津志に今の高津社ハ比賣許曾神社と記し在西高津村と云々いにしへ御幸記にハこれを郡戸王子といふ後仁德天皇を配祀す仍て今仁德帝の廟と稱すとありて高津宮の古蹟とハ別なり一說に安國寺坂ハ今の農人橋通谷町を東へ上る坂也と云り則安國寺惠圭(瓊)の屋敷趾なりといへり爾有なんと覺ゆるを以て既に前卷に出せり然るに攝陽群談にハ下寺町に有よしを書り仍て尙按ずるに下寺町に有所の安國寺坂ハ廢安國寺の古趾の坂なるべし扶桑禪林僧寶傳卷四無德至孝禪師傳曰古山源公左武衛常言

安國利民莫如佛乘乃令天下各州建安國寺云々　古山ハ　左兵衛督源直義法名慧源號古山尊氏卿の弟なりされバ國毎に安國寺を建させられたれバ其安國寺の古蹟によつて下寺町の邊に安國寺坂と稱る地の有なるべし是を世俗同名なるにより慧主(惠瓊)の邸宅趾と思ひ違ひしなり故に農人橋通の坂は慧主(惠瓊)の邸宅とし下寺町の坂ハ廢安國寺として可なり

高津神社　西高津にあり

例祭六月十八日　九月十八日

本社　仁德天皇　攝社　比賣許曾神　本社の後にあり　地主と稱す

末社　猿田彦命　八幡大神　厄神　摭籠明神　水神　大己貴命　神功皇后　高良明神　布留神　大歲神　愛宕權現　柿木人丸　住吉大神　天滿大自在天神　兎道稚良子　惠美須神　金毘羅　八百萬神　いづれも本社の後に列す

伊勢兩皇大神宮　本社の巽角にあり　春日神社　同上　高倉社　本社の左傍後にあり

神樂殿　本社の左傍にあり　寶庫　神樂殿に隣る　神輿舍　本社の右の後にあり

繪馬殿　本社の坤に(ひつじさる)あり或ハ舞臺とも稱す是より西北の眺望すこふる美觀なり　繪馬舍　同東の方にあり

高臺　舞臺の傍にあり俗に梅の亭と號す四面に垣ありて雜人猥りに入ことを許さず

此亭ハ天明三年卯四月三日　仙洞御所より和歌三神へ御代參として大輔局(だいふのつぼね)大坂表御通行の砌當社をよひ天王寺へ御參詣あり此時かりに營む所にして則ちこゝにていこわせ給ふ古跡なり當社へ御製の御和歌御奉納あり御執筆ハ正親町殿(おほぎまちの)なりとぞ今尚寶庫に藏むと云且此餘に御奉納の御和歌有てともに寶庫に藏す

風わたる民の草葉のことしあれバ君にぞ靡く千代の秋まで　後櫻町院御製

高臺之頌碑(かうたいのしようひ)　本社の傍(たぢ)にあり高五尺許上の四字篆書(てんしよ)餘ハ隸書(れいしよ)なり

高臺于外而見則煙起民之竈者贍爾夸里

頌曰

猗與鷦鷯　聰明岐嶷　昆弟克讓　互辭天祿　稚皇就節
斯始登極　有若王仁　徵自百濟　開學授經　宏亮帝制
高臺登望　烟少民饑　帝心不安　儉身維儉　除租息調
恤孤養老　宮垣不亞　梁楹不藻　三歲豐饒　炊烟起堆
望知民蘇　造歌高臺　元聖輔君　賦難波梅　籠冬逢春
詠斯花開　帝德廣運　遮事熙哉　造宮營室　兆民子來
穿開堀江　通海曳川　茨田築堤　萬億懋田　惟端午日

240

梅のはな
なにハの
春に
そへしより
高津の
宮木
いとも
かしこし
契沖

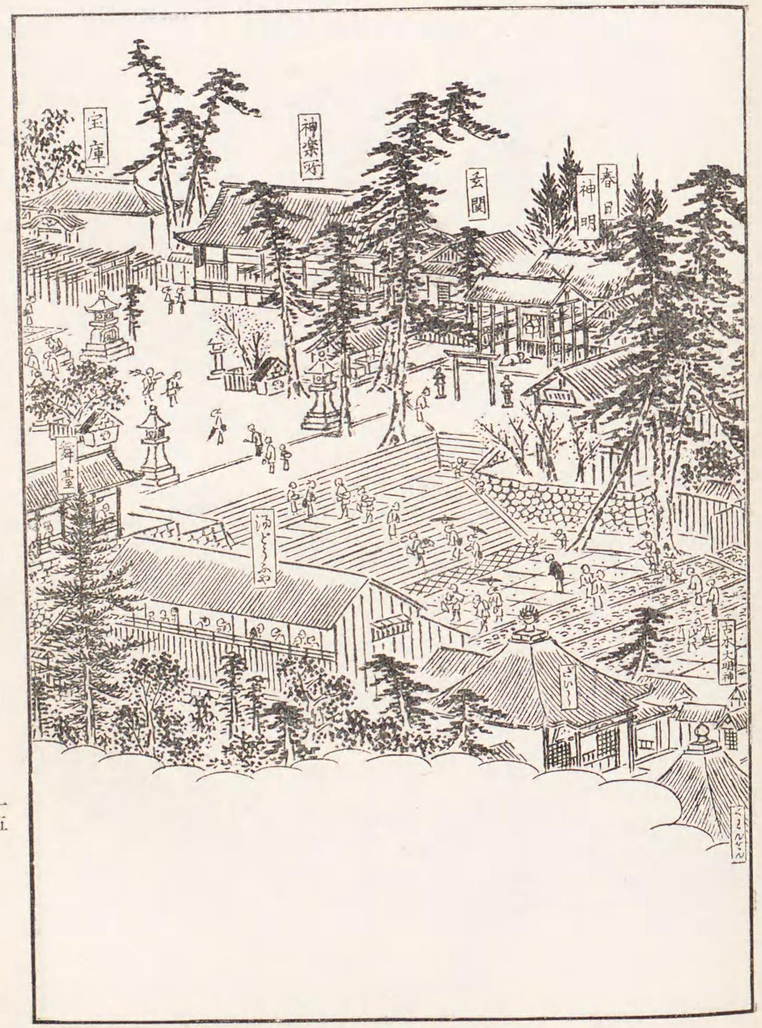
241

日暮梅橋暁
老梅ヲ　竈煙
一望ス舊高臺
丫鬟勸酒小
樓ノ上　桒匣
春芳炙雪來
源華城

遠方の
長閑さ
見ゆる
眼鏡かな
南岳

其二

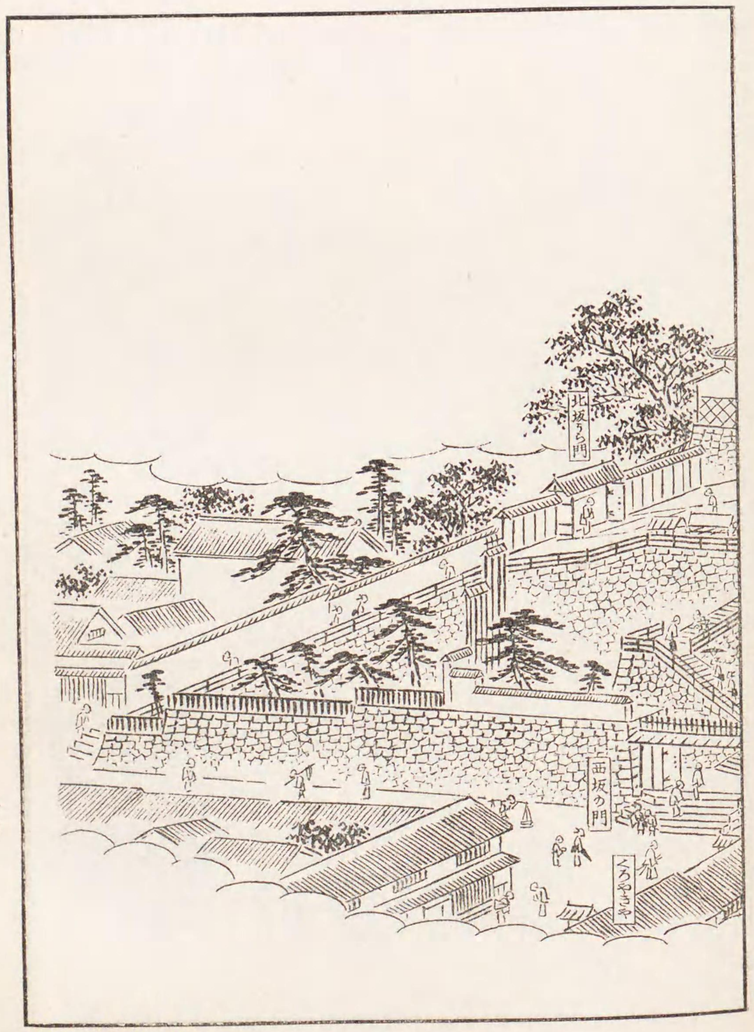
柔脆殺乳稱ス
高津ヲ　烹炙
輕便待衆人ヲ
甘來莫是醍
醐味ナルコト　淨地
近延ク方外賓
鳴門南山



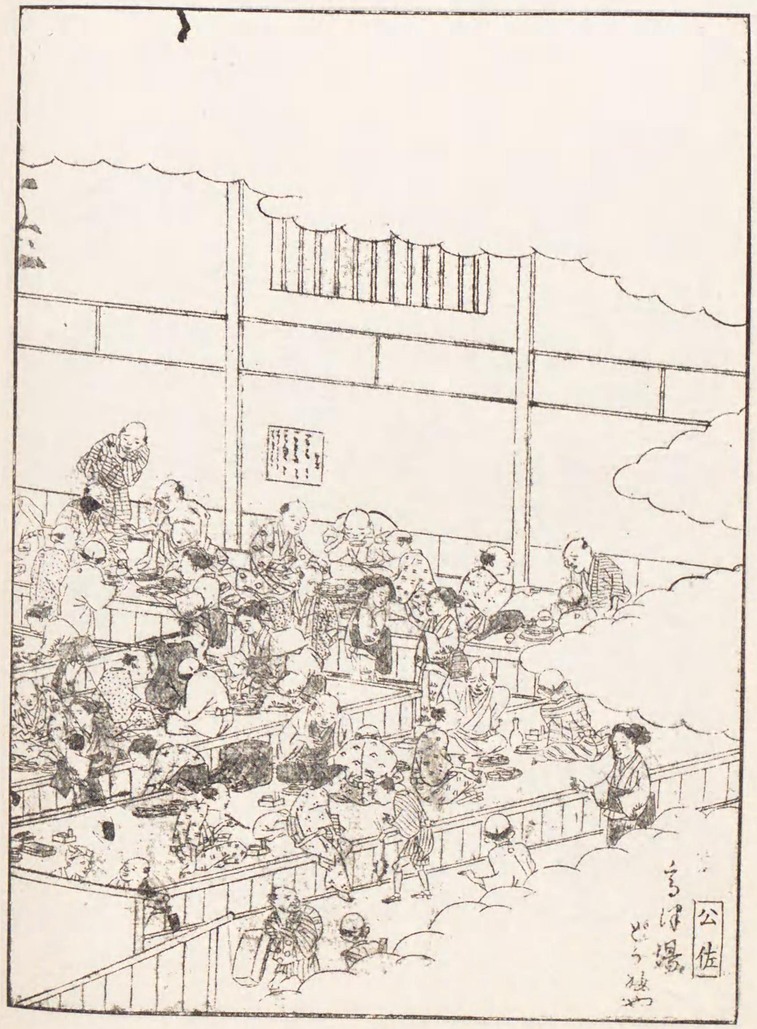
おし照や
難波高津の
むかしより
絶る世も
なき民の
けふりか

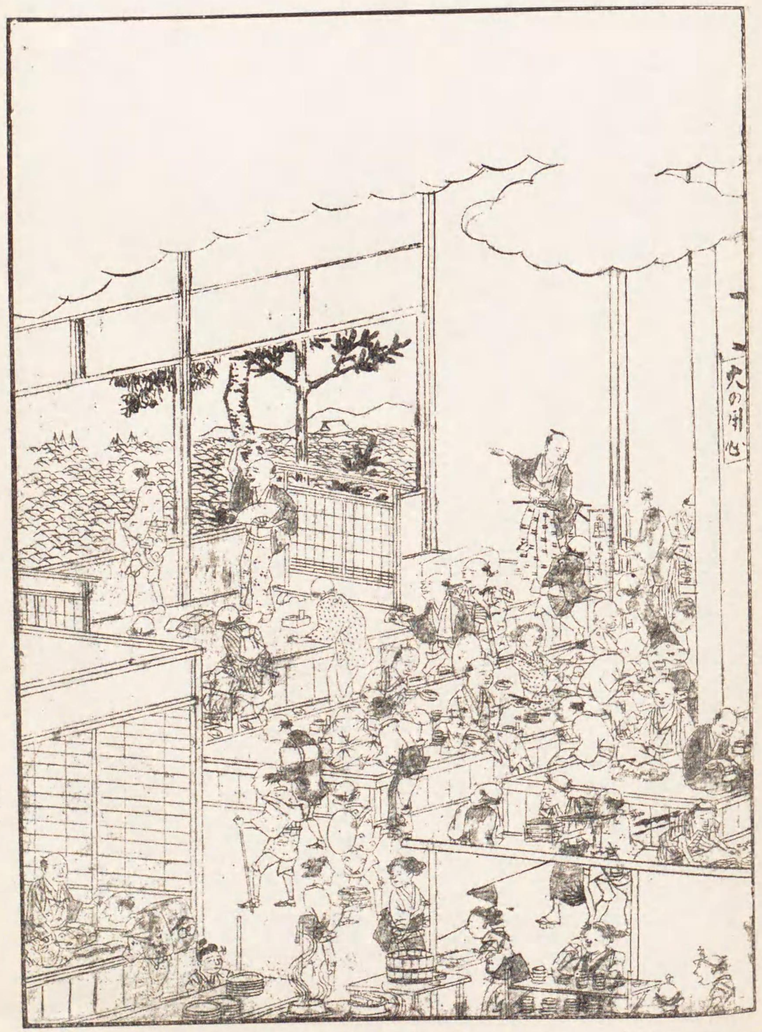
千蔭

其三



高津より
市中西南
眺望


公佐
高津場
どう後や



始獻菖蒲　永爲恒式　以顯德符　白鹿示慶　連理呈祥
四海沾化　洪澤無量　襲聖贊功　金石欽勒　仰頌至聖
永世不革

明和九季壬辰秋八月朔旦

平安　芥煥彦章甫謹撰
浪華　牟純平介甫謹書

當社ハ往古　仁德帝の皇居高津宮の遺跡にして下照比賣命を祭り磐船社と號し石山の南の邊生玉神社に隣りたりし時難波の都の帝王なれバひとしく此に齋き祀りしが天正十三年豐公城壘を築き給ふにより生玉社と共に遷座し奉る所なりとぞ原來此地ハ一堆の丘山にして古松大樹高く繁茂し古昔を想像る且磐船社を迁せしゆへに磐船山とも號せしよし言傳ふ天明三卯年四月三日　後櫻町院當社へ御和歌奉納として大輔局御代參あり尙御寄附の品および足利義晴公天文七年高津宮祭祠憲錄又慶長十九年御祈願書等今尙神庫に藏む其餘神寶あり之を畧す偖當社頭より遙かに眺めハ浪華の市中甍一圓に濤の如く河口にハ出入の千船百船海原に浮める白帆の光景淡路島山須磨明石武庫山に連る峯々一瞬の中にありて風景第一の勝地なりさる程に常に遠眼鏡を置て詣人を歡ばしめ茶店の湯豆腐ハ世に名高く社參の貴賤こゝに憩ひて飲食を調ふ最賑わしき宮居なり

高津の茶店にて

嚊さらバむかふに海の時雨を見　淡々
鶯ハともあれこゝの初音かな　千代
甍こし若葉や越て西のうみ　一音
家千戸梅も千もとの匂ひ哉　班竹
眠らすに幟見てゐよ岸のうへ　才麿

高臺茶店足登攀　眺望便偸半日間　荒井公廉
帝里幾遷年月賒　千里鏡中眞縮地　如眉淡島横眉間　鈴木茶溪
遠仰聖明仁德朝　高臺猶饒舊雲霞　炊烟當日知多少　延及金城十萬家　筱崎武江
乘興黃昏蹈月過　梅橋南畔暗香多　炊烟不斷千年後　十萬人家一百橋　筱崎小竹
たかきやに登りて西をみをつくし興に入船鯖のおもしろ　間吟處士西湖句　忘却王仁當日歌　國丸

端午にハ高津へのぼりみよし野やけふの花ならひとめ千本　二四　栗洞

仁德天皇を題して詠る哥

元暦四　煙なき宿をめぐみしすめら社よそとせあまり國もらしけれ　皇太皇后大夫　國經
寛宴

同　大さゝき高津の宮の雨もるをふかせぬことを民ハよろこぶ　同

延喜六　たかどのに登りて見れハ天の下よもに烟りて今ぞ富ぬる　左大臣　時平
同

天慶六　おほさゝきすめらが代よりたつ烟天のひつぎにもへまさる哉　大納言　師尹
寛宴

右延喜六年日本紀寛宴の時　仁德天皇を題して左大臣時平公の詠る哥を新古今の撰者これを引直して　仁德天皇の御製とし

高きやにのぼりて見れバ煙たつ民の竈ハ賑ひにけり

として新古今賀歌の中に入られしハ最いぶかしきことゝいへり允深き意味あるべし　諸説ありといへともこれを畧す

瑜伽權現社

梅の橋の傍自性院の寺境ニあり

粟嶋祠

同上

觀音堂

同上

四國靈場遍禮堂

右同所觀音堂の傍ニあり四國八十八箇所の本尊を安置し其靈場の土をことゞく取よせ此地にしくと言り

梅之橋

鳥居の内ニあり一説にいにしへ此東西八町餘の間川岸に數株の梅ありしゆへに梅川となづけしとぞ又此東に梅が辻といへるあり是も梅林によりて名つけしものとぞ

狂歌墳

社頭ニあり鐵格子波丸の建る所なり波丸ハ玉雲齋國丸の門人にして狂哥を善し且博學多才なり俗稱を木津屋周藏といふ

香にゑるき梅ハ諸木のみをつくし是もなにはを始とぞきく　波丸

あやめよりまづねくらべをするやらんこゝの臥所もあけぬ短夜　同

奥山のふところさむみ窠る小猿親の添乳の聲をきゝきゝ　同

錢もちのこゝろもゑらず大卅日荷なふおふこのゑハれとぞ思ふ　同

楳之井

同鳥居の東蓮光寺の境地ニあり是ハ梅川の傍ニありしを以て號るものなるべし井のほとりに垣をめくらして容易汲ことを許さず故ニ水の清濁をゑらず

本覺寺

蓮光寺の北東の角ニあり日蓮宗眞如山と號す開基ハ定證院日守大德也生緣ハ加州金澤の産武田信濃守の末葉武田禪正入道義次の二男善壽丸といひしが幼稚より佛道修行おこたらず永祿五壬戌年當寺を草創あり爾してより以來第二圓乘院日幸代々歴々相續せり故に靈寶什物あまたあり就中日蓮聖人の消息二幅花洛弘通開山日像聖人の大まんだら其外代々の聖敎等箱に滿りと大坂鑑に見へたり

一井鳳梧墓

右同所の北圓妙寺にあり雲州松江の産氏ハ一色後に一井と改む林羅山道春の門人にして浪花に住す時の大儒にして且長壽なり

石面云　大省元一井子鳳梧墓　碑文略之

銘云　嗚呼美矣　一井梧桐　鳳凰休羽　瑞呈五公　聿自隱跡
遊攝陽中　不要外物　常情自通　養精神去　盡琢磨功
百十六歲　實身全終

敬齋中野光妄謹撰　鳳國子東隆春謹書

鳳梧諱ハ光宣字ハ桐助桐梧と號し又鳳梧とも號す或ハ攸齋と號す雲州松江の産にして氏ハ一色後に一井と改む林道春の門人なり大坂伏見兩替町に住し教授す其門に入る徒一千二百餘人に及べりとぞ凡浪花に於て儒學を講ずること鳳梧翁を始とすと云　享保十六年辛亥秋七月廿五日卒　行年一百十六歲　由緣齋貞柳翁追善の狂哥に

桐助が壽命を誰も學びつゝ百十六でもものたゝまはく　貞柳

百七歲のとしの旦に

大助にひとつ勝たり今朝の春　鳳梧

百十六歲の春二八の姿をもちて

百のけて相生としの片ゝらが　同

魚籃觀世音

右同寺の隣大倫寺に安置す長凡六尺許作詳ならずといへども頗る美作にして殊勝なり比類なき佛像といふべし

腥き魚をさけても大菩薩すこしも障り南無觀自在　紫笛

顯孝庵鐘

右同寺ニ隣る　難波奇談云　中寺町顯孝庵の鐘ハ其音律盤涉調なりとぞ

禪林寺額

右同寺の北ニ隣る當寺本堂に掲る額ハ朝鮮人雪峯の筆にして禪林寺と書す天和年間來聘の時書しなるべし

古林見宜墓

同寺ニあり明暦三年丁酉九月十七日卒行年七十九此翁ハ近代比類なき名醫にして其名世に轟けり小倉敬典云　先生醫業の盛んなるハ皆世人の知所なり風流好事ハ知らざる人多しされバ門人に松下見林のごとき秀才の出るも故あることならん予が家に先生の畫讃を珍藏す畫ハ長谷川等重雪中の山水なり其贊ニ云

山含古木雪堆瓊　芦屋斜連結舊盟　唉問斯卽披老否

地藏坂
生玉筋
中寺街

其二

南道壽仙題

溪邊攬轡聽溪聲

貧家醫療話云　大坂天神橋の近所の裏住に水を荷ふて世の業とする貧家あり其男四十三歳ある時俄に中風を患ふ肚はなハだ疼み口眼喎斜なり藥を與んと欲すれども明日の粮さへ乏しき故力およバす其妻子ハ唯晝夜夫の手足を按摩すれども更に其效なし然るに妻子あまりの悲しさに古林見宜の宅にゆき夫の病體を語りて藥を乞ふ宜の云く其貧の節なる病を救ふを以て醫師の本とす必患ふる事なかれ亦我に一錢の藥料を贈る事なかれ然る時ハ其藥を施して愈すこと安しと故にまづ米味噌薪等を以て病家に送る是ハ病中の愁を除かん爲なり亦宜病家に來ること日に二度はたして二十日ばかりにして中風ことぐ〳〵く平愈す彼男水を荷ふに平生のごとし是宜の常に陰德の顯るゝ所なり故に慈悲心の名醫なりと國々まで人皆是を感じけり

頰燒地藏尊

谷町すぢ地藏坂惠修院にあり當地藏菩薩ハ慈覺大師の作也とそ

此尊像ハ往昔相模國林村にありて永仁年間鎌倉茅原里助太夫が家に壹人の賤女あり平生に此尊を信じて日毎に晝食を田畑へ運ぶ道條なれバ初穗を尊像に供ず助太夫これを聞て大に怒り下女が頰面に燒鐵をあてゝ折檻に及ふ彼女たちまち氣絶して倒れ臥す姑く有て起て見れバ恙なし是正しく地藏尊の奇特ならんと直ちに詣して尊像を見れハ面頰たゞれてまし〳〵ける助太夫も先非を悔み數回此罪を佗て偏に信仰なしけるとそ故に世人身代頰燒の地藏菩薩と賞しける實に世に難有靈像にして利益あらたなる故詣人常に間斷なし又當寺の門前通の坂を地藏坂と號するも此尊のましますを以て名によべるなり

願生寺松

右專修院の東ニ隣る願生寺にあり古松ニ株繁茂す

新著聞集云　願生寺超譽ハ隨分の念佛の導師なりし此寺もとハ草庵にて僅に三間四面の藁葺の一宇なりしを今ハ佛殿方丈庫裏まで悉々く成辨してけり此修營の始めに根なき松を二莖門境に植もし寺門繁榮せバ此松盛長すべしと自ら祝せられしに果して鬱茂して今大木となれり又鹽町に閑居の菴を占たまひしに庭の池の中に蛙羣鳴て喧すしかりけれバ十念をさづけて停止せられしに生涯のうちハ曾て鳴ざりし元祿九年八月十七日七十二歳にて豫め滅後の葬式を營み前十一日より安養の聖衆の數に入しことを覺へ尊く念佛して終りぬ云々

妙法松

右同寺の向妙法寺ニあり幹圍壹丈二尺　枝數九十五　高三丈九尺餘
徑東西十餘丈　同南北八丈九尺　實に無雙の名松なり

世々ひろく說バたへなる法とともにさかへむ庭の松ぞ木だかき　　從一位　資枝　公

谷町妙法寺の花を見て

狂哥　去年の盆の大文字より妙法寺近く見へぬる花のひかりハ　　由緣齋　貞柳

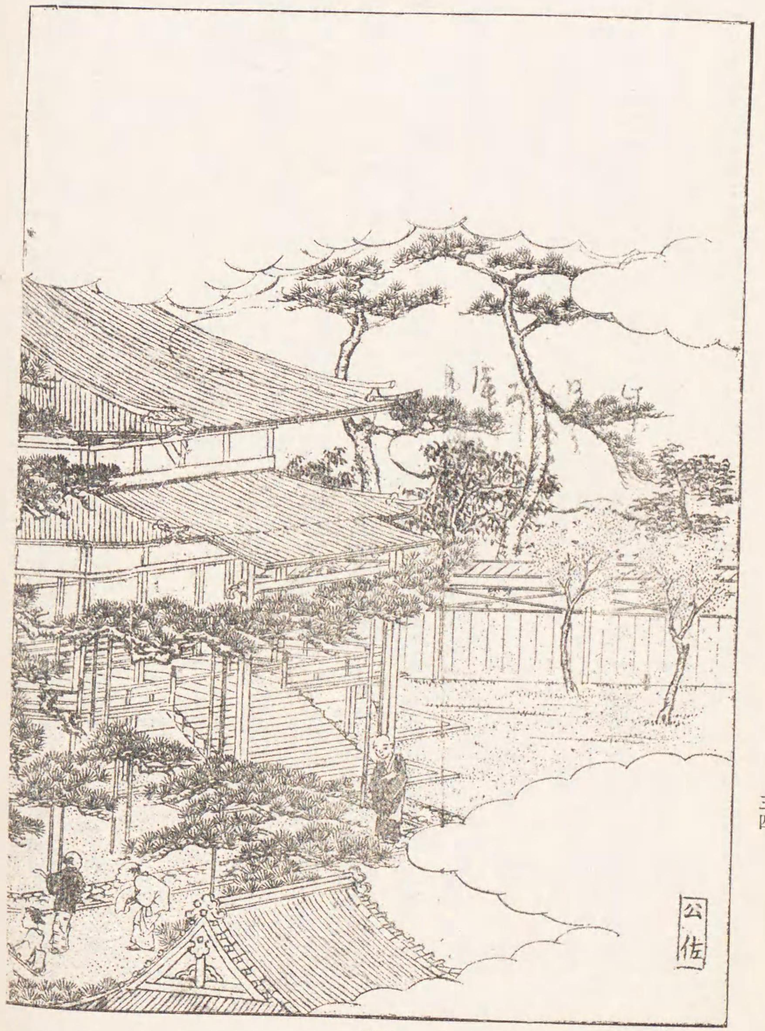
家土産

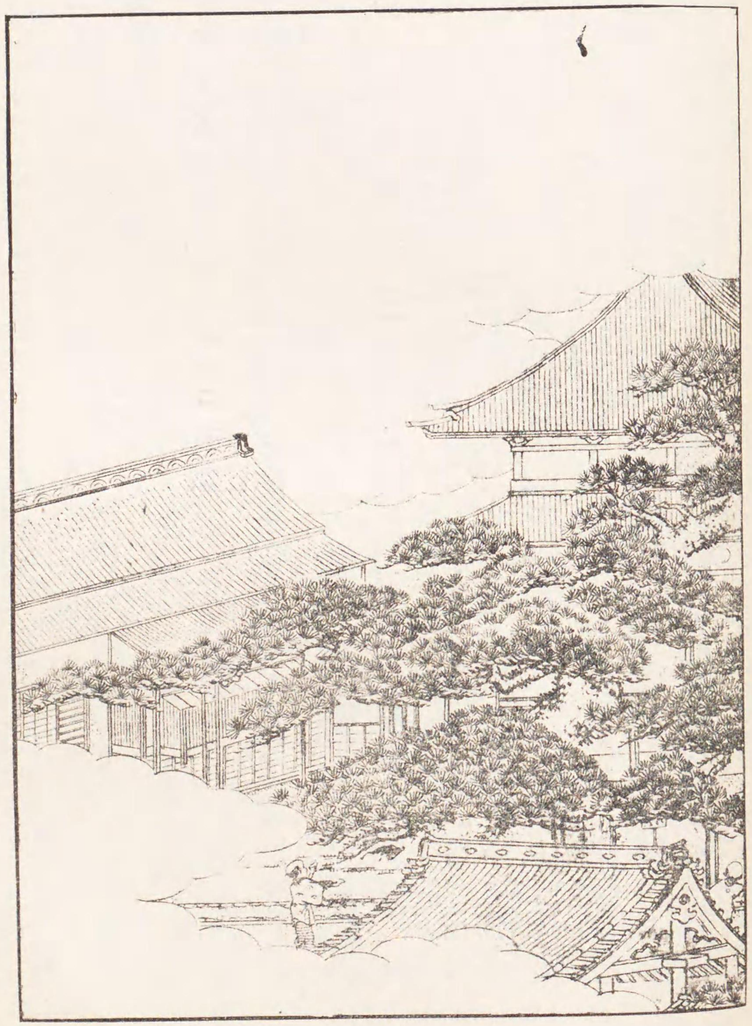
妙法松（めうはふまつ）

玉葉

庭の面の
一木の松
を
ふく風に
いく村雨
の聲を
聞くらん

九條
左大臣





ゑかあれバいにしへハ櫻も有しなるべし今ハ松のみにして餘木ハ見へず

井上國貞墓

右同所の南重願寺ニあり近世の名鍛冶にして大坂正宗と稱す

石面云　故井上眞改墓　傍ニ天和二壬戌年十一月九日卒

同新碑　古碑ニ並ぶ眞改百五十回忌に當つて建る所也碑文略之　天保二辛卯年十一月九日　八木巽處撰

北條泰書　刀劍商家工匠好愛諸氏建トあり

井上和泉守國貞ハ老後眞改と名のる　浪花上街鑄屋町の住人刀鍛冶(治)井上和泉守藤原國貞の子にして家の業を繼て父に卓越し其作善盡し美を盡す　第一地鐵麗しく鋩金色に光り匂ひ至て深く勢ひ勇み何にても物ふかく能出來たるハ昔の五郎入道正宗にも劣らざる物ありさるに依て大坂正宗と世上に稱譽す又中心の形鑢あるひハ彫物の手際銘の手跡餘人の及ぶ所にあらず實に勝れたる名人世の賞する所宜なるかな爰に備前岡山の士鎗術の達人上作の鎗の刃あまた取よせ試みしに兎角心に叶ふ作もなき故井上眞改に所望しけるが日を經て出來上り到來しけるゆへためされける凡て鎗のためしハ討首の頭を突てためすことなりとぞ然るに人の首ハ至て堅固なる物にて通例の鎗先にてハ胸腹手足などハよく刺通さるれども頭ばかりハトンと音するばかりにて跡へもどる者なるに眞改が作ハたとへバ豆腐を刺がごとくに有しにより彼士も愕然として其鍛錬の妙を感賞しけるとなり又

眞改が知音に浪人の士ありしが當時貧窮にて仕官の望も叶ハざるゆへ憂歎の氣色に見へけるにぞ眞改いわく我年來刀を鑄撰するの手本とて所持せる正宗の刀あり是を足下に授くる間賣拂ひ其料物を以て出身せらるべし此後もしや貯へも出來なバ代金にて返濟せらるべしとの事にて彼正宗の刀を授與しける　浪人ハ大に歡び厚く其(懇)慇切を謝して後是を賣代なしけるに關東にてある大家の諸侯へ三百金に納りけるより此黄金を以て支度を調へ奉公しける然るゆへに此士も節儉を用ひて夜を日に繼て右三百兩の金を調へ井上に返辨しける　眞改此金子を受取て先に正宗の刀をもとめ給ふ諸侯へ手寄て申けるハ先達て御求め有し正宗の義ハ實ハ私の作にてゆへども朋友の急難を救わんがため僞て正宗とハ申せしなり是によつて代金返上し奉るあいだ右刀を下し給るべしと申上ける此趣殿へ申上けるに殿仰ありけるやう正宗にて事すみしものを我作りしと申すだん直言かんじ入る扨又末世の鍛(治)冶においてかゝる名作を摸擬する條五郎入道にも勝りたる上作といふべけれバ猶さら我家の重寶として不朽に持傳へたく思ふなれバ代金ハ持かへるべしとて大に褒稱せられけるとぞ實に慶長已來新刀ハ大坂打をもつて上品とせる中にも眞改ハ絶倫の輩にて職業において比ぴなき名譽の事ども也なり　浪花奇談

梅ケ辻

谷町通高津社の鳥居條をいふ一説に往古ハ此邊一圓の梅の林にして其傍に川ありしを梅川といへり梅が辻の名もこれよりして出るなるべし此辻の北の方いたつて地形ひくし是なん梅川の古跡ならんか

或云　今の山小橋に古趾の存れる磐船山の上の岸を南より西へながるゝ川ありて水上ハ百濟川の分流にして味原の池の南へ流れ郡戸村を經て西の海ニ入る尤其時ハ川はゞすこふる廣かりしが後世わづかに細き溝のごとく

谷街條寺院

景ハ
佛の夢
蓮之
淨泉寺
善法寺
大仙寺
一新長堂
重願寺
丹上願寺

煙雨
寺ハ
佛の
不ト
松是愚草
杉ノ下風の
みてゝ
千代の
入あひの
定家
海住寺
名松
願生寺
頼政塚

浪華正宗名作

正宗と稱する人古今ニ凡八人あり然りといへども世に其名の轟くものゝ相模國山内の住人藤六左近將監國綱の孫行光の子なり若年より諸國を周行其蘊奥を究め日本鍛治道に於て中興の祖神と仰がる則ち鎌倉に住し岡崎五郎入道正宗と號す十の妙所に十三種の鉋ありといふ文永元年に生康永二年に死す行年八十一と云然るに浪華の住井上國貞ハ正宗より凡三百有餘年の後に出て其作正宗に勝るといへとも劣ることなく動れハ正宗の作と見紛ふ者も多かりしとぞ故に大坂正宗と異名しけるとなん實に古今無雙の名鍛治なり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

西海禪寺鳧鐘

上本町八丁目寺町にあり支那大鵬和尚の銘文なり鐫して曰

攝州東生郡東高津法龍山西海禪寺廼黄檗七代悅山老和尚開山之所聚集龍象之場偏募諸方檀信鑄成鉅鐘一口永爲山門大寶祝國庇民之器破除六道一切煩惱流傳後裔而第二代祖溪能和尚第三代秦峯崇和尚豈料至於第四代不貴禮樂之徒滅壞鐘鼓法器無存賴有智觀戒和尚乃開山眞孫常行古德之行丙申年十月十四日衆人特請當山住持是以不應惟願退己讓人是年十月念八日轉請本師祖春回和尚爲中興主席智觀和尚權監院之職及其本師退隱之後寺衆竭力共仲隻手募鑄華鯨挽回厥音朝暮擊動獄王減刑閻浮夢醒其功大焉其德無窮命余作銘并序於悅老和尚之後奉和原韻銘曰

撥轉法輪兮春回梵宮重懸鯨簾兮振起法龍海衆雲集兮佛日永隆住持

なりて梅川といへりむかしハ郡戸川とよびしとぞ今高津の社地なる梅のはしの下ニ溝あり又眞言坂の下に溝ありて高津新地に通し新地川にいる原此新地川なかりし時ハ今の難波新地の大溝に通し難波村を南に流れいたち川に合して海に入し川も有しと云何れの川すじなりしや詳ならず後人尚考ふべし

竭力兮道德高崇信士施財兮福歸其中法門鉅器兮獨此洪鏞祝國庇民兮長扇堯風晨昏扣擊兮驚醒迷蒙欲度衆生兮證入圓通長鎭山門兮顯其大功重銘重勒兮厥音無窮

癸丑歳十月吉旦　　支那大鵬鯤和南敬書

紀海音墓

右同所の南寶樹寺にあり石碑の面に勒して曰　清潮院海音日法　寛保二年戌十月四日　臺石に鯛屋忠七とあり

紀海音ハ近松平安堂門左衞門なり同時の人にて淨瑠理の作文多く其名高し姓ハ榎並雅名を貞義とよぶ鯛屋貞柳の弟なり俗稱喜右衞門といひ後に善八と改たむ初め黄檗の悅山和尚に屬して僧となり高節と號す一說に和州柿本寺の所化と成しが又阪俗して浪花に爾後還俗して醫道を業とし誹諧を嗜む又契沖翁の門に遊びて契因鳥路觀と號し淨瑠理の作名を紀海音といへり元文元年辰の夏法橋に敍し寛保二年戌十月四日行年八十歳にて沒す石塔婆の臺石に忠七とあるハ貞義の息にして貞風といへり道頓堀太左衞門橋通八幡すじにて鯛の看(板)版をかけ菓子を製して業とす

鳥路觀貞義より年頭の禮に團扇をこしけれハ

家集　物すきでていがよけれバ夏の物を春にもつかふうちハ故也　貞柳

鳥路觀七十の賀に

十ばかり千世の餘りの我におほきつらなる枝ハ花も身もあり　同

兄弟ともに風流の道に遊びて其名高く享保七年寅十一月一日より豐竹座の操りにて東山殿室町合戰といふ作文ハ則ち紀海音の作にて第四段目座敷八景といふ節事の文中に油烟齋貞柳翁の狂歌を綴入たりしが衆人數感心せりとぞ　事繁けれハ座しき八景の文ハ略之　貞柳沒後に追悼して詠る

知るふらぬ人を狂哥で笑わせし其返報に泣て給ハれ　貞義

野中觀音堂

東高津の野中にあり遍明院と號す又月江山難波寺といふ　長四寸八分　僧正行基作

本尊十一面觀世音

當大悲尊ハ往昔壽永年間上總國の住人惡七兵衞景淸が念じ佛にして數回の戰ひに弓箭の災祆を免れ且賴朝卿よりの誅戮の時しも命にかわらせ給ふ事の大方便力の利益を蒙る景淸の守本尊と申奉るハ此尊像なりと言傳ふ尙くわしくハ本緣起に見へたり此に略す

寶樹寺紅葉

寶樹寺中斜日曛　三盃丹酒已微醺
半是紅雲半綠雲　新霜一樣猶難染
赤地とも夕日にてらすもみち葉の錦につゝむあの寶樹寺　源華城

野中觀音堂

涙華南郊樂事多　遊羣載酒弄春和　庭井
梅屋桃林次第嘉　自歌蛭社竹枝頌
並河朋來

〔編者曰ク原本此ノ所貳丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

上野宮

行も來るも花見る人よ花七日　梅曉

藏鷺菴

三春烟景地如溪　萬樹桃花下作蹊　倘使晉漁遊此境
留連合也歸途迷　鳴門南山

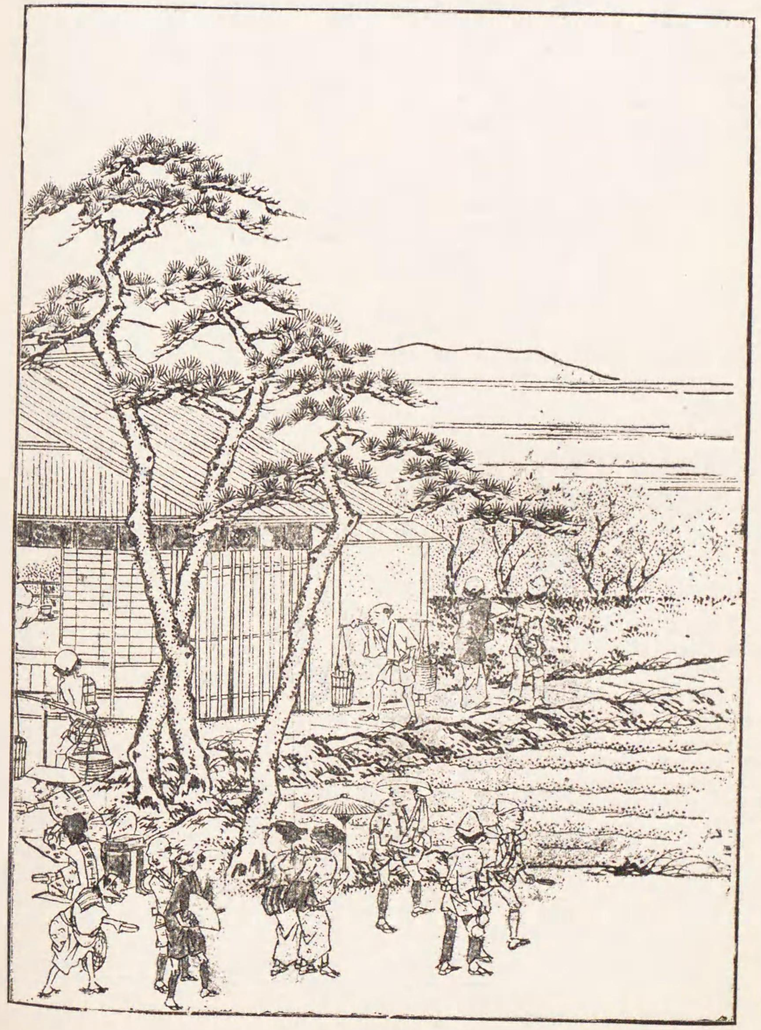
野遊ひに櫓辨當の坊主もちせりあひおかし醫者俳諧師　魚丸

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

桃畑大師巡道條

豐氏遺孤
失爪牙
城南苦戰
亂如麻
當時塗地
淋漓血
剩染桃林
十里花
源華城

飼なれし
牛をはな
ちて
百姓も桃
の花見に
うたふさ
ゝんさ
戲雄



遶郭桃花十
里春
賞花羅綺起
紅塵
尋得林深人
少處
間眠欲擬避
秦民

筱苫小竹

日半路を
照られて來
るや桃の花

野坡

仁德天皇神廟

寺境にあり按にいにしへ平野社と號せし遺跡ならんか前卷にくわしく論す

野中地藏堂

右同寺の門前にあり立像の石佛なり祈願の者墨汁をそゝげハ必らず利益ありとぞ故に常に全體墨に染て異樣なり一奇といふべし

欽明天皇社

天王寺中町の野中にあり上野宮と稱す此所の生土神なり

例祭八月八日　末社に羽黑權現の祠あり

當社祭神ハ人王三十代（皇）欽明天皇にして　用明帝の御父　帝なりされバ聖德皇太子の御祖父にて渡らせ給へハ往昔四天王寺草創のをりから共に建營ありしなるべし御幸記にハ上野王子とありと攝津志に見へたり　王子社の說くわしくハ前卷に論す

社頭にハ築山池等ありて松櫻および萩繁く生て春秋ともに林泉の眺を增り且此傍邊より南ハ天王寺北ハ玉造までの間一圓の桃畑にして晩春の頃ハ花の紅に天も醉る光景なりさる程に都下の貴賤竹筒瓢を携へ花下の茶店に遊宴し終日樂み浮れて日の西山にうすづくをも忘る實や梅ならぬ難波津の桃の名所にして無雙の勝地といふべし

天桂禪師舊栖

右社頭に隣る明月林藏鶯庵と云　天桂和尙の開基にして淡州須本稻田家代々の靈牌あり所謂版依の地なり享保年間天桂和尙ハ攝州豐嶋郡吉田村陽松菴を建立し彼地に移るの後直指和尙住してより今尙相續す

いにしへ此地ハ舊上野宮の社僧の寺院なりしを天桂和尙の時にいたつてこれを別にすと云

處士獨嘯庵碑

同庵の寺境にあり時の名醫にして且吐方考　漫遊雜記　甲乙篇　囊語　葆光祕錄等の著述あり委くハ碑文に見へたり明和三年丙戌三月五日卒　行年三十五

相生松

同西中町にあり雌雄一株に生出て左右に別れ幹高く枝葉四方に繁茂す茶店ありて相生亭と號す

久敷もおもほへねども相生の松やふたゝび色まさるらむ　藤原榮壽

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ　相生松　ト題シ　續千載　誰しかも松のこゝろにたくへけん我にあひおひのみをあハせつゝ　法皇御製　トノ書入レアルモ構圖ナシ〕

梅屋敷

右同所の北にあり此地ハ文化のはじめ東都龜戸の梅やしきを摸して開ける所にして庭中一圓に數株の梅を植たり

此地ハ高津生玉兩社の東にありて荒陵山にも遠からず頗る便宜の地方なるに園中に數株の梅を植つらね樹下

楳屋鋪

分明飛雪似梅花　不辨飛花似雪花　奇絶漫爲神境想

仙姫羣立拂楊花　源華城

梅の花名によひよくてにほひかな　來山

鶯も小首ひねるや梅の花　諷竹

梅か香やなかるゝ水ハせかるれと　宇山

寒苦してやすけに咲や梅の花　魯九

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

に宴席を設くさる程に如月花の頃にハ清馨四方に薫じて往還の老若たゞに過ることを得ず況てや風流の好士に於てをや此に集ひて詩を賦し歌を詠じ或ハ連歌俳諧狂哥おの〳〵好める遊興に樂しみ又ハ彈あり諷ふあり打あり舞あり樣々にて餘るさむさに笑ひかねたる者まで遊宴の陽氣につれて一時に開く思ひぞせらる且かねて菊を作りて長月の始めより花壇を開き遊客を慰むるを以て春秋ともに最賑わし

香魂素魄喚春來　淡月微雲映酒杯　洞裏連旬要留客　萬梅不肯一時間　橋本惟孝

晴暖催人正午天　香風嫋々草如烟　笑吾纔覺羅浮夢　亦欲梅花深處眠　竹鼻則

上小竹葉野

藻鹽草ニ出　一說右梅屋敷の西のほとりをすべて　上さゝは野と いふト云　又或云員田山の邊とも未詳

堀百　網引するみつの濱邊にさハがれて上笹葉野に鶴かへる也　讀人志らず

筆が坂

上野宮の北東ニあり今ハ地面平均していさゝか坂の形を存す古名筆が崎なりとぞ　一說ニ經文書寫の筆を埋めて筆塚といひしより此名起れりト云

永照菴之記云　上畧　其庵のさまハ東に生駒の山高く玉兎頂上に昇り西に天鷲寺あつて金烏門中に落つ筆が坂

ハ北に近く墨江ハ南に遙なり右に四天王寺有て六時堂の鐘時々に聞え左に藏鷺の禪院あり日課より〳〵に靜なり云々

金毘羅社

生玉の馬場前持明院の寺内にあり當神像ハ京洛御室仁和寺宮より御寄附にして當寺の鎮守とす
例月九日十日にハ遠近より詣人ありていと賑わし

北向八幡宮

右同所の南側ニあり北に向ひ給ふハ御城守護の謂なりと
聞ゆ生玉の社司これを守る

本社　應神天皇　攝社　天照皇太神　相殿　手置帆負神　彼田彦神　思兼神　彦狭智神

末社　日本鍛冶祖神　天照大神の御時天目一箇神劔を作り給ふ又人皇十代崇神天皇の御宇天目一箇神の苗裔をして劔を作らしめ給ふ是等を祖神といふなるべし

當社ハ天正慶長年間城中の諸士此地において射術の調練ありしにより弓矢神を勸請すとぞ今尙所の名を馬場先とよび且例年五月五日に流鏑馬の儀式おこなわるゝも往昔の遺風なるべしと聞ゆ

辨財天堂

同北側にあり傳云　いにしへ海中より出現ありし靈像なりとぞ例年正月願の富ありてにぎわし生玉社僧南坊これを守る

難波坐生國國魂神社

高津の南ニあり祭神延喜式曰　生國國魂二座名神大月次相嘗新嘗
日本紀曰　孝德天皇佛法を尊み神道を輕んし給ひ生國魂社の樹を
削給ふといふことハ則ち此御神の社のことなり大坂上町市中の
生土神とす例祭六月廿八日御祓と稱す九月九日を秋祭といふ

三代實錄曰　貞觀元年春正月奉授難波生國魂神從五位下勳八等云々　同九月八日庚申云云　遣使奉幣爲風雨祈焉云々　此ニハ難波大社神ト有

舊事本紀曰　生島是大八洲之靈今生島御巫齋祀矣

祝祠式曰　生島能御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久生國足國登御名者白氐辭竟奉云云　一說ニ此ノ生國ハ則難波の生玉ならんか生國國魂神社といふを考合すべしと云

當社勸請のはじめハ年歷久遠にして詳ならず往昔社頭ハ今の金城の地なりしが明應四年本願寺蓮如上人御堂創建の時神社を側に移すとぞ社說ニ云　當社ハ明應年中本願寺の僧此所に來つて寺院を創す神地を以て境内に接す斯によつて神不潔を惡んで彼僧を罰すかるがゆへに恐れて神殿造替の宿禱を懷ひて神主藤原吉勝をして願辭を告しむ日を經て僧の身體本復す遂に神殿を新に營み迁し替奉る然るに其後天正年中織田信長本願寺と合戰の折から兵燹に罹て殿閣ことゞく灰燼となる纔に神璽を以て別所に迁し小祠を營む　高津社ニ隣るといへる舊地なるべし

爾後豐公城郭を築かせ給ふにより又今の社地に遷さると云々再建の事實ハ鐘銘に委し

生玉神社

生玉や蓮のかれ葉も詠めもの　杏廬

生玉や神なし月も神さひす　古聲

其　二

守る人も花に老せぬ宮木かな　宗祇

〔編者曰ク原本此ノ所貳丁挿畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

鎮宅靈符神社　拜殿北の傍ニあり　高松天滿宮　本社の北の傍ニあり　末社　本社の左右ニ列す

神舞殿　本社の南傍ニあり　舞臺　本社の後ニあり此所より浪花市中および西海の波濤まで一望にありて頗る絶景なり

本地堂　本社の前の北側ニあり本尊藥師如來聖德太子作十二神將左右ニ列す　大師堂　本地堂の東ニあり本尊石像の弘法大師自作の影なりと云

太子堂　大師堂の向ニあり聖德太子十六歲の尊影を安す當社をはじめて建營し給ふと云

神輿一基　寶庫ニ藏む八角の鳳輦造也　公命によつて賜ふ所にして莊嚴殊更美麗なり金具に御紋を鏤す

鐘樓　本社の前南の傍ニあり當時の鳧鐘ハ後年に鑄所の新鐘なり古鐘ハ慶長十一年に鑄ものにして今京洛本禪寺にあり因ニよつてこゝに出す

南瞻浮州大日本國攝州闕郡生玉大明神者本地醫王如來也佛宇神社之荒廢雖歷于幾世無修造一宇之施主伏以可謂億兆之君師正二位右大臣豐臣朝臣秀賴公欲企營締之志厚而乃命片桐東市正且元且元謹奉鈞命始于孟春終于季秋其莊嚴也朱甍金棟輪囷盡美矣鳧鐘之設亦復速成就也誠時至哉矣明神之擁護與聖主之至德恰如合符節相若之左右逢源此功德焉仰瞻末代耳鐘銘曰

生玉舞臺眺望

源太房卿集

なにはにて
明石のせと
を見渡せば
雲の浪こそ
立へ
たてけれ

行宗

新拾

見わたせハ
みとりの
空に
浪わけて
とまりも
あらぬ
舟出しに
けり

大炊御門
右大臣

築再興地　開百福田　鍛冶爐鞴　造建臺甎　蘭若高聳
蒲牢新懸　百八杵數　三世機緣　琉璃殿上　水精簾前
鯨吼巨海　龍躍深淵　上通兜卒　下資黄泉　姑蘇城外
遠到客船　長樂宮裡　常濕御筵　五畿七道　千歳萬年
撫育民戸　祝延皇天

慶長十一年丙午黄鐘吉日

釋門比丘雲叔叟玄龍謹書

按ずるに天正の中頃此地に社境をかへられしより慶長十一年まで凡廿餘年のあいた荒廢のまゝにて誰あつて再營する者もなかりしと見へたりさる程に此鐘ハ再建の時に成就せしをもつて其始末をくわしく銘すゝかるに又元和の兵亂に奪われ失へりさる程に當社に永く鐘なくして過たりしを後世新に鑄て今の鐘樓にかけたり時に又其兵亂の砌京師本禪寺の住職此紛失の鐘をはからず貴ひもとめて寺の法器とし新に銘を鐫し添たり故ニ今本禪寺の鐘となれり新銘略之

聖天堂　社頭の北ニあり大聖歡喜天を祀るいたつて參詣多し

稲荷祠　天堂の東傍ニあり

繪馬舍　天堂の前ニあり

南坊　同西方ニあり社僧の貫首たり眞言宗志宜山法安寺と號す

石燈爐　南坊の庭中ニあり豐臣秀頼公の御寄附にして奇石なり

社司　北向八幡宮の北にあり神主やしきと號す神主松下氏をはじめ禰宜七人神子四人

社僧　櫻木坊　眞藏院　遍照院　曼陀羅院　觀音院　醫王院　地藏院　覺圓院　持寶院等九ヶ寺　貫首南坊を合せて十坊と稱す

表門　本社の正面ニあり左右ニ多聞持國の二天王を安す

鳥居　馬場先にあり石の大鳥居也

當社ハ道頓堀より天王寺にいたる中間なれバ殊更に詣人繁く且近來本社の後邊に舞臺を建營ありし故に西の方を遙かに眺望し風景美觀なるにより茶店軒を列ねて賑わしく門前の池にハ夏日蓮の花紅白をまじへて喧亂れ傍邊の貨食家にハ荷葉飯を焚て進むさる程に遊客の手拍子きねが鼓の音に混じ三絃のさらべ神前の鈴の音に合して四時ともに繁昌なるハ皆神德の新なるが故なるべし

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ 生玉神社流鏑馬 ト題シアルモ構圖ナシ〕

銅錢觀音堂

生玉門前の南玄德寺ニあり靈驗いちじるしとて詣人平生に間斷なし

當尊銅錢觀音の來由を尋ねるに往昔寛文の年間九州豐前國中津侯の家臣に澤井庄兵衞といへる有沒後一子角助若年ながら家督を嗣て祿五百石を賜ふ然るに年を重ねず十九歳にて身沒ぬ母の歎きたとへんにものなし夫庄兵衞沒して後又もや頼み力とせし一子に別れし愁傷嘸かしと想像れて哀れなり斯て母親ハ悲しみの餘り菩提所開善寺に詣で住職雪庵和尚を師として剃髪授戒し以空比丘尼と號し夫と一子の爲に一心不亂に普門品を讀誦し花の朝月の夕も更に怠ることなく一の篋を佛前にそなへ普門品一遍を讀終れバ一錢を水にて洗ひ此箱に入をき積れる錢を以て觀音の尊像を建立せんことを誓り斯のごとくする事既に七年に及ひ寛文七年十月十一日ハ亡子の

七回忌に當りぬれバ懇に法事を營み終りしか其夜はからず隣家より火起りて以空尼の宅も共に類燒す以空ハ翌日おどろき乍ら灰を拂ひて年月積たる彼錢の有所を尋ぬるに悉々く燒蕩けて一塊となれり頓て淨水にて洗ひ是を見れバ錢の形累々とかさなり船座となり蕩流れしハすなわち御長三寸許の補陀落觀世音の靈像と現れ給ふ實や是以空比丘尼信心の感ずる所にして尊容自然と出現せしぞ難有き邦君にも聞及バせ給ひ御拜覽の上御厨子を寄附し給ふ斯有し程に黄檗木菴禪師高泉和尚等其傳記を書送られ世々の證とせられける爾後元祿六年癸酉八月以空比丘尼七十七歳にて逝去す以空の師雪庵和尚其頃ハ攝州天滿鄕靈岑庵に住居せらるゝに依て以空沒後右の靈像を靈岑庵に迎へて安置す　此舊地北の神明門前すじを俗に錢觀堂と字す是錢觀音の訛にして此邊り靈岑庵の古趾なるべし

元祿壬午年雪庵の弟子某當寺に住職せられしにより此靈像も共に當寺に安置し奉り今に至つて恭敬し奉る所なり委き事ハ黄檗木庵和尚同高泉和尚同月潭和尚前妙心雪庵和尚又一時軒等の緣起あれば爰に其略を誌す而已ト寺記の略に見へたり

源聖寺坂

右同寺より西に下る坂をいふ則ち下寺町源聖寺の門外より上るを以て號くるなりすべて此邊ハいにしへ一圓に大江の岸のつゞきなり

隆專寺絲櫻

玄德寺の東旭耀山隆專寺にありすこふる年を經し絲櫻の大樹多し花の頃ハ雅俗うち羣て幽艶を賞すすべて此邊の寺々に櫻樹多少ともにあらざるハなし

家に有たき木ハ松さくら松ハ五葉もよし花ハひとへなるよし八重櫻ハ奈良の都にのみ有けるを此頃は世に多くなり侍るなる吉野の花左近の櫻みな單にてこそと兼好の書れしに此絲垂櫻を洩されしぞ最恨みなり當寺の花ハ凡そ彼岸の頃を盛とすれバ天王寺への詣人道の便よき儘に羣くる雅俗殊更に多く幽艶を賞して花下に飯るを忘るゝぞ春の一興也

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ　隆專寺絲櫻　ト題シ　おほけなき御方の御入ありしを　おれき〳〵御出なりとて絲ざくら地に花つけて盛みせけり　栗洞

りやんさんな一けんしたるりうせんじまことにはねたゆび折の花　義栗

ばらん〳〵散しく琵琶の絲ざくらその一曲のりうせんじとて　魚丸　トノ書入レアルモ構圖ナシ〕

薄田隼人碑

同南增福寺ニあり文化十一年甲戌二月六世孫薄田兼實建る所也　石面ニ勒メ云

興德院殿集譽彗仁大居士

隼人正薄田兼相山城人本姓橘慶長二十年乙卯五月六日譽田山の役に戰死す委

くハ碑文に見へたり略之

天王寺古城跡

天王寺寺町月江寺の地にあり今俗にかハらけ投といふ尼寺也境内に藤の棚の茶店ありてかハらけなげの興あり

此城墟ハ當時淨土宗女僧寺となりて光明山林照院と號す本尊阿彌陀佛ハ惠心僧都の作と聞ゆ東の門外に隍の趾今に存す往昔元龜天正年間織田信長石山城を攻るの時佐久間右衞門尉信盛其男甚九郎正勝等こゝに在陣す敵の要害堅固にして容易落がたきが故に終に五ヶ年が間こゝに在りしかのみならず陣中において奇品を以て諸將を聚め茶事を玩び軍務に懈り更に戰功なきによつて天正八年八月十三日信長怒つて自筆の書を父子に投して是を呵責し當陣を退去せしむといふ

和州諸將軍傳云　天正四年丙子夏四月十四日筒井順慶法印永長岡兵部太輔源藤孝佐久間甚九郎源正勝惟任日向守源光秀等三萬五千餘人天王寺の附城にして光佐門跡方と合戰始る云々

信長記云　天正四年丙子五月大坂四方十箇所附城の普請事急にして天王寺にハ佐久間父子在番として進藤山城守松永彈正父子水野監物池田孫治郎山岡孫太郎青地千世壽彼等を初めとして所々の附城の侍大將其數を知ず誠に其爲體堅固にぞ見へにける云々

同　信長公大坂城御見物有べくとて八月十二日京都を御立あつて宇治より船にて御下向あり近年佐久間天王寺

に在番して加程の小敵今迄不退治剰一簾の働もなく徒に年月を送りし事是非に及バざる旨腹立し給ひて折檻の一書を調へられ翌朝彼父子方へ遣ハさる其文に云

上略　一甚九郎事茶湯に過つる百分一武道に心を懸なバ父の越度も加程ニハ有間敷を無益の數奇ニ莫太の金銀を費し自然抬頭をもたる者にハ其賞を忘り朝な夕な露地に出てハ塵を拾ひ數寄屋に入てハ堅柔を評し或ハ宇治橋の一二之間小佐目井の水大坂の水其勝劣を爭ひ數寄者の善惡にあたら際を費し臣下の忠不忠善惡の沙汰をバ忘却し唯明ても暮ても繪賛の長短是不是道具の古新可不可或ハ眞正見解を用ひ切たる袖ぶり月白風清境界に至らん事を欲し或ハ茶の色香食味の厚薄などに幾らの月日を空し詮もなき座敷等の角々迄も我と念を入事無勿體ひ惣じて大なる志ある者ハ藝能に能達せんことを欲し數寄などに身を勞し工夫を費すべき儀に非ず天下國家を知者の身にしてハ哲（賢）哲英雄の心を取衆智をかり諸侯大夫等ハ國郡の安否臣下の賢愚曲直我心中の善不善を辨へ心學雜學の得失を勘へ是を以て晝夜の業とせバ他事に心ハ入間敷事ニて侍らんか乍去淺々と好なバ士たる者ハ氣味も清らかに其品尤佳なるべし猶此道ハ後來の明君子ニ尋其宜ニ隨ひ可申事下略

天正八年八月十三日信長　　佐久間右衞門尉殿　同甚九郎殿へ

と自筆にて認め給ひ楠長庵宮内卿法印中野又兵衞尉三使を以て配處の定めもなく只急き天王寺を出よと御

西照菴

此所ハ月江寺の後門の西にありて浪花に名高き貨食家なり席上より向ふを眺むれハ浪花市中および西海まで一望にして其絶景言べくもあらすさる程に夕陽殊に美觀なれバ西照の名を蒙らせるなるべし庭中の林泉宴席の風流心を盡せり其趣き京師の圓山に彷彿たり庭面にハ櫻楓萩など多く且かねて菊を造りて晩秋の上旬より花壇をゑつらひ大菊およびさま〴〵の細工菊を飾りて賓客(を)もてなすゆへ殊更に繁昌なり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

諚なりけれバ多年蓄置し無量の珍寶を振捨やう〳〵黄金廿枚ばかりの外よりハ腰にさしたる刀大小ならでハ又身に隨ふ者もなく立出られける心中こそ哀なり是ハ日頃筋なき福を強て求めし其報なり云々

大和志ニ云　吉野郡十津川庄武藏村光明寺ニ佐久間信盛墓　天正四年七月十二日　按するニ信盛天王寺退去ハ天正八年なり又花押藪ニハ天正十年卒于熊野ト云　然るに駿府名士何某の聞書に云く佐久間右衞門尉信盛大坂退去の後播磨國益井の山奥五加木が谷といへる所に引こもり同伴の老翁四人と仙を修して籠り長壽しけるを御旗本佐久間久左衞門といふ武士内々扶持しける尤金銀米絹のたぐひにあらず只朝鮮人參をとゝのへて送りけるとなり信盛自詠の哥を自筆にてもたゝめ送りしあり　仙家花　こひしさをなぐさむやとて山がつもおのが心の花のみやこ路　信盛　ト云々又裏書ニ慶長十七年三月十八日とあり既ニ文祿中九十歳はかりにて死去せし風聞ありしを思へバ百十餘歳なるへしかゝりし程に攝州の池田武藏守に見せしむべしと姫路へ仰遣さるニより武藏守すなわち狩ニ入とことよせてくだんの山中にわけ入池田治平といふ者をして見せしむるに其谷といふハ二町四方がほどハ五加木ばかりの谷間にて此ニ一草菴をむすびて五人の翁閑然として座せりもとより道もなくたやすくハ行がたき深谷とぞ尙寛永の年間まて存生せし事木村氏か見聞草といふ書にものせたりト云然れば攝州富田にて没せしと云ひ或ハ熊野或ハ十津川庄にて死せしといふハ浮説ならんか後人尙考ふべし

〔編者曰ク原本此ノ所貳丁挿畫ノ豫定ニテ其ノ壹丁ニハ　天王寺城墟月江寺　ト題シ　尼寺の髪にそろえるわらひかな　希因　梨の花うるわし尼が念佛まで　言水　トノ書入レアリ他ノ壹丁ニハ　天王寺城に信盛茶湯に耽る　ト題シテ　雨つゞく秋の儲や茶俳諧　祇雲　トノ書入レアルモ共ニ構圖ナシ〕

蟲谷

右から堀の古趾をいふ世俗この所を眞田の抜道といふハ誤りなり　秋の頃ハ蟲の音多く聞ゆるを以てかくハ名づけり

蜂須賀家之塔

同寺町國恩寺ニあり五輪の石塔婆也鳥居燈爐玉垣等ありて結構おごそか也阿州侯の菩提所なり

石面ニ云　福聚院殿前匠作良嚴紹張大居士

裏ニ云　修理大夫從四位下蜂須賀正勝之墓

左傍ニ　天正十四丙戌五月廿二日

尾張名所圖會蜂須賀村條下ニ高名記に云　中頃尾張國蜂須賀の里に蜂須賀藏人源正利といふ人あり元來斯波武衞の末葉なりしかども武衞家衰微に及んで此里に蟄居し所の名を以て苗字としわづかに百貫の地を領して年月

を送り民家に軒をならべ其名かくれて知る人更になかりける大永六年一子をもふく其名を蜂須賀小六郎と名づく長ずるに隨つて智仁勇の三德を備へ智謀勇猛の良士たりはじめ犬山の城主織田十郎左衞門信清が旗下に屬せり一日信清他に出行ぬるの間敵うかゞひ來りて犬山の城を圍む小六郎防ぎ戰ひ敵を追拂ひ棟梁の敵を鎗下に討とる其武功世こぞつて感議せり其後岩倉の城主織田兵衞尉が旗下にある時家臣謀叛して城を圍む則小六郎突て出敵を追拂ひ鎗をあわせ首をとつて高名す夫より信長公につかへ濃州齋藤龍興と合戰のとき功名比類なく信長公の感喜なゝめならず領地五百貫を賜へりて蜂須賀彦右衞門尉正勝と改名す則信長公の命によつて木下藤吉郎秀吉の後見にせらる其後數度の高名あけて計ふべからず云々

和州諸將軍傳云　天正七年己卯夏五月蜂須賀彦右衞門尉源正勝に信長公より阿波國を賜へり此秀吉の吹擧に依てなり正勝初字ハ小六父ハ藏人正利尾州海東郡蜂須賀の里にして百貫の領主として斯波氏の末なり順慶筒井元より正勝に好み故に森志州が長子九良兵衞尉好高をつかわし呈物ならびに賀を伸しむ正勝克遇しらひ子息小六家政を出して饗應し盃を與へり云々

淺野侯之墓

右同寺の隣吉祥寺ニあり五輪の石塔婆なり幷ニ義士の石塔四面ニ圍めり　當寺ハ淺野家浪花におひての菩提寺なりと云

冷光院殿前内匠頭吹毛玄利大居士

元祿十四辛巳天三月十四日

同左の傍ニ石塔一基あり勒シテ云　忠誠院刃空淨劍居士　大石内藏助四十五

左の傍ニ　超倫院刃上樹劍居士　大石主税十六

此餘義士の石塔を以て四面を圍めり當寺十五世慧海和尚修覆し再興する所也

當吉祥禪寺ハ往昔淺野家浪花に於ての菩提所なり故に君侯義士等の石碑を建て追薦供養を執行へり尤佛殿に
ハ冷光院殿をはじめ内藏助主税等の靈牌を安し幷に菅野三平重實　陽光院洞廓消泉居士　元祿十五午年正月十四日　天野屋利兵衞　法正院空譽土
齋居士　享保八年八月六日　等の靈牌あり又表門ハ淺野家藏邸の　中之嶋西信町ニあり　門なりしを菩提の爲に寄附有しよし且此門に掲
くる万松山の額ハ長矩侯の筆にして裏に播州赤穗城主淺野内匠頭筆と記せり斯る由緒の寺院なる故義士の遺墨
遺具許多什物とす尚嘉永子年ハ義士の百五十回忌ニ當れるにより當住慧海和尚豫て同志の徒を乞勸めて四十六
士の木像を建立し佛殿に安し二月四日追福の法戛を修行し幷びに諸方の好事の家に祕藏ある所の義士輩の墨蹟
遺物等普く集め客殿において縱觀せしむさる程に遠近の好士羣參して是を拜し皆感涙を催せり

義士行

竭股肱之力　効忠貞之節　繼之以死　眞老臣心

人の鑑ハものゝふの姿見大にうつしてとりがたきものならんかし扨がたきハ義士の忠信嗟芻相を欺くべし噫昔か

たりとぞなりぬ天則賢にあたふれば賢にあたふ子も又各禪りたらん皆是平生愼のみちたる物にして匂ひと
芳しきを結びて盛んなりみよし野のなつみの川の川淀或ハみじかき鴨の足なみうかぶ世もある水の上の月影その
光りの深きをあらず手にとらずとも貴賤のこゝろに其光とゝまる哉春過春到て長く光りのとゞまる哉

淡々

義士追悼和歌三幅　千種三位有功卿詠四十餘首　當寺所藏左ニ寫す

大石内藏助良雄

城にあらぬ城の石ずゑ世に出てかゝみ岩とぞ照わたるらむ

吉田忠左衞門兼亮

よき人の吉田よくみしむくひとて心も身をもくだきはてけん

原惣右衞門元辰

ほりかねの底の清水を心にて名ハかぎりなきむさしのゝ原

片岡源五右衞門高房

今もよにみちて匂へる片岡の梅ハときはのこゝろこそすれ

間瀨久太夫正明

いは間ゆく川瀨の水の一すぢも終にひゞきの灘にこそいれ

小野寺十内秀和

墨染の法のころもゝきざれとも跡とふわさぞこよなかりける

大石主稅良金

いかにかくち引なるらん大石のまださゞれともいふ程にして

磯貝十良左衞門正久

荒磯のかひ〳〵しくぞ生れけるとくゝだけしゝさもあらバあれ

堀部彌兵衞金丸

よゝひさへ世にまれらなるほまれかなうらやみつべき物にざりける

近松勘六行重

高砂の尾上にちかく立る松是もちとせの名こそふるけれ

富森助右衞門正因

たらちねのおやの形見の小夜ころも下にやかけし母衣のためしを

潮田又之丞高敎

はりまがたいそわにつくる潮田の鹽けのかほり永く盡せし

堀部安兵衞武庸

舟よするほり部さわぎて水鳥の立るその名ゝよろづ代迄に

赤埴源藏重賢

赤埴の下にその身ゝくちぬとも埋まぬ名こそよに匂ひけれ

奥田孫太夫董盛

あし引の奥の山田にすむ雁のたちあらわれて列もみだらず

矢田五良左衞門助武

武士のやたのゝ葛ゝかれしより風のこゝろものどけかるらむ

大石瀨左衞門信清

後瀨にゝ又あるべくもおもほへず此川いしのなかの大いし

早水藤左衞門滿堯

瀨をはやみ年月たにも流れしを殘るゐせきの波そとゞろく

間喜兵衞光延

ますら男のなれる影にも久方の雲のはざまに星のかゝやく

中村勘助正辰

はる〳〵とよに流れても赤穗なる中村川の音のさやけさ

菅谷半之丞政利

天のゐたかくれなかりし菅小笠今とり見ても袖ハぬれけり

不破數右衞門正種

永き世に名をバとゞめて不破の關跡なきものゝあとハ有けり

千馬三良兵衞光忠

まれらなる百ちの中の龍馬さらに其名や世にかけるらむ

木村岡右衞門貞行

松かしは立ならひたる深みどりくらへん物や心なるらむ

岡野金右衞門包秀

岡野へにたちし臣の木種もあらは種とらましをゐめゆわましを

吉田澤右衞門兼定

はしきよし吉田の水にかけ見えてにほひ渡れるおもだかの花

貝賀彌左衞門友信

足引の山をつらぬく貝かねハ世をへだつとも聞えざらめや

大高源吾忠雄

不二の根の烟とたてる名も高し曾我のむかしと何れ增らん

岡島八十右衞門常樹

此島にすむなるをしのおもひ羽の思ひハ君に盡したるらし

武林唯七隆重

萬代の竹のはやしになぞらへて深き操をたゝへこそせめ

倉橋傳助武幸

二心なき名ハくちじはしだての倉橋山に波ハこゆとも

村松喜兵衞秀直

いにしへの雪のあしたのむら松の花のおもかげ散ときもなく

天王寺寺町
蜂須賀家墓
赤城義士墓
石壁師堂

大石内蔵之助
義士墓
石壁師堂

杉野十平次次房

年月ハはやもすぎの、ほこすぎに殘るあらしの音ぞ聞ゆる

勝田新左衞門武堯

つひにかく事ハとけ、ん仇人にかつたはかりも法にかなへは

前原伊助宗房

月のまへはらふつばさに雲きえてこゑもさやけしあめのたつむら

間瀨孫九郎正辰

ふか間川いはま行せハ染ぬともかちすさみけん色ぞ流るゝ

小野寺幸右衞門秀富

むね高き瓦の松ハむへしこそ稀なるたねと人のいふなれ

間十次郎光興

みだれ入かりぢの小野の末終におち草とりしはし鷹そこれ

奥田定右衞門行高

若苗ハかれにけるかも榮行んおくてのみをハ露もをしまて

矢頭右衞門七教兼

石にたつ矢もあるものと丈夫の心のねらひはづさゞりけむ

村松三太夫高直

打わたす遠山もとの村松ハおのが名たつる煙なりけり

神崎與五郎則休

神崎におもはぬ汐のみちしよりいかに難波の身を盡しけん

茅野和助常成

冬枯の淺茅の原とみし程に千代にかをらん花をさかせり

横川勘平宗利

瀧落る山のよこ川たてぬきに流るゝ物ハ名にこそ有けれ

間新六光風

くだけても又浮出る玉なれや波のはざまの遠つよの月

三村治良左衞門包常

むら〳〵に犬うつわらべ夫だにもますらたけをゝ常にたゝへて

寺坂吉右衛門

寺坂の一もと松をうち見れバ霜の色はの中ににほへり

○外　橋本平左衛門

かれあしぞ哀なりける津の國のながらの橋と聞ゆべき身の

萱野三平重實

津の國のかやの丶小がや枯しかど中に二ツの道は見へけり

節女義僕等

松かれし跡にゆかりの藤つ丶じ散もちらぬも哀なりけり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁挿畫ノ豫定ニテ時餘一擊　千秋芳氣賦藩臣　源華城　トノ書入レアルモ構圖ナシ〕

吉祥禪寺義士木像　ト題シ　多年鍛盡鐵精神　白雪滴紅寒月晨　亡主當

朝鮮石界墻

右同寺にありくわしくハ門内の左右石壁の面に勒せり北の方ハ朝鮮人の書にして修理前墻銘と題して曰

萬松山吉祥寺岩佐氏之菩提所也對馬州人死於浪華皆瘞葬于此矣而住僧羅病圓寂也屋壁垣墻風刄雨蝕將有傾圮之患會從謙和尚來住四顧慨然而嘆者久之曰吾前住日豈如是乎乃語岩佐氏對馬州八坂春田二子二子遠覓墻石於高麗轉運贈之則岩佐亦援引輸之於是捐貲鳩材督工修理屋欲其全墻欲其堅遂皆善成也其他門閣及園囿靡不渙然一新于是焉而和尚之爲人少嗜欲行高潔菲飲食惡衲衣潔青精美梵宮又將欲祈福於後人其功德可謂大矣予聞其事而嘉其志實不能自已遂書此以爲銘銘曰

佛光如日　功德有隣　補壤爲築　從故得新

四墻累石　法界無塵　莊嚴遶屋　清淨照人

日東文化十四年丁丑六月日

朝鮮國　金明旭　書

同門内南方の石壁に勒して曰

抑當山は予が家代々墳墓の地なるが年月をふるまゝに軒端くち墻くづれて雨風を防に便なし再住從謙和尚甚是を患ひ再興に志ざしあり予常に和尚の德をもたふが上ハたこたびの志をかんじ普く諸檀越に告す丶めしに各隨喜の誠を抽給ひ財を抛給ふ人少なからず中にも對馬なる八坂春田の二君ハ高麗の磐石を求運びて是を其墻ねに疊みて永く朽ざらむことを計り且彼國の博士に乞て其事を記し鐫て後の世にも傳

へまくし給へり予も又喜びに堪へず拙なき言のはをくはへて其石の片々にかひつく

法のため深き心の信にハ高麗の岩根もなびきよりけり

文化十五年二月

岩佐宣孟敬識

道邊之柳

同寺の庭ニあり佐々木泉明奥州より携帰りて植るところなりこれハいにしへ西行法師の道のべに清水ながるゝ柳蔭とよみし名木なりとぞ　同傍ニ碑あり勒して曰

行法師道邊柳播植記　以上九字篆額

佐々木泉明浪華人也家四橋北以賣酒爲業性素澹泊不欲耀才市聲焉蚤事遊歷單身獨步客流四方每一出輙重月或經年其間勝境名區則搜奇剔隱惟以目不周玩情不給賞爲憾矣曾喜吾　邦俳歌仰慕僧桃青所爲適遭山川峻美風雲與之相映發廼逸篇秀句任舌嘔出欣然獨神暢其間矣明和己丑春過關以東遊總毛二陸之間觀所謂道邊柳者往昔歌僧西行貽泉柳一句于此故以名焉明折一枝還于家插植後圃遂下根上葉生長日繁焉蓋西行俗姓佐藤氏名憲淸其先出自鎭守府將軍秀郷以耽嗜潔素不肯負閥閱之名竟棹脫世祿追鷗波萍迹周行天下囊篋杖扉之外又不貯一物衆但

觀諸楮頴之間而未知風範爾高焉明竊善之於是移柳荒陵吉祥禪刹院庭普募輯人詩歌暨俳句幾千有餘首瘞藏之其本又徵予記勒堅珉庶乎與行之名俱不朽焉後之覽者夫勿翦勿敗

明和庚寅冬十一月穀旦

浪華後學奥田元繼識

靈前に捧んと新柳を龜井にかさして

裏ニ云　春風や玉出の水を玉櫛笥　泉明

詩歌連誹一人一首短册千八百有餘

鳳林禪寺

同南に隣る禪宗曹洞派最乘山と號す

本尊　釋迦牟尼佛　左右　藥師如來　彌陀如來　聖觀音　長三尺聖德太子の御作　客殿に安す

什寶　寶珠二顆　干滿と稱す圓形五分許黃金の寶塔に藏む往昔將軍家上覽によつて奏の御紋の囊を拜領す

弘法大師眞經　十六羅漢　兆殿司筆

當山開基ハ才菴存藝和尙本願ハ圓明院殿華屋宗章大姉　轉法輪三條殿の息女にして北條十郎氏房の妻室たり

往昔天正十六年の草創にて武州市川永福寺の末院當津一派の僧錄なり樓上の鐘銘ハ卍山禪師なり勒して曰

攝城最乘山鳳林寺主萬源燈公嘗鑄大鐘結制鳴法屈指則已十年其鐘未刻銘蓋似有待而今求音聞證明於老衲其意慇懃不得飾讓信口吐臭以爲之銘銘曰

浪華巨刹　最乘山中　唱正偏祕　建精進幢
源攝萬派　燈照諸叢　熾陰陽炭　化牝牡銅
捧蒲牢鈕　挂法界宮　風起雲起　驚虎驚龍
朝打暮打　破頑破蒙　達摩禮樂　觀音圓通
是誰啓發　此大口翁

元三大師堂

同所天滿寺ニあり又金毘羅秋葉等の祠かたはらニあり當寺ハ日光御門主の末院ニして天台宗也生龍山顯性院と號す

虛空藏堂

同所西側太平寺ニあり虛空藏菩薩を安す參詣間斷なし別て三月十三日ハ十三歲の童子羣參して智禍を祈るこれを十三參といふ京師嵯峨の十三參ニ同じ

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ虛空藏堂十三詣ト題シアルモ構圖ナシ〕

祇空翁文墳

右同寺ニあり祇空翁ハ誹諧の名家也　浪花の人にして來山淡々同時の名譽なり

誹諧家譜云　祇空稻津氏浪華人也初號青流感慕宗祇法師之風流經廻諸國至于相州箱根湯本於祇法師之墓前落髮自號祇空遂赴東奧羽越境暫遊止江府一宵有夢敬字依之更稱敬雨後住于洛北紫野又寓浪華復赴東府之途中沒於箱根湯本享保十八癸丑年四月廿三日壽七十一遺偈曰　舉手動足　平生神通　鐵牛破裂　音信不通　此世をハぬらりくらりで死るなり地獄つぶしの極樂の介　門人立碑於祇法師之墓傍追號玉筍山人後又合祭於深川八幡宮末社

淡々發句集云　祇空ハ相模の國早雲寺宗祇の墓前にて薙髮の事ありて祇空と改む

宗祇の句ハ　世にふるもさらに時雨のやどりかな

翁ハ　世にふるもさらに宗祇のやどりかな　と檜笠浮雲の趣ハのべられたり

竹尊者におくる時ハ　世にふるも更にばせをのやどりかな

〔編者曰ク原本此ノ所四行空白〕

空の字ながく保ちたまへんめでたしとぞ申遺しける

今宮草云　宗祇の蚊屋に三年とハ古くもいひ傳へて是等さへおかしきにことし稲津氏のぬし爰古里に登り來る序早雲寺に馬よせさせて旅衣ぬぎもあえす剃髪のほゐをよろこび石上に座して一偈を作つて陽々たりやまことに工みても工まれじ風情々々其因緣こそゆかしけれ

旅櫛笥あけてえむらん神無月　來山

北山不動石像

同寺ニあり醫師北山壽安が填なり長等身の不動明王左右に矜羯羅制多伽の兩童子列す　石像の背面ニ勒して曰

等身石像生前是誰吾死後是截斷死和生尒吾空也耳　北山爻松子並題

此石像ハ北山壽安存生中に建をく所とぞ昔織田道八顔輝が筆の達磨禪師の像に題して昔ハ達磨今ハ道八と書て則ち自像に用ひられしに似たり其氣象考るべしト近世畸人傳ニ見へたり又石像の前に石橋あり此左右に石を立て題して曰

渡斯橋須忘生死　入此地應觀色空

當不動尊の石像靈驗あらたにして祈誓を懸るに成就せずといふことなし別て眼病を煩ふ者必らす平愈すとて靈前に供する水をもつて眼をあらひ代參の者ハ竹筒にたくわへ皈るもあり故に陰晴をいわす詣人間斷なくして線香の烟天にたなびき眞言の聲邊りに喧し別て毎月三日廿八日等ハ緣日なりとて參詣殊更に夥し

友松子ハ北山氏通名壽菴といへり長崎人其先明福州榮宇馬府君日本に來舶し長崎丸山の遊君樋口氏安人に會し產る所なりといふ醫を以て出身せし時その系圖を問るゝに唯長崎遊女の子とのみ書付て出したる器量を世に稱せしとぞ其徒の記せるを見れバ其爲人名を名とせず利を利とせず能善をよみし惡を惡む性佛乘を好み癖活人を嗜む是を以て鼎湖の神書を閩の浮屠に授り長沙の心法を浙の異人につたへ日に惟ひ夜に思ふこと三年心融に疑釋け求めに隨ひて治を施すに効驗桴の如く應ずいまだ三十ならずして洛に至り諸國の諸侯のため賓をもて優待せらる又黃檗の開祖及び卽非高泉の諸大老贈言して美せらると言り其著述を見るに實に博學强記なるが上に治療の才前後其類ひ稀なれバ其徒の記せる旨私せるにあらじ凡當時の醫名ある人といへども東垣丹溪の寓窟を出ること能わざる間に獨長沙の長するを規範とし下明末の諸家をも採て佐使とす其言曰如爲人治療則不可不全讀仲景之書也又文字の格法を明にせる所ハ增廣口訣集に中山三柳の文章文字を改正せしに見ゆ加之多能にして卜筮風鑑地理星命の學の如きも門人の才を量て是を誨とかや或ハ醫人と商量すれバ則これを告るに親疎を別たず其非を見てハ人に讓らす覿面に辨明し其誤りを聞てハ含糊に忍びず驀直に討論す唯此人に補なくして方寸に愧ることを恐るなり故に世醫或ハ狂とし或ハ直とし且譽且毀るとかや門人の請によりて著す所刪補衆方規矩　評議纂言方考　增廣口訣集等皆四十未滿の所爲也後又方考繩愆あり凡著述他の書によりて吾意を述るものにして一家の成書なし是卽一家の所立なるべし此人心剛にして然も方正なれバ富

太平寺

北山不動

貴の家の藥謝におきてハ黄金多からざれバ納めず貧窮の者にハ藥のみならず米錢をも施しぬ斯有バ家貧しく萬たらわねども煩ひとせす債を乞者きたる時ハ此頃ハ療治貧家のみなれバ物をとらず頓て大人の病を愈して後つくなわん夫までハ待べしと何の會釋もなく大聲して言放せバ風狂人とのみ言傳ふさるに或時尾張侯の召に應じ御疾を愈し金銀あまた賜りけれバ頓て門に札を立て

此度名護屋侯の御病氣醫療し奉り早速平愈し給ふ故金銀多く頂戴申ゆ古借の面々書出しを以て取に參るべし　北山壽安

ト記しけるとぞ又友松翁曾て一日ぐらしといへる文を作りて世人に教諭せられけるが實にかしこき訓なり故にこゝに記す

世に一日ぐらしと云る事有此一日暮しといふ事をよく覺悟すれバ精神すこやかに身を養ふ術を得べし夫をいかにといふに一日ハ千とせ萬歳の初なれバ一日をだに能やしなふ事を得れバ生涯を養ふもまた難きにあらず其日一日を暮すべきほどの勤をなせバ其日を安く過さるゝなり然るを世の人のならひとして明日ハとやせむ斯やせむと未だ來らざる事に心を苦しめ或かも其明日と思ふ心に奪れて今日の日を大かた怠りがちに過し又明日に至れバ又其あすの事を思ひ量るほどに始終あすをくゝと思ひて今日をなきものにし常に心氣を遠きに費やし精神を徒になす兎角明日の命の程ハ量り知れじされバとて今日の産業を疎かになせよとにハ非ず唯何事もけふ一日の勤めと思ひて勵み勤めバいかなる苦しきわざも堪べく又樂にふける事あるまじたとへバ愚なる者の君父につかふるも年月長しと思ふ故にこそ不孝不忠にも至るなれ唯今日一日と思へバうめる心もなきぞかしされバ聖人の日々に新なりとのたまひし教にも叶ひ一日とおもひて勤れバ百千年難かるまじく生涯なすわざと思へバ煩わしかるべく生涯とハ長き事のやうなれども今日の事とも翌の事とも百年後の事とも量さるべからず凡人間一大事ハ今日の心なり今日疎にして明日有事なしなべての人ハ遠きを思ひ量りて眼前の理をさらざるなり　六世の孫李菴といへる人文政中南本町に住せり此人沒して後家絶たりおしむべし

風吹不動尊

同寺の西の堂内(に)あり其像の火炎のかたち風に吹かれたる如くなるゆえに世俗かくハ名づけしとなり先版に風吹不動を壽安の墳なりといふハ非なり

鐘樓　中門の傍ニあり　文有略之銘ニ曰

銅之在山　與石同頑　百錬千鍛　位金銀間
爐鞴變化　鯨吼禪關　音聞塵夢　施心破慳
太平基業　法運循環　功德不朽　長鳴海寰

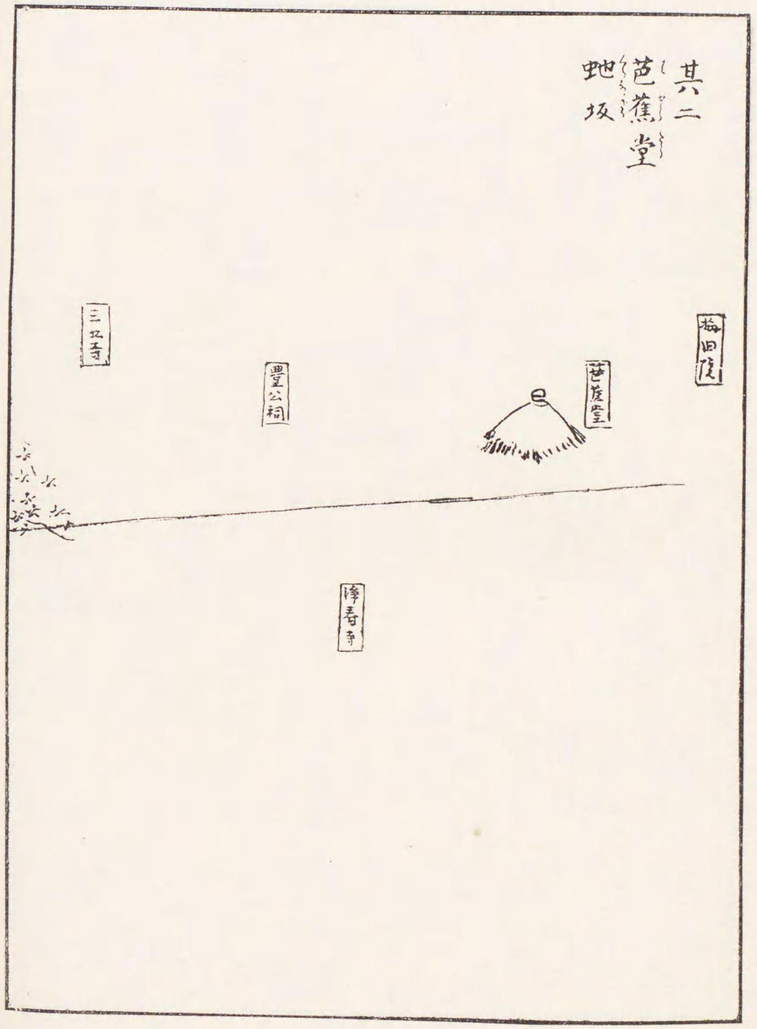
石藥師堂

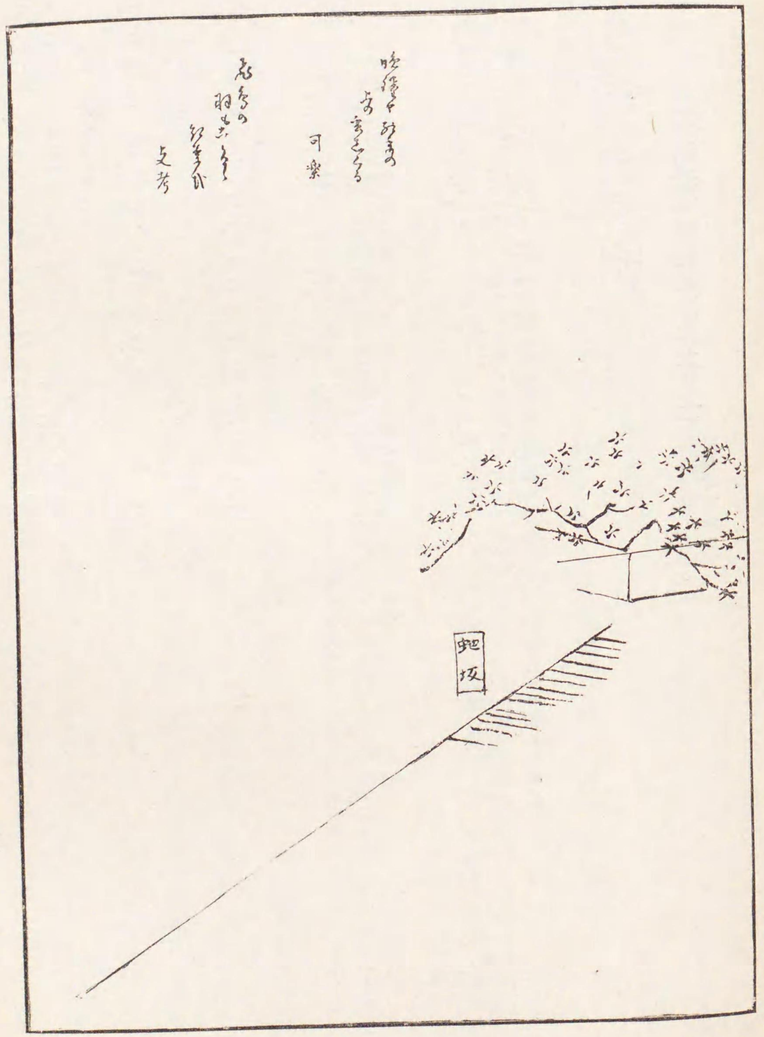
右同寺の向ひ法岩寺ニあり聖德太子の御作にして日本三躰の藥師佛といふ靈驗あらたにして詣人常に間斷なし

洞岩寺糸桜
履空瓶室
大平寺
北山不動
不動堂
天瑞寺
法岩寺
大日堂

春陽軒
舟玉祠
洞岩寺
糸桜
舟天祠
昌林寺
淳仁天皇

其二
芭蕉堂
蛇坂





洞巖寺絲櫻

右同寺の西ニ隣るいにしへより絲櫻の大樹あり曾て芭蕉翁の句あり花下に碑を立勒して曰

洞岩精舍の櫻を見て

口とぢて蛇坂をくだりけり　はせを

洞岩寺の花見にまかりけるにかたへの人狂哥よめと望みければ

蛙ほどの哥さへとんとよめぬなり　蛇坂の花にのまれて　魚丸

芭蕉堂

同所梅舊院の庭中ニあり茅葺の小堂に芭蕉翁の木像を安す座像の長凡一尺三寸許尤此像ハ近年にあらたに作るところ也當寺僧坊の奥の間に安する芭蕉翁の木像あり是ハ其はじめ江州にありし古作の像なり然るを先年故あつて俳師不二菴二柳こゝに納むるよし聞ゆ且俳師の墨蹟種々當院に藏す

豐太閤尊像

同所珊瑚寺ニあり長凡八寸許五十七歳の影なりといふ桑山修理亮重晴の納むる所とぞ尤桑山由緒の寺なるが故に一桑山と號す又傳來の桑山小粒といへる小兒の藥を出す桑山修理亮重晴剃髮して宗榮治部法印と號す慶長十一年十月朔日卒す法號果報院春谷宗榮居士　尚當寺ニ什物あり略之

佐々家菩提寺

同所南側ニあり壬生山淨春寺といふ靈位過去帖等あり

當寺鬼簿云　當寺開基海寶院殿淨春大居士　年月不記　成政の長子佐々勝右衛門信治の法號也

端翁宗的居士　天正十六年子五月九日　佐々陸奥守成政

淨春寺殿一泡幻夢大居士　文祿四年午五月廿四日　佐々孫十郎成治

豐臣家譜曰　天正十五年六月賜肥後于佐々陸奥守成政使居熊本城云云

肥後國人多叛佐々陸奥守成政々々屢戰平之秀吉使人言之曰不經公命私動兵戈甚不可也云云

佐々陸奥守成政發肥後到尼崎窺秀吉之氣色秀吉遣人諭之曰成政以苛酷御民故民人多叛而軍旅起矣是成政之大罪也其須自殺成政卽自刎時人感惜云云

和州諸將軍傳云　茲に佐々陸奥守菅原成政ハ舊冬より以來勇武を以て肥後國を漸く打治め一揆の趣き且ハ年始の賀儀を仲んが爲に件々國の名物を相揃へ四月廿五日に肥州を出て五月五日に攝州尼ケ崎に着船しぬ上下僅に百五十餘人なり秀吉是を聞大に怒り石田治部少輔藤原三成を遣して云國士の一揆等千回相背くとも幾度も慈仁を以てすべき所に新入の大國に於て殺戮多く仁心なく且耶蘇宗を信ずるの由上意を背の條甚だ以て奇怪なれバ大坂へ上着有べからずト云々　奥州が性質狹くして淸直なり理に屈して一言の答へなく五月九日一云正月九日尼ケ崎に於て一寺に入り遂に五十歳にして自殺せり是秀吉の邪謀なり誠に惜べき良將なり云々　奥州が長子佐々勝

右衞門信治二男孫十郎成治ハ大坂に於て一年が間蟄居せしむといへども翌十七年正月三日免許を得て勝右衞門一萬石孫十郎三千五百石の扶助ありて旗元に仕へり勝右衞門信治後に薙髮して僧となり淨春と號し達摩宗に皈し攝州天王寺に於て一寺を再興し其寺に住して後に迁化す今の壬生山淨春寺是なり　云々

然れハ當寺開基海寶院殿淨春大居士ハ則ち勝右衞門信治なり孫十郎成治ハ父成政沒後僅ニ八年を經て文祿四年ニ卒す兄淨春ハ存命當寺に住し父弟の菩提を弔ハれしなるべし

舟玉神祠

同所天瑞寺こあり本地十一面觀世音といふ海上安全を祈る人常に詣す

按するに唐船長崎へ入津の時船菩薩とて敬ひ携へて唐寺に迁すことあり是を嫣姐揚といふ則ち舟玉神にして姥嫣ともいふ傳聞昔時福建興化の林氏の娘大海に沒して神となる神異靈現にて海難を護す是を天妃に比し聖母とも號す觀世音の化身なりと云薩摩の國野間權現ハ卽姥嫣神なり野間ハ姥嫣の和音なり唐船長崎へ着て此舟神を唐寺に預くるなり出帆乘船の時又寺より出して船に安置す委くハ長崎聞見錄淸俗記聞に見へたり　或云　宋太宗の時漁を業とする人の女雍熙四年九月九日昇天して雲中に聲ありて我ハ則觀音の化身なり今より後普く海運を護せんと云へり故に是を船玉宮と稱すとぞされバ當寺に安置せし船玉神も所謂本地觀音薩埵と聞ゆれバ是等の說に同類ひなるべし

蛇坂

右寺の西を下る坂をいふ則ち下れバ下寺町と號し諸宗の寺院つらなれり坂の名義詳ならず道の曲れるによりて名づくるなるべし

油煙齋墓

下寺町蛇坂の北光傳寺ニあり石塔婆ニ貞柳言因居士と勒す　天保四年百回忌の追善供養ありて其時新に古墓のかたわらに碑を建　貞柳翁墓傍ニ享保三甲寅年八月十五日沒八十一　碑文あり略之

新碑の面ニ云

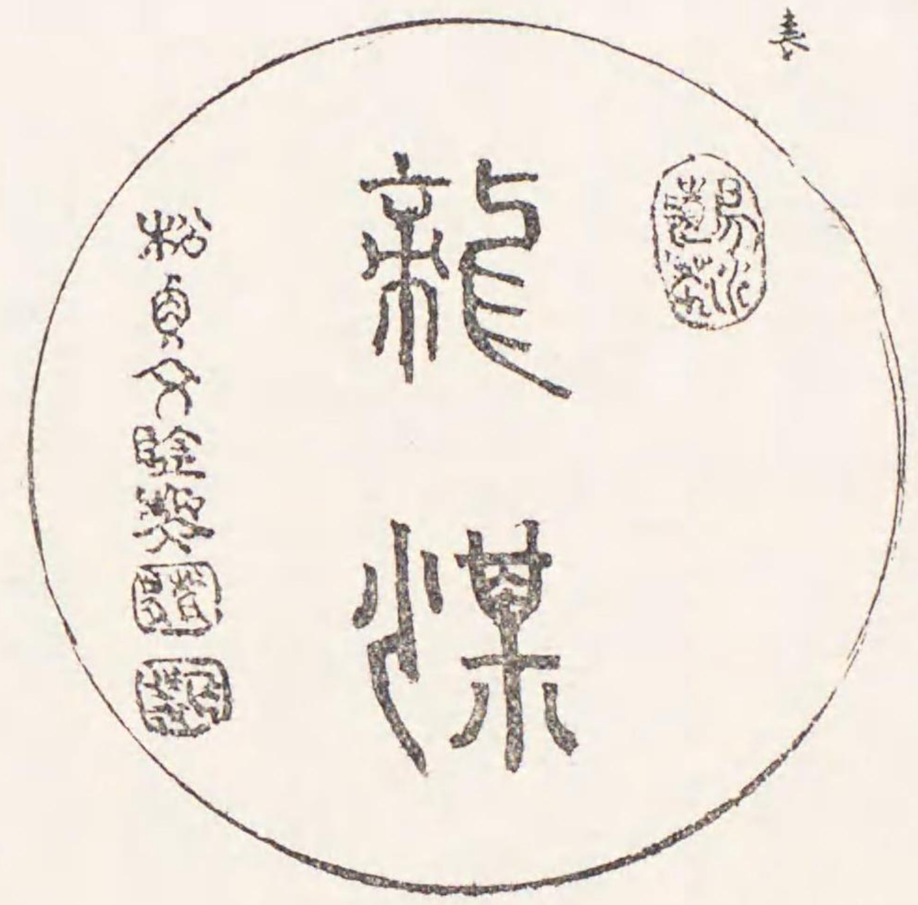
百居ても同じ浮世におなし花月ハ眞丸雪ハ白妙　柳門四世桃李園栗間戸七十八歲書

貞柳翁姓ハ藤原氏ハ永田と云攝州大坂の人承應三甲午年生る實ハ榎並氏なれども母の氏を名のること故あるべしとぞ家號を鯛屋といひ俗稱を善八といふ或ハ忠兵衞又ハ忠七ともいへる說あり父を貞因といふ是も狂哥を善し連誹に精し浪花御堂筋雛屋町西南角に住す世々菓子を製し業とす裏に土藏ありて其柱に自筆にて　我宿ハ御堂の辰巳ふかも角よう賣ますと人ハ言ふなり　ト書つけ有しとそ　則貞因の嫡子にして若かりしより敷島の道に心をよせ狂哥また類ひなし後に八幡山豐藏坊信海法印に學びて其名海內に溢れ誠に此道の中興と稱じき實名はじめハ良因といひ又言因と改め信海法印の一字をうけて信乘とも信乘軒とも號す又精雲洞　霜露軒　遍船子　放曠子或ハ平魚子遊魚子　珍菓亭宗伯　助榮亭　圓果亭　又生軒　生菴　孝因　不月　因翁　鳩杖子　頭菴　孝發意　月翁とも前山州大司馬などゝ書し筆跡もありとぞ南都古梅園松井和泉掾ハ柳翁かねて懇意なりしが家製の大墨二品ありし方壺眞人といへるハ角にして徑一尺四寸橫一尺二寸厚二寸五分重二十斤餘大玄鴻寶といへるハ圓形にして徑一

南都松井和泉掾家製大墨

大玄鴻寶

表



径　壹尺四寸　厚　五寸五分

圍　壹尺八寸　重　二十斤余

裏

貞柳翁　圓かな墨の五丁して呼て登るといふ狂哥を詠しハ此二品の大墨をもつて是より油煙齋と稱せらる

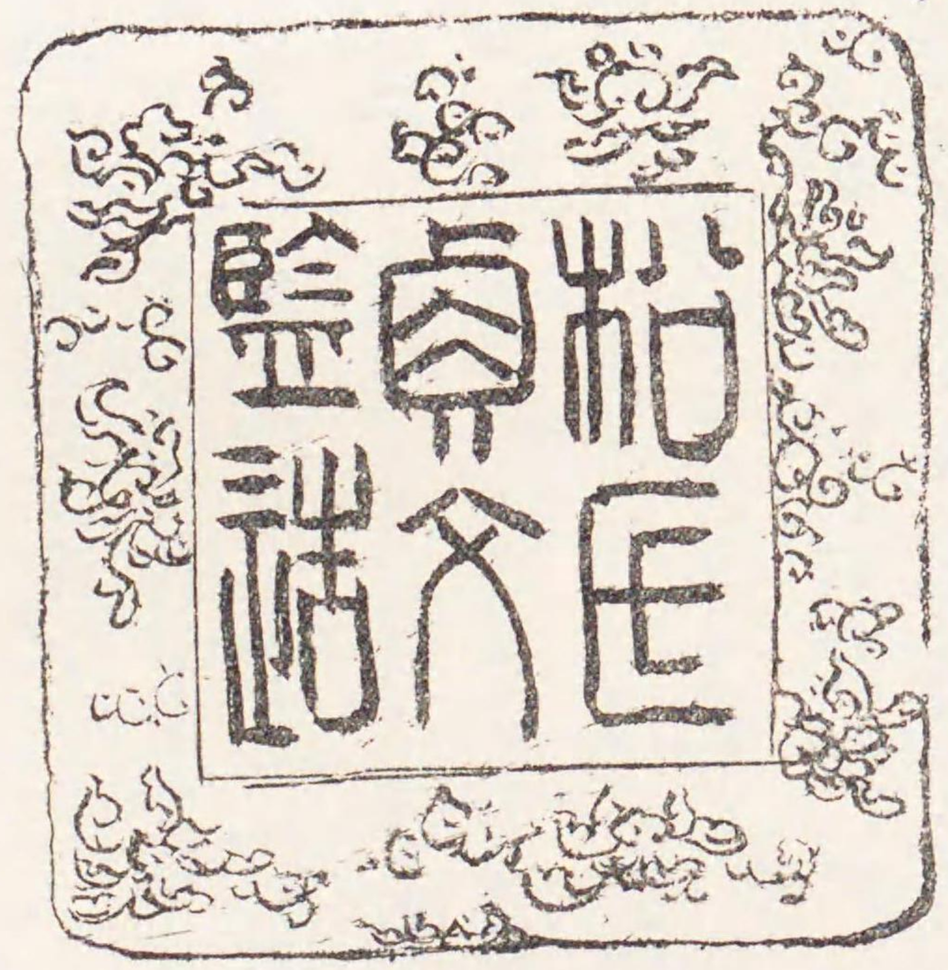
方壺眞人

表

竪　壹尺四寸　厚　二寸五分

横　壹尺二寸　重　二十斤余

裏



尺四寸厚二寸五分圍一尺八寸重二十斤餘時ありて享保十一丙午年八月十五日　靈元法皇御所御覽に入同年九月十六日禁中に聞え叡覽に入りしを柳翁聞及ばれて　月ならで雲の上まですみ登る是ハいかなるゆゑんなるらん此哥世上に廣く稱しもてゆくまゝ誰いふともなく油煙齋ともてはやし世に此哥を知らぬ者もなく遠き雲井の奥よりあやしの賤の男までも油烟齋の名ハ普くゐりて狂哥の道に於てハ實に譽れなりし戔なり

是ハいかなるゆえんなるらんと讀るうたを京童の風聞さま〳〵あると聞て

我哥のきこゑあげぬるゆえんこそ墨よしさまの惠なるらん　貞柳

油煙齋と世にうたはるゝころもきぬ心をすみに染まほしさよ　同

七十に餘りて後の油煙齋彌陀の淨土をすみ所とて　同

大岡春卜墓

同寺町のならび光明寺ニあり　寶暦十三年癸未六月十九日卒　行年八十四

春卜ハ大岡氏名ハ愛童雀叱と號す浪花松江町に住居す其法狩野氏を學んで常の師なく土佐家の風をも兼備し名譽時に高く實に近世の名手なり嘗て法眼位に敍す就中一夏九旬の間ハ夏書と號し何ほど職業繁多の節にても一日に一佛を畫く是等にて其道に志厚きを知べし偖亦弟子を敎導するハ一より百まで素書の繪を常にゐたゝめ置て夫を貸て學ばせ或ハ寫させしむ故に其時に臨んで畫き與ゆると言ことなし譬バ三拾番素書相濟しとあれバ

第卅一をかして習わせ以前の手本を取かへし又取かへてハ貸し如此次第々〳〵に百まで素書終る事なり尤辨理なる仕法にこそ　扨百番の素書濟たる後ハ古人の粉本を摸さしめしとぞ　筆力雄偉にして平生板間に於て畫をなせしとなり　人物を第一とし次に花鳥其次に山水といへり　一年播州室の明神に參詣す此社に古法眼の扁額あり記して曰狩野大炊介元信筆願主彌延長門守と畫ハ神馬二疋連錢月毛なり此頃ハいまだ繪馬堂に有しを春卜見て神主の家にいたり繪馬を下し拜見いたし度よしを願ひけるに望みに任せ卽刻座敷に通し繪馬を下して見せけるに良ゐばらく眺め入感心の躰にて一段其席を下り低頭平伏しさても能出來させられたり定めて御滿足なるべしと現在の人に言がごとく感悅の挨拶をなし頓て旅宿へ皈り逗留のあいだ旅亭にて此圖を畫き當社へ奉納せられけるが奇異なるかな妙なるかな元信の畫に寸分違ハず是を見るもの感心せずといふ事なし斯有し程に其時より古法眼の畫馬を寶藏に納め彼春卜の繪馬を堂に掛をきしが後に又春卜の畫に妙なるを慕ひて弟子となりし當所の何某師の畫を摸して當社に奉納し春卜の繪馬を寶藏に納むとなり故に今繪馬堂に掛たるハ彼門人の畫なりといへり　因ニ云　春卜子なくして有元氏の子を世嗣とす名ハ甫政春川と稱す能家法を傳へて法眼位に敍す安永二年ニ沒す同所ニ墓あり

極樂橋

下寺町の北の口ニあり此所いにしへハ川なりしが今ハ大溝となれり是より南ハすべて寺院立つゞきたるが故に極樂の名をつけしなるべし

古老云　此大溝ハ古への川條にして是より西へ流れ千日の三昧　今野澤の清水川　より西へ難波村に流れ瑞龍寺のといふ立石あり

門前の井路川を南へ流れ鵭川に會して海にいる　土人の曰　難波村井路川にいたつて奈岐の川といへる字ありと按ニ難波村に柳の清水　柳堤の名あり若や柳の川の畧語ならんか

然るに延享元年高津新地開發の後新地川開鑿によつて東西の流れを斷切東ハ新地川に流れ入西ハ別の流れとなりて千日の三昧の流れに存せり爾後又難波の新川を開鑿あるによつて此流れハ新川に入其西ハ難波村の井路川となれり故に一條の川の中にて横に二條の新川出來て大溝二箇所と井路川と三に別れ古風を廢すとそ扨又此極樂橋の邊より南ハ往昔東側の寺院のみにして西側に人家なく且寺々の塀も藪墻なりしとぞ俳師來山が今宮草に下寺町の藪だゝみもいつしか白壁になり變りて門々高く續きて樓々甍々たり云々されバ今宮の來山が草庵より下寺町の白壁を見わたせし語なり今ハ西に人家建列なり更に眺望すること能わず又小倉敬典の云　寶暦年間の頃なるべし予が母の言に我幼少の時分極樂橋にて墓詣の花を求めざれバ夫より南に花賣家ハなかりしと申されし是も今にてハ昔し語と成行といへり實にや今時ハ市中となり殊更道頓堀より新淸水天王寺等への道すじなれバ四時ともに往來繁く別て春秋の彼岸庚申日初秋の千日詣等にハ老若男女羣集して最賑わし原來此通りハ北ハ天神橋より長柄まで一條の街道にて浪花無雙の通條なり

大蓮寺

下寺町北の端にあり如意珠王山極樂院と號す淨土宗　文祿年間應運社顯譽魯道泰純上人泉州堺より此地に來り開基ありしなり其はじめハ今の三津寺のほとりにありしが中頃西横堀の川のほとりに移しけるが元和年中當所に引けり本尊阿彌陀佛ハ多武峯の沙門定惠の作なり觀音堂中尊千手大悲尊ハ惠心僧都の作藥師堂の本尊石佛ハ泉州堺より夢中の告ありて當寺へ移らせ給ふ鎭守祠は天照太神辨財天菅神等なり

西澤一鳳墓

同寺町大蓮寺ニあり近松門左衞門同時の作者にして淨瑠璃の戯作あまたあり　法號常譽貞寂禪定門と碑面ニ勒す

傳云　一鳳ハ俗稱ハ正本屋九右衞門とて浪華心齋橋南へ四町目に住し書林の板本なりしが戯作を好みて淨瑠理を許多著ハせり就中世に聞へしハ五山建仁寺供養　井筒や　戀寒晒　賴政追善芝　女蟬丸　昔米萬石通　南北軍問答　身替弓張月　本朝檀特山　北條時賴記　其餘　操　年代記に委く見へたり別て近松が國性爺ハ竹本座に名高く豐竹座にハ西澤が時賴記と當りを競ひ二ケ年が間も打續きたる狂言を殘せり享保十六辛亥年五月廿四日沒す

辭世

散ゆくや風に常磐の木の葉雨　行年六十七　一鳳

淨國寺

同大蓮寺の南ニあり無量山金立院と號す開山ハ寂蓮社圓譽上人文祿三年の草創なり本尊阿彌陀佛長二尺三寸慈覺大師の作なりしを第六世三譽不樂丈六の彌陀佛を彫刻して右の本尊をバ内陣佛とす又藥師佛の尊像ハ春日佛師の作と聞ゆ靈驗すこぶるあらたなり

一說に舊此寺ハ東堀に有しを後に今の順慶町の西に移し又爾後當所に引うつせしとぞ今尙其跡を淨國寺町と號せり

生玉寺町の大寶寺もはじめハ今の嶋の内にありしを後に引うつされしゆへ今其あとを大寶寺町といふ　是等も淨國寺同日の論なり

夕霧墳

右同寺ニあり碑石臺石ともに惣長六尺許にして勒して曰　花丘芳春信女　（岳）

延寶六戊午正月六日　俗名扇屋夕霧

下寺町條
彼岸詣

極楽橋
大蓮寺
観音堂
多宝塔
鐘楼堂
薬師堂
観音堂
阿弥陀堂
観音堂
観音堂
観音

其二

四天王寺
聖天宮
法華寺
鶴林寺
太子堂
西方寺
観音堂
地蔵堂
観音堂
地蔵堂
善福寺
太平寺
浄瑠璃寺
地蔵堂

大阪城
善龍寺
地蔵堂
観音堂
称名寺
西蔵寺
石鳥居
石賀寺
地蔵堂

其三

然るに世俗此碑石をかきとりて煎じ服すれバ勞症の病氣全快すと言ならわせしよりして數年棹石をかきとり終には形をうしなひ今ハ臺石の上に蓋の石をのせて其跡を存するのみ最おしむべきことなり　中段の臺石に令辭不絶具足十念稱の文あり

この寺に詣て　此墳ハ柳なくてもあわれなり　鬼貫

傳云　夕霧ハ都嶋原の傾城にて扇屋四郎兵衛といへる嫖女家の抱へなりしが同所桔梗屋意得といへるもの廓中と意味合ありて大坂へ引越ける故この扇屋ハ廓に於て何の譯もなかりしかと意得と懇意なるにより思ひ立て同時に大坂へ引越ける頃ハ寛文十二子年なり此夕霧下るといふ噂浪花中に流布し今日よ明日よと日毎に大川すじの見物をぴたゝしく時に夕霧始め京女郎の下るといふ哥を作りて當津名物のまがき節をつけ遊客廓中に入こみ揚屋に興を催しける斯有し程にいづれとも京女郎の分ハ繁昌なりし中にも夕霧ハ聞しに勝りて美艶なる事實に芙蓉の露を含めるが如しと普くもてはやしける其上萬藝に達し行義發明言語にのべがたしと或書に見へたりされバ全盛日々にまし一時に方々の揚屋より大盡の招き繁けれバ餘りに勤めがたくて毎日鹿子位女郎を一人づゝ我手まへより揚て召つれ諸方より一時に客來る時ハ此鹿子位女郎を先の揚屋へつかわし座をもたせ置て其間に前の座敷の透を見あわせその所へ行て勤めけると也夫より前に當津の太夫職において禿を二人連るハあれども鹿子位女郎を自ら揚て連たるハ此夕霧を始とす今ハ是を引舟といふなり　いさゝか風儀は大同小異也斯ばかり全盛の傾城といへども齡ハ力にも及バざれバ僅六年の後延寶五年の秋のころより病勞にふして醫療手を盡すといへども効を顯さず加持祈禱も露驗しなくて終に延寶六年年正月六日といへるに身沒ぬ時の人おしむこと松を離るゝ蔦かづらの如し　云々

誹諧集　兒の親手がさ厭わぬ時雨かな　夕ぎり

其頃哥舞妓芝居の立役元祖坂田藤十郎同年二月三日より夕霧名殘正月といふ外題にて　則　藤屋伊左衛門に藤十郎なりて傾城買の狂言にて大にはやり同年に右夕霧の狂言を四度出し翌年正月二日より又夕霧一周忌といふ狂言を出し三年忌又七年忌　十三回忌　十七回忌とて繰かへし〳〵延寶六年より坂田藤十郎死去せし寶永六年迄夕霧の狂言を出すこと十八度なりしが悉く大當にて有しとぞ是全く夕霧が全盛の德と藤十郎が妙手なるが故なり

一說に大坂に阿波屋何某といふ豪富ありて此夕霧に深く馴染病中にも心を盡し殊外深切なる世話をなし死後にも厚く追福をいとなみけり則九軒町吉田屋喜左衛門方の客なりしよし是を趣向に阿波の大盡と作り外題を阿波の鳴門とせり又富士屋伊左衛門といへるハ其頃船場に富田屋何某といへる豪家ありて廓に名高き大盡なりしを富田屋の田の字の畫を省きて士となし富士屋と名づくるとなり又其頃ハ揚屋ごとに其年の遣ひ高なる客人へハ紫の法樂頭巾を贈るを風俗とせしよし今尙彼富田屋といへる家連綿として其頭巾を持傳るとぞさる程に椀久の出拐(扮)或ハ盛衰記の源太など紫頭巾を着たるハ時の流行によれるものなりと言り又夕霧の文同襠等扇屋四郎兵衛が家藏す然るに近來當淨國寺に菩提の爲に寄附せしよし聞ゆ吉田屋喜左衛門方にも夕霧の文手道具等を藏す且夕霧追悼の卷あり凡三千章其中の一二を記す

夕ぎりに物うくひすやむせびなき　元順

夕べの霧朝の霞きえごくら　由平

釋迦堂

同寺町西側法善寺ニあり當寺ハ洛西嵯峨清涼寺の懸所にして本尊釋迦牟尼佛を安置す　長凡三尺餘立像なり嵯峨本尊の模彫といふ

聖天堂

同所圓正寺にあり大聖歡喜天を安す殊に靈驗あらたなりとて詣人間斷なく常ニ浴油華水供の修行あり大師御影堂北に列す

隨求堂

同所大泉坊ニあり本尊隨求菩薩を安す利益いちじるしとて羣參して香華を供ず脇檀に毘沙門天王吉祥天を安置す

中村白翁墓

同所良運院ニあり碑面ニ云　圓譽相徹白翁居士　明和丙戌冬十一月廿三日終　行年六十四　海内相家の中興と稱す委くハ碑文ニ見へたり略之

相者白翁姓ハ藤原氏ハ中村俗稱嘉右衞門又遺達花と號し或ハ白翁又南鍼と號す浪花周防町堺筋に住す其先江州葛川中村に居す故に氏とす　元祿癸未年京師に生れ廿八歳にして郭西翁に謁す　翁の曰汝命數三十餘に過ず然りといへども今よりして後ひたすら善行を爲ハ積善の餘慶を以て（却）返つて長壽を保つべし陰德を修するにハ人

を相して仁義の道を敎導するに如ハなし我に隨ふて相法を學ぶべしといふ是に於て酒色を斷心性をやしなひ專ら其術を學びことゞ〳〵く蘊を究め遂に風鑑を以て海内に聞ゆ四十八歳にして浪華に移り人相を以て世に鳴る實に人の存亡禍福壽夭をさすに一箇として的當ずといふことなし世人奇なりとして日々に五六十人集ひ來りて終年暇日なし髮を以て相家中興とす其術の精微の畧をいわゞ長町に河内屋某といひし旅亭の男子を相して紀算今月中に盡すべしといふ父母大に驚きこの災をまぬがるゝ法を只管に乞ふ中村の曰足下陰隲の功を早々累ね給ハゞ其善報にて子の夭札を救ふに至るべし何の疑ひか有べき事此月に迫りたれバ迂遠のはからひを止て生類を助命すること第一の捷徑たるべしと勸めけれバ親々ハ是を聞とひとしく有合す所の銀五百目を以て籠中の鳥をもとめ又食饌に具わりし魚を贖ひて放生しなど悉く右の銀子を用ひ盡し尙旦暮に心を傾け世財を抛て生るを助けて後彼親再び中村に面謁し鑒せしめけるに嘉右衞門大に喜色をあらわし公の陰德に依て災害の血色あとかたもなく脫したるぞ最早安堵の思ひをなすべしと判斷しけるとなり　又外に戒律堅固なる一寺の住職の僧を相して師にハ女難の相ありて汚名を得らるべし謹まれてよかるべしと諭しけるが是ハ至つてもの堅き桑門なるが故かの僧もきやうとき事に思われ衆人もいかに名人の中村もこハ見損じなるべしと疑ひけるが幾程もなく白晝に一個の若き女寺中へ奔り入て臺所を裏の方へ行ぬけ再び藪中へ身をかくして其後行方ふれずなりにけるが跡より追人と見へし男同く院中へ馳込て寺内を尋ね探し求むれども見へざれバ扨ハ僧徒の隱したるなら

めと公に訴へけるが曾て僧の知ざる事ゆへに速に濟しかども斯る清僧のはたして無實の女難を受られしに諸人白翁が相法の神に入たるを感じけるとぞ其餘の識鑒枚擧するに遑あらず尙一代の行狀ハ委しく碑文に見へたり

下寺街栽種戸

下寺町西側ニ軒を列ぬ平生に諸方より栽種をこゝに運送し市を立て交易す頗る繁昌なり　尤　種樹屋ハ當所および天滿天神の北の方に多し石解竹蘭の小き鉢ものより松櫻の大木まで庭にそだてゝもとめに應じてこれを鬻ぐいづれも風流に饗堂を装つらひて客をもてなせり

名産寺町草履

同所にあり藁蕊を以て作りし一重草履にして名物とす俗に寺町草履といふ

三才圖會云　草履周謂之屨夏謂之扉一曰不借言賤易有宜各自著不假借人也云云

遊行寺藥師堂

下寺町南の端ニあり時宗佛智山圓成院極樂寺といふ寺說ニ云　いにしへ皇太子の由緒ある古蹟なりとぞ

本尊　瑠璃光如來　立像長三尺六寸龍宮出現といふ

行者堂　本堂の前ニあり役小角を安す

觀音堂　同所ニあり

茶所　本堂の北傍ニあり地藏尊幷ニ小栗判官助重の像を安す

當寺ハ時宗の祖一遍上人天王寺參籠の時の寓舍なり遊行五十一世賦存上人これを求めて藥師堂を再營し遊行一派の道場とし給ふ抑一遍上人ハ伊豫國の住人河野七郎通廣の次男四郎通信弟別府七郎左衞門尉通秀ト云なり家富武門雄壯にして四國九州に名を以て鳴る時に二妾ありともに容色美にして寵愛隔なし一日棊枰を枕として兩妾相臥す其髪髻忽然と化して小蛇となり咬合を見るより嫉妬の執心ふかきを感じ出家して叡山に登り戒を受け且西山善惠上人に逢ひて本願念佛の法門に入る十一年を經て名を知眞坊と改め熊野に詣で行住座臥に念佛稱名の他なし本宮證誠殿に通夜して衆生利益の因を祈る時に老僧現じて曰一切の衆生六字の名號を以て稱名を聽聞する時ハ則皆佛種となるこれを敎化すべし乃ち七言四句の偈を授けて曰

六字名號一遍法　十界依正一遍體　萬行離念一遍證　人中上上妙好花

夢覺て其偈を書則ち上字當に六十萬人なるべし弟子を佗阿彌陀佛といふ隨身して西界東奥都鄙遠近廻國して老少男女を普く之を授與す相州藤澤に到り一宇の道場を造る攝州兵庫觀音堂に於て寂す正應二年八月二十三日年五十一今にいたつて歷代の上人寺を高弟に讓りて六十餘州を修行すること怠慢なし　公より數十の傳馬を賜りて廻國すすなハち當地巡歷の時ハ此寺に止宿あり

〔編者曰ク原本此ノ所插畫ノ豫定ニテ　公條　トノ書入レアルモ構圖ナシ〕

遊行寺　ト題シ　うきみをハまかせはてゝし雲水に歸るやいつく野への古寺

一一六

芭蕉翁碑

同寺境にあり高凡九尺銘ハ豊前國醫師香月牛山撰

石面ニ云　芭蕉翁墓　黄檗佚山筆

背ニ云　曼倩詼語　相如俳文　妙辭奇句　思入風雲

滋野井中納言公澄卿筆

碑銘曰　享保十九甲寅晩秋日

前豊倉藩醫官八十翁牛山香月啓益誌

桃青子姓松尾字甚賓號芭蕉翁產于伊賀宮于伊勢卒于難波其顚末載于野坡子之碑文故不贅矣余嘗觀世間九流百家稱師呼弟者生前懷其德者最多及身歿也報其恩者甚少何乎蓋學其道而未得則不遠千里來待事左

右而仰望其德是有所求于彼也既得之則棄之如辨髦以耻稱師況乎報其恩耶夫誹諧者和歌之一體也嗜之者稱之道而擇之師者不亦宜乎翁素嗜此道壯而致仕遂離鄉而到兩都及難波所之處門人弟子營室廬致衣食以給焉然其性洒落四壁而立所寓無突黔之地其動靜語默必於誹可謂此道之盟主滑稽之巨擘也嘗謂弟子曰誹諧者和歌之一體也古哲所謂和歌無師伸己之性情而吟咏焉而天下之口非一世與時相變矣以故格調亦自異猶和歌於今古唐詩於盛晩然唯顧結選道如何耳賴翁得此道解其惑者億萬翁然而化矣蓋關西東嗜此道者悉莫不爲之歸壹是皆稱其流亞就中野坡子傑然繼其緒以倡此道于四方當翁之七回諱辰遠來西肥縱更其門人而建喝于長崎乎自裁碑文復當十七回忌之歷來筑紫與其弟子相謀而建碑于筥崎今茲來赤間關劵防長以東迄難波諸州門生而彫刻石碑建于天王寺裏某所其他翁之墓散在諸州者一在江之義仲寺一在東都深川長慶寺其在洛之雙林寺者翁之門人支考所建云今野坡子所建者蓋難波翁之所卒地也是欲傳師德乎久遠而不朽謝師恩乎當已以不誼也一日野坡子

扣余門來告曰我既老矣建翁之五十回忌亦不可知故有此舉今年實翁之謝世四十一年云乞碑文余曰吾子之巧其勤哉余雖不敏不敢辭嘉奬其欲謝師恩之志爲誌云

勝鬘坂

右遊行寺の東南にあり是を上れバ天王寺勝鬘院の門前にいたるを以て名づくるなるべし　攝陽群談坂の部に源聖寺坂蛇坂安國寺坂等ありて勝鬘坂の名なし按に此坂安國寺坂ニハ有ざらん哉禪刹次第曰　攝州安國寺在天王寺とされハ往昔此坂の上に安國寺の有しもあれず後に廢して其名を失ひ勝鬘坂と號せしならんか

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ 乾社毘沙門祭　勝鬘坂 ト題シアルモ構圖ナシ〕

乾社

勝鬘坂の上にあり如意山神宮寺と號す四天王寺境内にして伽藍の乾にあたるをもつて斯ハ稱せり尤今ハ社司のみにして僧坊の類ひなし

本殿　**毘沙門天王**　社壇造りにして拜殿あり中央毘沙門天左右に吉祥天女禪膩師童子を祭る三像ともに聖德皇太子の御作と云

攝社　**天照皇太神宮**　本社の東傍にあり

佛堂　**道祖神社**　本祠の西にあり

本社の後の西にあり中央毘沙門天左準低藏世音右辨財天女を安置す　按ニ此堂ハ往昔神宮寺たりし時の遺風なるべし

例祭四月十五日　六月十六日　下寺町の西堀留の傍羽黑社といふまで神輿渡御あり天王寺の樂人音樂にて供奉す至つて古雅なる神事なり　いにしへハ神輿を葭島にいたして神供をそなふ是ハ　白河院永保二年に天下旱す其時此尊天を葭嶋に渡して雨を祈るに忽ち靈應あり此例による所とぞ今ハ此式絶てなし

三代實錄云　貞觀二年六月十四日從攝津國四天王寺上奏毘沙門像手持刀及塔形等拋擲壇下遣使看修法謝怪異云云

伶倫第宅

右同所の南にあり樂人町といふ　天王寺の樂人あまたこゝに住す

伶人の門なつかしや春のこゑ　其角

徒然草云　何事も邊土ハいやしく頑なれども天王寺の舞樂のみ都に耻ずといへは天王寺の伶人の申侍りしハ當寺の樂ハよく圖を調べあわせて物の音のめでたく調ほり侍る事外よりも勝れたり故ハ太子の御時の圖今に侍るをはかせとす所謂六時堂の前の鐘なり其聲黃鐘調のもなかなり寒暑に隨ひて上下り有べき故に二月涅槃會より聖靈會までの中間を指南とす祕藏の事なり此一調子をもちて何れの聲をも調べ侍るなりと申き凡鐘の聲ハ黃鐘調なるべし是無常の調子祇園精舍無常院の聲なり西園寺の鐘黃鐘に鑄らるべしとて數回いかへられけれどもかなわざりけるを遠國より尋ね出されけり淨金剛院の鐘の聲又黃鐘調なり

皇太子四十一歲の御時百濟國より味摩之といへる樂人來りて伎樂管絃の曲を始めて我朝に傳へたり太子かの

樂人を召れ大和國櫻井村にて秦川勝川滿が子をはじめ多くの童子を聚めて是を習しむ當四天王寺に三十二人の伶人を定め置れ三寶供養の砌ハ音樂舞曲を奏して佛恩を讃嘆ありしより已來朝廷をはじめ諸寺の法莚にかならず樂を奏すること風俗となれり此味摩師といふ樂人ハ百濟國の人にあらず震旦吳國の人也三韓へわたり爾後日本へ來るなり吳國ハ今の南京なり周の代より漢の代に傳わり漢より吳に傳ハれるなれバ上古聖人の天下を治め給ひし禮樂なり唱歌ハ亡びしかども音樂は存在せり當所の伶人ハ秦氏にして右方左方の二流あるうち右方の樂人なりとぞ例年正月十九日には舞御覽とて　禁中紫宸殿の階下に於て舞樂あり當所よりも上りてつとむ

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ　伶倫之名家　ト題シアルモ構圖ナシ〕

〔編者又曰ク原本此ノ所三行空白〕

名人播磨守第宅

同所ニあり　東儀氏といふ

安永天明の頃當所の伶人に東儀播磨守といふあり其父出羽守いまだ知命の齡にも充ずして職事を勤められけるにぞ自らハ家の業に携ハらず樂曲ハ實に五常樂一曲だに識ず　原來文筆とてハ聊も學バずして成長せり然れども盛夏隆冬の差別もなく朝暮釣竿を携へ漁をのみ樂みて日を送られしに父出羽守はからずも物故せられしにより取あへず音樂を勉勵せられける元來豪放不羈の生(性)質にて小節にかゝわらず浩然の英氣をよく養ひし上に息の長大なるに拍子の利たれバ僅の年月の間にいかなる古老の人にも感伏するほどに勝(上)達せられける　代々篳篥を吹家なりしが此義嘗ハ世人さゝるごとく攝州鵜殿の葦の太く厚き事恰も竹の皮肉の如き物なれバ是を薄く刮て紙の如くせざれバ吹得られぬ物なるに此播磨守ハ只其まゝ熱鐵にて押平めたるばかりにて事もなけに吹れけるハ實に怪しき强き息にて有ける是ハ腹中健にして氣海丹田より出る剛氣の息なれバなるべし夫ゆへ管のひゞく事鐘の調子高く永く鳴がごとし爾のみならず拍子の程よきを兼たれバ聞人毎に耳をかたむけざるハなしされバ三方の樂人あざなして名人播磨守と稱しける年若き樂官ハ此人の堪能を羨みて一途に此風韻を蹈襲し學バんとのみしけるを播磨守とゞめて曰我癖を倣ふ事なかれ河内守の吹るゝこそ正直なれバ偏に彼人を摸範とすべしと差圖いたされけれども何分其程拍子のおもしろきに心醉して一統に播磨守に從事しけるも　理なり播磨守若輩へ教誨せられし詞ハ深理ある事にて今按ずるにかやうに强く我意に任せて曲吹にすれバ笛簫の二管ハともに推排られて其音色を失ひたゞ篳篥ばかり聞へて合奏の本意を失ふに至る故なり三管ともに淳朴に吹ときハ三管ともに能和しよく聞へて眞の合奏といふものなれバなり斯る道理を演舌して己を排け自餘の人を稱

譽せられたるにつけても卓越の藝たること知べし是さかしながら老子の所謂知其雄守其志の謂か勿論管へ遠方へよく徹するを譽れとする物なるに此人の筆築ハ天王寺より上本町八丁目まで聞へてさかも其樂曲まで分明にありしとぞされバ名人播磨守と世に褒稱せられけるも理とぞ覺ゆる也　浪花奇談

攝津名所圖會大成　卷之四　畢

攝津名所圖會大成　卷之五

浪華巽之部

勝鬘院　愛染堂　多寶塔
舞臺　有栖川古跡　開山塔
貞柳碑　瀑布
増井清水　安居天神
合法辻　引導地藏
黒門　觀音堂　戰死墳　來山碑
貞右碑　眞阿上人墓
熊野王子祠　四天王寺
湯屋方丈　茶堂　相輪塔
二王門　十五社　南大門　寶　金堂
西門之井　納骨所　山王權現社　藏　龜井水
普門院　引導石　衡門　衡門扁額　石舞臺　大寺之池
大黒堂　僧坊　東門　影向石　聖靈院　文殊堂　五智光院　轉輪藏　閼伽井　經書堂　御供所
寶殿　下馬標石　守屋祠　辨天社　秋野坊　太子堂　椎寺　妙見祠　萬代池　年中法筵
繪堂　經堂
家隆卿墳　同碑　舊栖之松　新清水寺　本堂　子安地藏堂
土佐清水　浮瀨奇杯　金龍清水
安井清水　相坂　相坂清水
一心寺　本堂　三千佛堂　開山堂　彌勒堂　開山廟所
寶庫　駒繋松　妙蓮社庵室　數奇屋　八股椿
茶磑山　牛市遺趾
觀音堂
轉法輪石　五層大塔　講堂　鐘樓　鼓樓
上之池　下之池　六時堂　食堂　行道　梅
石神祠　三味堂　御宮
西門　重門　引聲堂　短聲堂
榜　萬燈院

名産干蕪　同粮　六萬體　梓巫女　駒ケ池地藏
五條宮　蘆間之池　出池多聞天王　壽法寺絲櫻　同　楓樹
齒神祠　俊德街道

勝鬘院愛染祭

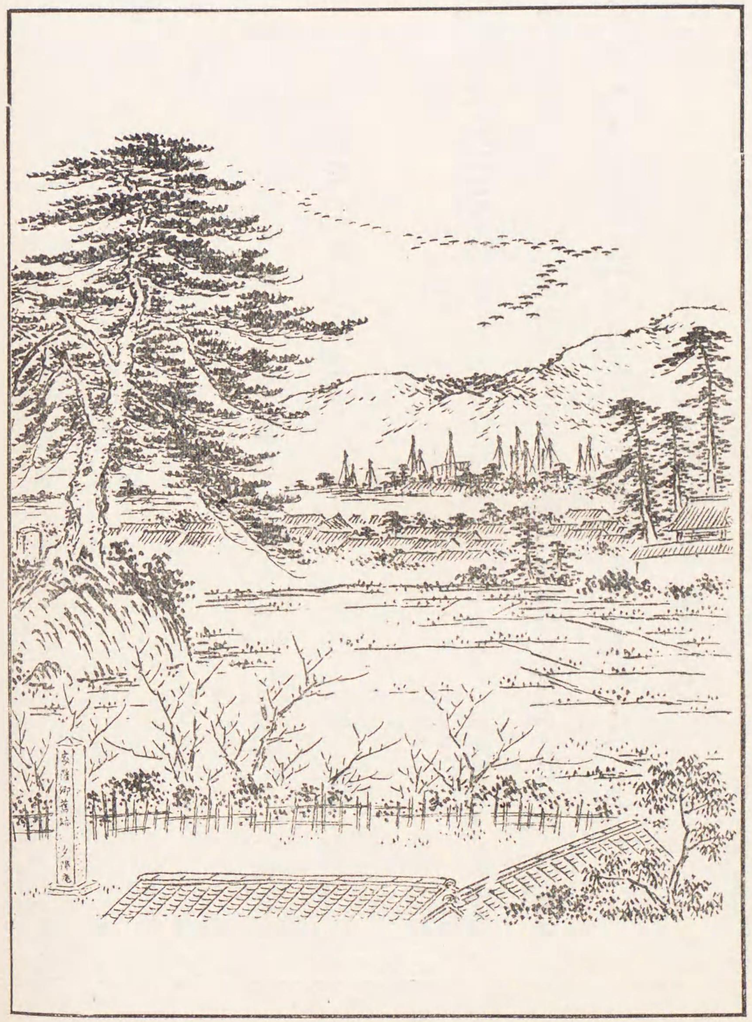
蘭若叢中一界開　勝鬘阪下酌芳醅
朝朝香火何攸祈　愛染祠前染愛來

源華城

例年六月朔日ハ本尊愛染明王の開扉ありて諸人に拜ましむ俗にこれを愛染まつりと號す浪花夏祭の最初にして老若參詣して羣をなす就中傾城遊女俳優をはじめ衆人の愛をうけんと欲するもの歩を運ひて愛敬を祈るがゆへに往來花麗にしていと賑わし

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁半插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

家隆墳舊栖之松



拾遺

行末の
あるし
はかりに
のこるべ
き松さへ
いたく
老にける
かな

源道濟

新古今

何となく
聞は涙そ
こぼれける
こけの袂
にかよふ
松かせ

宜秋門院
丹後

勝鬘院　乾の社の東ニあり四天王寺境内に屬す　例年六月朔日本尊開扉あり愛染祭(と)號す遠近より摹參して最賑わし

本尊　愛染明王　座像長三尺許　脇壇　勝鬘夫人像　座像長三尺許

多寶塔　本堂の後ニあり大聖金剛を安置す二重の寶塔なり

家隆卿墳　右同所の後田圃の中にあり此所の地名を夕陽山といふ塚上に大樹の古松あり舊栖の松と稱す又傍に夕陽庵と號するあり是を舊趾とす

家隆卿は前中納言太宰權帥光隆の二男にして壬生二位宮内卿と號す本名ハ雅隆母ハ太皇(太)后宮(權)亮實兼朝臣の女なり俊成卿の門弟にて定家卿と相雙びて和歌をよくす新古今集の撰者五人の内なり著聞集に云　家隆卿ハ老に及びて佛道を信じ嘉禎二年十二月廿三日年七十九病によつて出家し攝州天王寺に行き翌年彌陀の本願に皈し念佛の外他なく四月八日和歌七首を詠じ翌九日酉の刻往生すと云々　其詠哥七首の中に

天王寺にてやまひかきりになりにける最後の哥七首の中

夫　木　難波の海雲井になして詠(む)れバ遠くも見へず彌陀の御國ハ　從二位家隆

契りあれバ難波の里にやどり來て浪の入日を拜みつる哉　同

此詠よりして地名を夕陽山といひけるにや又享保年中安井御門跡大僧正道恕公の御撰の碑を四十二世秋野坊法印盛順こゝに建らる

攝州東成郡荒陵從二位家隆藤公墓碑以上篆額

從二位家隆卿墓碣銘并ニ序

大和歌王者之德也國風之始也通乎三才分乎六義託素鵝八雲之神詠祖宗於人麻呂赤人二仙自爾而後其道英傑代不乏人出其類拔其華不羣之思飄逸之詞獨步古今者其惟公乎公姓藤原諱家隆歷事七朝叙從二位累官至宮内卿其先出于閑院左僕射冬嗣公祖考猫間黄門清隆卿賜采壬生逮公相踵食邑故號壬生二位考權中納言太宰權帥光隆卿妣太皇太后宮權亮實兼朝臣女初公從寂蓮游大夫入道釋阿門執弟子禮每就尋繹和歌奥旨然直訪大意不必究細故俊成恒歎曰不意後生能至於斯也其將以和歌鳴乎可謂未來歌仙矣元久二年春三月　勅撰新古今和歌集五輩俊彦允膺嘉選公居其一數遇後鳥羽上皇眷注時名與定家抗衡貞永元年冬定家奉　旨奏新勅撰集集中采摭家隆和歌最多當時以爲榮　上皇預政事暇與攝政良經公論國風事公奏請家隆末代人麻呂也　上欲學此道宜師其風體焉繇是賢聲高蜚鴻業日漸西行上人自詠三十六番和歌是曰御裳濯川宮川歌合請俊成定家判之縹緗脩飾每自隨身一日携來授公曰精微之蘊盡在斯書圓位往生自期

在瀬後生知歌如公者其可得耶我有所思謹以奉遺也松殿僧正行意疾篤假寐忽夢詣志貴山毘沙門見一神人呼行意名唱一首歌琅誦之聲感盪心耳驚覺病乃瘳其歌公建保年中九月十三夜侍内宴所詠河月歌也其妙通鬼神如此矣嘉禎二年冬十二月嬰病罷官落髮自稱曰佛性年七十有九浪速荒陵北擇不食地謝絶人縁遁迹閑邃游心樂邦三年夏四月八日自詠七首和歌蓋取諸悔罪之意詰旦澡浴更衣住日想觀西剋端坐合掌如睹眞身之迎接安祥而逝報齢八十歳留葬其居植以松標歳寒心使人永懐勿翦去今也四百有餘載遺趾猶存然而荆棘之所穢鞠爲樵竪之區近日詞客之徒翹慕德音欲勒堅珉以文設節祭以饌俾後勿廢而丐辭於予嗚呼予之不敏豈能足記公之德哉不得已遂銘其詞曰　休矣先達含華體玄詞花言葉一時歌僊元久奉勅撰集愼徽芳蘭吐蘂明錦脱機　上嘉其忠寵賚非一附鳳攀龍鴻猷贊隲往古百代作者孔多迄今有聞其能幾何荒陵之丘君子所憩兆塋蕪穢可爲流涕其身既歿斯文未喪咨公之績萬世彌彰

享保第六龍集重光赤奮若秋九月下澣

東寺檢校法務東大寺別當兼華嚴宗長吏安井門主大僧正道恕撰拜書

沖の日の竹にうつるや鶯の　伴自
ほと、ぎす鳴や七首の哥のかず　鶴人
名残をしや櫻の中に入日影　蝶夢

有栖山新清水寺

勝曼院の南にありはしめハ有栖川寺と號す延海阿闍梨の開基也

本尊　十一面千手觀音　聖德太子の御作　脇士　地藏尊　毘沙門天

西國巡拜靈場　本尊觀世音　本堂北の軒にあり三十三躰を岩山の上に安置す

子安地藏堂　本堂の東にあり　舞臺　本堂の前にあり是よりはるかに眺むれバ遠山滄海の風景絶妙にして京師の音羽山にもおとらざる勝地なり

有栖川古蹟　本堂の南にありしが近年あらたに瀧の流れを造るにより古跡を廢す一説にいにしへ齋宮の女御難波の祓所田蓑のしまにて行ハれし砌洪水なりし時この有栖川にて修し給ふと云

瀑布　本堂の巽の方にあり近來多力の寄進により成就する所なり

瀧の下に不動明王ならびに兩童子の石像あり

開基延海塔　舞臺の下にあり　由緣齋貞柳碑　石階の下にあり碑文こゝに畧す一本亭芙蓉花の建る所也狂哥家土産に委し文政十二年巳丑八月柳翁の百回忌の追福として古墳の傍に新に碑を建て手向の狂哥を勒して云

五百生てもかりの浮世に夢の宿寢てハ極樂さめて苦の娑婆　鯛屋柳賀

同傍に云

月に雪に花をのこせしこけの下とふらふ日こそ先たいやなれ　鬼粒亭力丸

尚一本亭芙蓉花　一睡亭海棠花　一本亭魚鱗等の碑傍に列す

龜の上に油煙の文字を殘せしハ歌にかう有印なるらん　玉雲齋貞右

戌八月十五夜は貞柳翁の三十三回忌正當なれば
新清水の石碑に詣ふてゝ

石に彫た文字の油緣を今一度逆朱となせよけふの月影　貞右

當寺ハ開基延海阿闍梨寛永十七年京師音羽山清水寺より此本尊をこゝに迁し享保年中新清水寺となれり近來本堂の南の傍を開きて溪を造り巖石を以て岸を築き水脈を引て瀧の流れをなし且不動明王兩童子の石像を安置し左右の丘にハ花紅葉の樹を數株植て春秋の瞻望とす皆是多力の寄進より成就する所にしてひとへに大悲の靈驗あらたなるがゆへ信心隨喜のなす所なり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ新清水寺ト題シ（玉葉）水とのみ思ひし物を流れ來る瀧ハおほくの絲にぞありける　僧正遍昭トノ書入レアルモ構圖ナシ〕

土佐清水

同北坂の下ニあり古くハ有栖の清水あるひハ觀音の清水といへり傳云土佐の大守浪花中の名水をゑらみ給ひし時此水最上の名水なりとて此地面を買求め給ひしより四面を圍み錠をおろし土州御用水と標札をうてり

浮瀨　土佐清水

此宴席ハ新清水の坂の下にありて西南の眺望よく庭中にハ花紅葉をはじめ四時に花ある草木を植て遊客を慰む頗る興ふかき勝地なり

稻妻のある夜ゑらせよ四郎右衞門　淡々

ひとつなる人に見せばや津の國の難波あたりの浮むせの月　貞柳

奇杯之圖　浮瀨所藏

荒陵南畔地侔臺　浮瀨樓高衆景開　知道常延鯨飲ノ客ヲ應需便進鰒魚盃　荒井廉平

其昔海より出て清水へみを捨てこそ浮む瀨の貝　梅好

〔編者曰ク原本此ノ所貳丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕